【閲覧注意】朧気な夕暮れに映る面影　（ＢＩ　Ｔｈｉｒｄ）

高杉晋太郎

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
【閲覧注意】朧気な夕暮れに映る面影　（ＢＩ　Ｔｈｉｒｄ）

【Ｎコード】
Ｎ０７５５ＬＦ

【作者名】
高杉晋太郎

【あらすじ】
「ブラックイット」シリーズ、第３弾。

Ｒ１８化で、他の作品のように性器破壊等残酷な描写が出てきますので、苦手な方は気をつけて下さい。前作を読んでくれた方は、Ｒ１５とＲ１８に別れていた物がまとまったと思って下さい。

人と魔が混在する世界で人間を守る為に戦う青姫、朱姫、白姫、玄姫。四姫と呼ばれる彼女たちの戦いの物語。「ブラックイット」「

移ろう季節に想いを馳せる君」に続く物語ですが、前作を読んでいなくても問題ありません。
Ｒ１５からＲ１８になり、さらにグロくなりますので苦手な方は気を付けて下さい。

1話、新たな始まり（前書き）

「ブラックイット」「移ろう季節に想いを馳せる君」に続く3作目です。前作はＲ１５で書いていたのですが、所々Ｒ１８で書いていたので読んでくれる方も面倒だと思いましたので、今度は最初からＲ１８で書いていきます。
内容は前作でシヴァが倒れた後のお話となります。
Ｒ１８にした事で、酷い内容になるかも知れませんのでご了承下さい。生き残った明日菜と雛子は引き続き登場予定です。よろしくお願いします。

1話、新たな始まり

1話、新たな始まり

住宅街から離れた位置にある廃工場。元々は自動車のドアや窓のパッキンを作る工場であったが、そこに人の姿が見えなくなって久しい。今では広い敷地に雑草が生い茂り建物も半分以上朽ち果て、もうそこに近付く者は皆無だった。
そんな廃工場の深夜、光のない真っ暗な工場の中何かが蠢いている。
そして、その工場に何かが引き摺られていく。

ずるっ　ずるっ　ずるっ　ずるっ　ずるっ

そして、それは廃工場の中に吸い込まれるように消えていった。

＊　＊　＊

山本梓は学校に行くのが憂鬱であった。ちょっとした事で一部のクラスメイトに目を付けられイジメられるようになっていたからだ。たまたま見つけたアクセサリーが学校で話題になり、それまで自分の持っている小物がいつも注目されていた吉田深雪の反感を買ってしまったのだ。それから梓はことあるごとに深雪たちにイジメられる様になっていた。元々友人の少ない梓であったが、その友人たちも深雪の怒りを買うのを恐れる様に離れていってしまった。今では

梓は話しかけてくれる人もいない孤独な毎日を送っていたのである。

・・あーあ、学校行きたくないなぁ・・

梓はそう思いながらも校門をくぐっていた。そして、上履きに履き替えて教室に向かう。すると、いつもは教室の中にいる深雪が廊下で梓が来るのを待っていた。梓は顔を臥せ、お早うございますと挨拶し教室に入ろうとしたが、そこで通せんぼをされてしまった。

「ちょと、何勝手に教室に入ろうとしてるのさ。それに、よく平気で学校来れるね。私のやり方が甘かったのかな。来なよ、もう学校に来られなくしてやるよ」

しかし、梓は足が震えてしまって動く事が出来なかった。

・・嫌だ、またイジメられるの。もう嫌だ、誰か助けて・・

梓は心の中で救いを求めるが誰も梓を助けようとする生徒はいない。生徒どころか教職員でも梓を助けようとする者はいなかった。誰もが自分に被害が及ぶのを怖れて見て見ない振りをしていたのだった。

「何、固まってんの。早く来なよ。みんな、待ってるんだよ、人気者だねえ梓は」

・・みんな……。みんなって何?私、今日は何されるの・・

梓は、足だけでなく体全体が恐怖で震えてしまっていた。だが、深雪は梓の腕をとると強引に連れ出していく。知らない者が見れば仲良しの女子が二人で歩いているように見えるが、深雪と梓の関係を知っている者からすれば、これから梓が酷い目にあうという事は確

信出来たのである。

「みんな、お待たせ。主役が来たよ」

「おせえぞ、深雪。待ちくたびれたぞ」

体格のいい男子生徒が深雪を睨み付けたが、深雪は気にする様子もなく、梓を連れて歩いていた。ここは校舎とは別の体育用具室だった。この場には男子生徒が5人、女子生徒が3人いた。いつものメンバーであるが、みんな梓を見て興奮した様に舌舐めずりをしている。

・・なに？いつもと違う雰囲気だよ。私、何をされるの・・

梓の不安は大きくなるばかりだった。

「あんた、いい根性してるよね。私たちが苛めてやってあげてるのに平気で学校来るからさ。私たちが甘かったわ。もう今日で学校来れないようにしてあげるからさ」

女子生徒の一人、大八木真澄が言うと、周りから笑い声が起こっていた。

「ほら、真ん中に立てよ」

男子生徒の本間雄一に命令され、梓は深雪や本間たちが周りを囲む中心に立たされ震えていた。とても逃げる事は出来ない。深雪たちのイジメから逃れる為には登校しなければ良いのだが、親に心配はかけたくないため梓は真面目に登校していた。それが、また深雪たちの反感を買ってしまっていたのだ。

「よーし、撮影準備は良いよな」

本間が周りに確認する。深雪や真澄たちは全員が笑いながらスマートフォンを構えていた。

「梓、スカートを捲れ」

「えっ……」

梓は思わず聞き返していた。

「本当に馬鹿な女だな。スカートを捲れって言ってるのが分からない。いつもみたいにゲロ吐くまで腹殴ってやろうか」

「ひっ……」

梓は小さく声を上げ、スカートの裾を掴むと捲り上げていた。梓のスカートの下から白い下着が露になる。

「はは、優等生は校則通り白い下着穿いてるんだ。もっとスカート上まで上げて、足を開きなよ」

深雪が梓に命令し、本間も早くしろと眼で威圧してきた。梓はスカートを腰まで捲り、足を大きく開く。梓の白い下着は完全に丸見えだった。

「じゃあ、そのままおしっこして貰おうか」

「えっ」

「えっじゃないんだよ。本当に頭の悪い奴だよね、梓。そのまま、おしっこしろって言ってるの。わからない」

深雪の目を見て梓は、それは冗談ではなく本気で言っているのだと悟った。周りを囲んでいる男子も女子も、梓が漏らすのを今か今かと待ち構えていた。

「ほら、早くしろっ！待ってる方は大変なんだ」

本間が梓を怒鳴りつける。周りからも早くしろと怒声が上がっていた。

「ううっ……」

梓は泣きながら下腹部に力を入れて息んでいた。

2話、辱しめられる梓

2話、辱しめられる梓

「漏らせ、漏らせ、漏らせ」

女子からも梓に向かって容赦ない声が浴びせられる。

・・ううっ、誰か、助けて・・

梓は泣きながら下を向いて息んでいた。

「なにやってんの、ちゃんと顔上げて見せるんだよ。撮影してやってるんでしょ」

深雪が梓に命令する。前を向いた梓の顔は涙で激しく汚れていた。

「汚ったない顔。ブスの顔が、もっとブスになってるわ。笑えよ、ブス。撮影してると言ってるの分からない」

梓は無理に笑顔を作るが、どうしても引きつった顔になってしまう。そして、尿を出そうと息んでいた梓は、ブッと大きく放屁してしまった。

「おい、このブス、俺たちの前で屁したやがったよ。信じられねえ、ブスだ。しかも、臭せえぞ。ブスの屁は毒ガス並みだな。早く扇げ、

鼻が曲がる」

周りの男子たちに騒がれ、女子にも指を指され笑われた梓は、あまりの恥ずかしさに消えてしまいたかった。

・・もう、嫌だ。なんで私ばかり・・

「静かにしなさいよ、梓がおしっこ出来ないって」

深雪の一声で周りがシーンと静まり返り、改めて梓が注目される。梓は、それでも放尿出来ずに震えていた。

「雄一、少し痛め付けてあげてよ。この女、私の事を舐めてるわ」

本間は深雪に頷くと、梓に近づき有無を言わせず梓の腹に拳をめり込ませていた。

「おげえぇっ」

梓は腹を押さえて転げ回り、漏らしてしまっていた。

「あらら、自分で小便しろって言ったのに漏らしちまったよ。おい、この女の腕縛れ」

本間の命令で男子生徒の一人が梓の両腕を背中に回して縛り上げていた。

「よーし、武夫と浩司はこいつの足持って持ち上げろ」

本間は他の男子に命令する。二人は梓の足を持つと逆さに持ち上げ

ていた。梓のスカートが捲れ白い下着が露に晒される。

「そいつの股開いてそのまま持ってろ」

武夫と浩司が左右に別れ、梓の股を大きく開いていく。梓の漏らしてしまった股間が惨めに晒されていた。その梓の腹に、本間はまた思い切り拳を叩き込んでいた。

「あうぅぅっ」

ぴゅっ、ぴゅっ

下腹に拳を叩き込まれ梓は、また漏らしていた。

「あはは、面白ーい。もっと殴ってやって、雄一」

「わかった。膀胱、空になるまで殴ってやるよ」

「嫌だぁ、許して下さい」

梓は必死に暴れるが腕を縛られ男二人に足を掴まれていては無駄な抵抗であった。本間は、そんな梓をサンドバッグのように容赦なく殴りつける。

ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ、ボスッ

「おぼおおおおおっ」

ぴゅっ、ぴゅっ、ぴゅっ、ぴゅっ、ぴゅっ

絶叫しながら小便を漏らしていた梓を楽しそうに殴っていた本間が拳を止めていた。深雪が不思議そうに本間を見ている。

「どうしたの、雄一？」

「ああ、なんか臭くねえか」

確かになにやら異臭が漂っていた。すると、梓の足を持っていた武夫と浩司が叫ぶ。

「うわっ汚ねえ。こいつ、ウンコも漏らしてやがる」

梓の下着の臀部が茶色く汚れている。

「最低なクソ女だわ。もういいだろ、深雪。早いとこやっちまおうぜ、いいだろ？」

「これ以上汚されても嫌だからね。いいよ、気が済むまで回してやりなよ」

梓は今度は仰向けに押さえつけられていた。本間は梓の下着を脱がせていく。

「いやぁ、やめてぇ、許してっ！」

「あらあら、梓の汚ないマンコ丸見えだね。きちんと撮影してあげるから、ゆっくり遊んでもらいな。ブスのあんたが相手して貰えるんだ、嬉しいだろ」

「ねえねえ、男子がやり終わったら私たちにも遊ばせてくれるんだよね、深雪」

真澄が舌舐めずりしながら楽しそうにスマートフォンで梓を撮影していた。

「もちろんだよ。私たちが本番だからね。男子が使い終わったら、もうこいつのマンコ壊しちゃおうよ。どうせ、もう2度と使われる事ないんだから」

「本当っ！楽しそう。私も、こいつのマンコにやりたい事あるんだ」

「私も、私も。どうせ、こんなブス。他に使い途ないもんね。本当に壊しちゃおうよ」

真澄ともう一人の女子、岩崎倫子が楽しそうに話している。その間にも本間たち男子は梓を犯す準備をしていた。

「誰かぁ、助けてえっ！」

梓は必死に救いを求めるが、この別棟の用具室は深雪たちの溜まり場であるのを、他の生徒は知っている為近付いて来る者はいない。下手に近付いて自分が火の粉を被るのは御免蒙りたいと誰もが思っていた。

「うるせいな、こいつ。おい、こいつのウンコと小便で汚れたパンツ。こいつの口に詰めてやれよ」

「良いねえ。ウンコたっぷりつけて口に入れてやるか」

本間の命令で武夫が楽しそうに汚物で汚れた梓の下着を手に取り、浩司が開けている梓の口中に押し込んでいった。

「ふぐうっ！」

「うわっ、汚ねえな。こいつ、歯にウンコついてるよ」

「見るのも嫌だから、ガムテープも貼っておけよ」

梓は口に自分の大小便がたっぷりとついた下着を全て押し込まれ、さらにガムテープを貼られ口を塞がれていた。そして、ついにこの時がやってきた。梓は足を閉じられないように、開いたまま押さえ付けられている。本間の亀頭が梓の割れ目にあてがわれ、割れ目に沿って上下に動かされていた。

「ふぐうっ」

梓は泣きながら、嫌々というように首を左右に振るが男たちの興奮はもう止まらなかった。

3話、犯される梓

3話、犯される梓

梓は両腕を縛られ、口も塞がれ、足を開かされて押さえ付けられていた。そして、本間が自分の性器で、梓の割れ目を刺激している。

・・許して、それは許して、お願いします・・

梓は泣きながら抵抗するが、梓の力では動くことも出来ない。

「いいざまだねぇ、梓。心配しないでもあなたの初めての記録はきちんと撮影しといてあげるからねぇ、嬉しいでしょう」

深雪が残酷に梓に告げ、真澄と倫子も楽しそうにスマートフォンを向け、これから犯されようとしている梓を撮影していた。

「あっ、ほら見なよ真澄、倫子。こいつ、抵抗してるくせにマンコ濡らしてるよ」

「あはっ、ほんとだ。こいつ、本当は嬉しいんだよ。良かったね、梓。あんたのマンコの穴、使って貰えるよ」

深雪たちは大騒ぎしながら、泣いている梓を撮影して楽しんでいた。

そして、いよいよ梓が犯される時がきた。

「お前ら、こいつが暴れないようにきつく押さえておけよ」

武夫たちが梓を押さえ付け、深雪たちも梓が犯される瞬間を目を皿のようにして待ち構えていた。

・・嫌ぁ、許してぇ・・

梓が、塞がれた口で懇願した次の瞬間だった。梓は性器から脳天へ一直線に突き抜ける激痛で絶叫していた。

「ふぐうううっ！！」

・・痛いぃ、裂けるうぅぅ・・

梓は必死にずり上がろうと体を動かすが、武夫たちに押さえ付けられて動く事が出来ず、そのまま本間雄一の性器に根本まで貫かれていた。

「あはっ、雄一のチンポ根本まで入ってるよ。こいつのマンコの穴、でかいのか」

深雪たちが笑いながら撮影するなか、雄一は腰を激しく動かしている。

「ふぐ、ふぐ、ふぐ、ふぐ、ふぐ、ふぐ」

雄一の性器が激しく動く度に梓は、性器が裂かれる激痛で泣きながら声を上げていた。

・・痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛いいい・・

ポロポロと涙を流し続ける梓を、雄一は無情に犯し続けた。そして、雄一の息も荒くなってくる。

ドピュッ、ドピュッ

「ふうーーっ」

雄一は、梓の中に射精していた。そして、雄一が自分の性器を抜くと、梓の膣から白い精液と赤い血が流れ出してきていた。

「おめでとう、梓。一生使われないかと思ってたマンコ、使って貰えて良かったね」

「でも、マンコ使えるのも今日で最後になるからね。いっぱい犯して貰うんだよ」

真澄が言っている間に武夫が梓を犯し始めていた。

「人気あるじゃない、梓。モテモテだね」

倫子が言い、深雪たちは爆笑していた。そして、武夫も梓の中に放出する。次は浩司が襲いかかっていた。

「俺、バックからやりてえな」

浩司の言葉で男子たちが梓を四つん這いにさせ、尻を突き上げさせる。

「ほら、これならブスでも顔が見えないから具合いいだろ」

浩司は笑いながら梓をバックから犯していた。その後も、梓は男子5人に交代しながら犯されていた。最初は梓の性器を犯していた雄一たちであったが、そのうちに肛門や喉まで犯し始めた。梓は、3つの穴をまるで物のように犯され、ボロボロになって解放された。

「いいぞ、深雪。さすがに疲れたわ。後は任せる」

雄一が深雪に梓を譲ると、深雪たちは待ってましたと梓の周りに集まっていた。梓はもうぐったりとして、膣や肛門からは白濁した精液が溢れていた。

「じゃあ、まずはマンコの毛から焼いてやろうか」

真澄がオイルライターを取り出してカチャカチャ鳴らす。

「後で鳴らして遊ぼうと思って私、爆竹持ってるんだ。これで、マンコの穴爆破してみようよ」

「私は安全ピン持ってるから、これでマンコ、封印してあげない」

真澄に続いて深雪たちも梓の性器を痛め付ける相談を楽しそうにしていた。梓は、その会話が耳に入っている筈なのに、まるで心が壊れたかのように虚ろな目をしてマットの上に転がっている。そうしているうちに深雪たちの相談がまとまったようだった。そして、今度は雄一たち男子が興味深く、梓が何をされるのか見つめていた。

「じゃあ、土手焼きからいきますね」

ジュボッ

真澄がオイルライターを点火すると、梓の恥丘にわずかに生えた陰毛にライターを近づけていく。そして、梓の陰毛をライターの火で焼き出した。

ジリ、ジリ、ジリ、ジリ、ジリ、ジリ、ジリ

梓の陰毛が音を立てて焼かれていく。陰毛が燃える嫌な異臭が辺りに漂い始めた。

「ふぐうううう、ふぐうううう！！」

・・熱い、熱いよおおおお・・

それまで無表情だった梓が眠りから覚めたように暴れだす。

「ちょっと男子。押さえといてよ。上手く焼けないわ」

真澄が文句を言い、武夫と浩司がまた梓の体を押さえ付けていた。

ジリ、ジリ、ジリ、ジリ、ジリ、ジリ、ジリ

真澄は梓の恥丘の陰毛を全て焼き尽くし、そのままライターを股間の方に持っていった。

「土手だけじゃなくて、割れ目の方の毛も焼いてあげるね」

真澄は残酷に笑うと、梓の割れ目にライターの火を近づけていった。

「ふごうううう、ふごうううう、ふごうううう」

再び必死に抵抗する梓だが、無情にも梓の性器周辺に生える陰毛も、チリチリと焼かれていった。そして、楽しそうに梓の陰毛を焼いていた真澄は、ウェットティッシュで梓の恥丘と股間を綺麗に拭く。

「少し火傷しちゃったみたいだけど、ほらツルツルできれいなマンコになったでしょう」

深雪たちは、まるで幼女のようにツルツルになった梓の性器を眺めて爆笑していた。

4話、性器を爆破される梓

4話、性器を爆破される梓

「あはっ、見て。こいつのマンコ、ツルツルになったよ」

ライターで陰毛を焼かれた梓の股間を見て、深雪たちは爆笑していた。楽しそうに大笑いする深雪たちとは逆に、梓は号泣していたが、次の拷問が襲いかかってくる。

「次は私がやりたい。この爆竹で、こいつのマンコ爆破してやろうよ」

「ふぐ、ふぐ、ふぐう」

深雪たちの声が聞こえた梓が、塞がれた口で叫ぶが、深雪たちは楽しそうに梓の膣に爆竹を挿れていた。梓の体を押さえている武夫たちは、その様子を見て、ひそひそと話していた。

「女の方が怖いな。マンコ爆破なんて思いつかねえよ」

「エグッ……。この女、本当にマンコ壊されるのか。可哀想にな。お前にマンコの穴失くなったら、もう価値ないもんな、御愁傷様。ぷぷっ」

深雪たちに釣られて男子生徒も笑いだしていた。

「はーい、点火。耳、ふさいでぇ」

全員が見守るなか、爆竹の導火線がシューッと燃えていく。

パーーン！

「ふぐううう」

梓の膣内で爆竹が破裂し、白い煙と火薬の臭いが漂った。

「あれっ、マンコ、なんともないみたいだよ」

「ほんとだ。火力が足りないみたいだね。今度はもっと本数多く挿れてみようよ」

「爆竹、たくさん持ってるから、こいつのマンコの穴に入るだけ挿れてみようか」

深雪たちは梓の膣に爆竹を詰めだした。そして、９本もの爆竹を挿れてしまった。

「けっこう、入ったね。でも、どうせならもう１本挿れて１０本にしたいね」

倫子の言葉で深雪たちは、詰めた爆竹の間に隙間を作り、無理矢理爆竹を詰めていった。

「あーあ、本当に１０本も挿れられてんじゃん。もう、お前のマンコおしまいだな。最後に俺らに使って貰って良かっただろ」

「しかし、女って本当にエグい事やるな。でも、最後に気持ちいい思いしたから充分だろう」

「ふぐう、ふぐう」

「おうおう、こんなに泣いちゃって。マンコ爆破されるんだから怖いよな。ぷぷっ、ブスの顔が余計ブスの顔になってるわ。アップで撮影しといてやるよ」

武夫が笑いながら、顔を硬直させて泣いている梓の顔をスマートフォンで撮影していた。その間に深雪たちは１０本の爆竹の導火線を１本にまとめて捩っている。

「さあ、出来た。点火するよ」

「ふぐう、ふぐう、ふぐう、ふぐう、ふぐう」

梓は激しく首を振り、泣きながら叫ぶが、深雪は導火線に点火してしまう。

シューーーーッ

「ふぐ、ふぐ、ふぐ、ふぐ、ふぐ、ふぐ」

梓は恐怖で大きく目を見開き、鼻息が荒くなっていく。開いた目からは大粒の涙がポロポロと零れていた。そして……。

パアーーーーン！！

「ふがあああああーーー！！」

先ほどより大きな破裂音と梓の絶叫が響いていた。そして、もくもくと梓の膣から出てくる白い煙が薄れると、膣口から血が流れ出していた。

「やっと、血が出たよ。でも意外と少ないね。それにマンコも、そのまま残ってるし。やっぱり、本物の爆弾使わないと駄目なのかな」

倫子が、がっかりしたように言うと深雪が、それなら別の所を爆破してみようと提案する。

「マンコの穴は丈夫そうだからさ。おしっこの穴とか、お尻の穴ならいいんじゃない。それに子宮口もあるよ」

恐ろしい事を深雪は笑いながら言っていた。それを聞いた梓は、どんな顔をしているのか見てみると、梓は膣を爆破された激痛で白眼を剥いて失神してしまっていた。

「それ、面白そう。やろう、やろう」

「さすが深雪ちゃん、凄い事思い付くね」

真澄と倫子も大賛成だったが、男子生徒の一人は心配になっていた。

「おい、雄一。良いのか、止めないで。大変な事にならないか」

「深雪がやりたいって言ってるんだから、やらせればいいよ。いざとなれば、アイツの親が出てくるさ」

雄一にそう言われると男子生徒は返す言葉がなかった。けっきょく梓は、深雪の提案通り、尿道と肛門にも爆竹を詰められ、更に子宮口から子宮の中にも爆竹を詰められてしまった。

「あはは、深雪ちゃん。私、ワクワクするよ。早く爆破したい」

「私も、私も。子宮爆破したら、さすがにこいつのマンコ終わりだよね」

「ふふっ、今度は導火線、別にして3人で別に点火しようよ。私が、おしっこの穴爆破するから、真澄はお尻の穴ね。倫子が子宮でいいよ」

「良いの、深雪ちゃん。一番いいところ取っちゃって」

「別にいいよ。誰が点火しても爆破させるのは同じでしょう。こいつのマンコ、壊せれば良いからさ」

深雪は残酷に笑い、雄一にライターを貸してくれと言っていた。そして、女子3人がライターを持ち、それぞれ導火線を握る。

「誰からいく?」

「やっぱり、子宮は最後でしょう。おしっこの穴が最初でいいんじゃない」

「うん、じゃあいくよ」

深雪が導火線に点火する。導火線は梓の尿道に向かって燃えていった。

パンッッ！

梓の尿道が爆破され、梓はビクッと体を動かす。そして、すぐに真澄が導火線に点火していた。

シューーーッ

パンッッ！

梓の肛門が爆破される。

ビチャッ

「なんか飛んできたよ……。うわっ、ウンチだ。汚ないっ！」

倫子は大騒ぎしながらも導火線に点火していた。いよいよ最後の子宮が爆破される。女子も男子も、その時を見逃さないように目を皿のようにして見ていた。

ボスッッ！！

籠った音がして梓の体が一瞬浮いたような気がした。そして、梓の膣から血が噴き出してきた。

「あーあ、本当に壊されたか。これでもう、こいつは女じゃないな」

男子生徒の一人がポツリと呟いていた。梓は性器を壊され、ビクビクと体を震わせながら、膣から血を流し転がっていた。

5話、性器処刑執行

5話、性器処刑執行

尿道、肛門、そして子宮を爆破され梓は体を痙攣させていた。梓の股間、三つの穴からは血が流れていた。

「よーし、それじゃあ、こいつのこの姿、しっかり撮影して行くか」

雄一が伸びをしながら言うと、深雪がまだこれからよと笑っていた。

「えっ、まだやんの？こいつのマンコ、もう壊れてんじゃ……」

「はぁ、雄一、甘いね。梓のマンコは徹底的に壊してやんだよ。もう、オナニーも出来ないくらいに目茶苦茶にね。私に恥かかせた事、一生後悔させてやるんだよ。いい雄一、ちょっと理科室へ行って塩酸取って来てよ」

「塩酸？ああ、分かったよ」

雄一は深雪に命令され渋々用具室を出ていった。深雪たちは、血を流す梓の性器を眺めながら残酷に微笑んでいる。

「あの……、吉田さん。塩酸って何に使うのかな。顔とか焼くのはさすがに不味いんじゃない」

武夫が、恐る恐る深雪に訊いてみるが、深雪は何くだらない事を言ってるのと武夫を睨みつける。武夫は、ビクッとして顔を背けていた。

「こんなブスの顔、焼いても変わらないじゃない。それよりも、もっと大事な処を完全に壊してあげるのよ。もう、生きているのも辛くなるでしょうね」

深雪が残酷に笑い、それにつられて真澄と倫子も悪魔のように笑っていた。

「マンコを完全に壊されたら、この女どうなるかな。死んでくれると面白いのに」

深雪の言葉に、真澄と倫子も乗ってくる。深雪の家は堅気ではない。いわゆる反社会的勢力である。そして、深雪は親に特に可愛がられていた。それ故、この学校の教師たちも腫れ物に触るように深雪を扱っていた。深雪は、この中学校では絶対的な女王なのである。なので、深雪がその気になれば何でも出来ると知っている真澄と倫子は、更に深雪を焚き付けてきた。

「深雪ちゃん、別にもうこいつのマンコ壊して殺しちゃえば良いんじゃない。こいつがマンコ壊されて無様に死ぬ姿、見たいし」

「私も賛成。深雪ちゃん、殺っちゃおうよ。私、もっとマンコ壊したいんだ」

二人に言われ深雪もその気になっていた。

・・別に殺しちゃっても、パパに頼めばいいか。それに、そうすれ

ばもう私に逆らう者は誰もいなくなるね。くぷぷっ・・

思わず深雪は笑いだしそうになっていた。そこへ、理科室へ行った雄一から着信があった。

「ああ、深雪。塩酸、教室の後ろのガラス棚にしまってあるんだけど扉に鍵がかかっているんだよ。どうする？」

「どうするも何も、ガラス割って持って来なさいよ。それから、解剖実習用の道具も持ってきて、急いでよ」

深雪は、言いたい事だけ言うと、さっさと電話を切ってしまった。その会話を聞いていた真澄が目を輝かせて訊いていた。

「ねえ、深雪ちゃん。解剖用の道具って聞こえたけど、どうするの？」

「ふふふ、こいつのビラビラ、切っちゃおうよ。ビラビラを短冊に切って写真撮ってから、切除しちゃう。こいつのマンコのビラビラ、失くしてやろう」

「えええ、それウケるうぅ。深雪ちゃん、天才だよ」

「ねえねえ、深雪ちゃん、お願い。私にも切らせてくれる？」

「もちろん、いいよ。みんなで楽しみましょう」

深雪の了承を貰い、真澄と倫子は歓声を上げていた。

「私、興奮してきたよ。早く、本間くん戻って来ないかな」

真澄は、雄一が早く戻らないかと用具室のドアを心待に見つめている。それは、倫子も同じだった。そして、ドアがガラッと開いた。深雪たちは、雄一が戻って来たと思ったがドアを開け、この惨事を目撃し体が硬直して震えているのは、教師の小川芳子であった。授業で使う用具の準備に来たのだろうが、運の悪い事に深雪たちが使用中だったのである。

「先生、何か用ですか?」

深雪が全然動じる様子もなく芳子の強張った顔を睨みつける。

「あっ、いえ……。なんでもありません。失礼しました」

芳子は、何も見なかった事にして逃げようとして振り向くが、そこには理科室から戻ってきた雄一が通せんぼするように立っていた。体の大きい雄一が、小柄な芳子を上から見下ろすような格好で睨み付けていた。

「ひっ……」

芳子が小さく悲鳴を上げた次の瞬間、芳子の鳩尾に雄一の強烈な拳がめり込んでいた。

「おぼう……」

芳子は無様に床に転がっていた。

「なんで、先生がここに?」

「さあ、知らない。見回りでもしてたんじゃない。それより、持ってきた物早くちょうだい」

深雪が、芳子など興味ないという態度で適当に答えると、雄一が持ってきた道具をそそくさと受け取っていた。

「俺、この先生、わりと好みなんだよ。こいつも犯していいか、深雪」

「別に良いんじゃない。私、興味ないし。好きにすれば。それより、真澄、倫子、始めるよ。梓のマンコ処刑」

3人は、ギラギラした目で梓の性器を見つめ、剪刀と呼ばれる解剖用のハサミを手にしていた。

「まず、私からいくから梓のビラビラ引っ張って伸ばしてて」

真澄と倫子がびろーんと伸ばす梓の小陰唇の真ん中を深雪は剪刀で挟んだ。

ジョキーーーン

「んぎいいいぃぃっ！」

小陰唇を剪刀で切られ、余程激痛だったのか、それまで意識を失っていた梓が目覚めて絶叫していた。が、深雪はそこから1センチ剪刀をずらし、また梓の小陰唇を剪刀で挟む。

ジョキーーン

「んぐうううぅっ！」

梓の瞳から、また大粒の涙が零れ出していた。

6話、保田ちふみという少女

6話、保田ちふみという少女

山本梓が吉田深雪たちに性器を破壊され、小川芳子が本間雄一に気絶させられた時、学校では普通に授業が行われていた。

「それでは、保田。〝こころ〟を読んでみての保田なりの感想を言って下さい」

国語の教師、岩崎一郎に指名されたちふみは席から立って答える。

「はい、私はこの小説、先生の〝こころ〟ばかりで奥さんの〝こころ〟があまり書かれていないので、そこが残念でした。何も知らない奥さんは、きっと寂しかっただろうなと思うと悲しくなってしまいます」

「そうだな、保田。いろんな人の気持ちになってみるのは大切な事だ。それが出来ると思いやりの心も自然と身に付いてくる。みんなもそれを忘れないようにな」

「はーい」

生徒が元気に答えたところでチャイムが鳴っていた。岩崎は、それでは後は次回と教室を出ていった。

「ねえねえ、ちふみ。今度の休み、洋服見に行こうよ。可愛いスカート、あったんだ」

「あっ、ごめん満里奈。私、小学校の時の友だちと会う約束してるんだ」

「ええ、またぁ。あんたたち、ほんと仲良いね。もしかして、その中の誰かと付き合ってるの？」

「違うよ、満里奈。そんなんじゃない。全然違うよ」

ちふみは友人の大藤満里奈に、答えながら小学生の頃を思い出していた。

・・敏行くん、広志くん、滋くん、富司くん。みんな、私の大切な友だち・・

この４人とは、ただの友人ではない深い絆があった。小学生の時、通っていた塾が同じだった５人は、お化け屋敷と呼ばれている廃屋に探検に入ってしまった。そこで、妖怪に襲われ、助けてくれたのが四姫の４人の女性だった。青姫・西園寺弥生、朱姫・蓬莱刹那、白姫・護国八千穂、玄姫・百地柚希。人を助ける為に妖怪と戦う彼女たちは、いつしかちふみの憧れの存在となっていた。しかし、そのうちの弥生と刹那は破壊神シヴァとの戦いで、人知れず消滅していった。それは、ちふみが中学生になってから八千穂が教えてくれたのだ。その時の八千穂の悲しそうな顔をちふみは忘れられない。

「ちふみちゃんも中学生になったし、弥生さんや、刹那さんとも交流があったからね。きちんと伝えておこうと思ってというか、ごめんなさい。本当は、弥生さんや刹那さんの事を知って貰いたかった

んだ。あの人たちは、こんなに凄いと認めて貰いたいの。特に弥生さんは、誤解されたままでは、あまりに可哀想だから」

西園寺弥生はシヴァを倒す為、自分が極度の変態で、どうしようもないマゾであると全世界に発信していた。弥生の偉業を知らない人間にとっては、弥生はただの気持ちの悪い女としか思われていないのである。そして、八千穂は悲しい顔で月での戦いの話をしてくれた。地球を人々を守るために、それだけを考えてシヴァを倒し散っていった弥生と刹那。八千穂は語り終えると、今、世の中が平和なのは二人のおかげだから、たまには思い出してあげてねと言い、去っていった。

・・ビー玉のお姉さん。私も人を守れるような人間になりたい・・

それは、ちふみが四姫のみんなと出会ってから常に思っている気持ちだった。

＊　＊　＊

用具室では深雪たちによる暴行が続いていた。深雪たち、女子3人は梓の性器を破壊する作業をまだ続けている。

「ねえ、こいつの悲鳴よく聞きたいから、口枷取ってやろうよ」

「あはは、マンコ壊されて、どれだけ無様に泣くじゃなぁ。楽しみ」

深雪は、梓の口を解放すると、梓はその途端泣き叫んでいた。

「お願いしますうぅ。もう、許して下さいぃっ！」

泣きながら懇願する梓だが、深雪は梓を許すつもりなど毛頭ない。深雪は梓の小陰唇を短冊切りした後、完全に切除してしまうつもりのようだった。

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「んぎぃぃぃぃーーーーっ！！」

梓の左右の小陰唇は、剪刀で短冊切りにどんどん切断されていく。梓は絶叫するが、真澄と倫子は楽しそうに梓の小陰唇を、まるで布でも切るように無慈悲にジョキジョキと切断していった。

「んんぎぃぃぃぃーーーっ痛いぃぃぃっ！もう、許してえぇぇぇぇっ！」

大声で絶叫する梓を、隣で押し倒されて見ている芳子は声も出せず恐怖でガタガタ震えていた。

・・なんて事をされてるの。嫌だ、私はあんな事をされたくない・・

その芳子の頬が平手で勢いよく打たれる。

「どこ見てんの、先生。先生もマンコ壊して貰いたいのか。それなら、俺たちが犯した後、深雪に頼んでやるよ」

恐ろしい事を言う雄一に芳子は失神しそうだった。

・・嫌だ、あんな処を切られたら私、死んじゃうよ・・

その芳子の見ている前で、梓は短冊切りにされた小陰唇を、今度は切除されていた。

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「あひゃあぁぁぁぁー！！痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛いいいいいいいっ！！」

絶叫している梓の股間は血で真っ赤に染まり、梓は口からブクブクと泡を吹き始めていた。

「ほーら、こいつのビラビラの切除完了。梓、ほら、あんたのマンコのビラビラ失くなっちゃったよ」

深雪が撮影した梓の性器の画像を見せると、梓は大声で泣き崩れていた。その号泣する梓を見た芳子も泣き出してしまっていた。

「あれ、先生泣いてるの。心配しないでよ、すぐ気持ちよくさせてあげるからさ」

芳子はスカートと下着を脱がされ足を開いて押さえつけられていた。そして、上着もはだけられブラもずらされ胸の膨らみも丸出しにされる。

「先生、さすが大人だね。いい胸、してるじゃん。それじゃいくよ、先生」

ズンッ

「あうっ」

芳子の性器は、雄一の性器で貫かれていた。そして、雄一は激しく腰を動かしていく。

「あうっ、あうっ、あうっ、あうっ、あうっ」

芳子の声が用具室に響いていた。

7話、女性器完全破壊

7話、女性器完全破壊

芳子は雄一に犯されながら、隣で性器を壊されていく梓の姿が目に入り生きた心地がしなかった。自分も、この男子生徒たちが犯すのに飽きたら、あの女子生徒のように性器を壊されていくのではないかと恐怖に囚われていた。芳子を犯している雄一の腰の動きが早くなってくる。そして、芳子は自分の体の中に熱い放流を感じていた。

・・中に出された・・

当然、避妊など考えてくれる筈がないと思っていた芳子だが、本当に自分の中に遠慮なく射精されてしまうと、自分はこの男子生徒に犯されているんだという意識が強まり涙が止まらなかった。

「もう、許してっ」

泣きながら懇願する梓の声が聞こえる。梓は、もう動けないように厳重に縛り上げられていた。ここまで厳重に拘束されるという事は、これから梓はさらに凄まじい責めを受けるのだろう。開脚されて固定されているという事から、その責めは梓の性器に集中的に行われるのが一目瞭然だった。梓は、背中の後ろに丸めたマットを入れられ、股間・性器が上を向くようにされていた。

「あはは、ビラビラ失くなって惨めなマンコだね。これじゃ誰にも

相手されないね。あんたの女は終わりだよ。でもね、これだけじゃ終わらないよ。梓、あんたのマンコは完全に壊すからね。これから、マンコの穴の中も壊していく。あんたはマンコが失くなって、女じゃなくなるんだよ。あはは」

深雪たちは爆笑していたが、梓はその深雪の瞳を見て、それは脅しや冗談ではなく本気だと感じていた。

「お願いします、吉田さん。そんな事、やめて。許して下さい。私のマンコ、殺さないで……」

梓は泣きながら必死に深雪にお願いするが、真澄がリレーのバトンを持って戻ってくる。

「ほら、持って来たよ。深雪ちゃん」

これを何に使うか知っている真澄と倫子は、これから梓がどんな目にあうか想像して残酷に笑っていた。

「ふふ、梓。ここからが本当の地獄だよ。耐えられるかなぁ。もちろん、思い切り泣き叫んでいいよ。遠慮しないでね」

梓に残酷に告げた深雪たちは、早速梓の性器を壊していく作業に取りかかる。深雪たちは、文字通り梓の性器を完全に破壊して、その機能を全て奪ってしまうつもりだった。

「じゃあ、始めようか」

深雪は梓の膣に、真澄が探してきたバトンを挿入していく。リレーのバトンは長さ約３０センチ、直径約４センチと規格されている。

それを、梓の膣に押し込んでいく。梓の膣は、ミシミシと音がして裂けてしまいそうだった。

「痛い、痛い、痛い、痛い」

梓は無理矢理、膣にバトンを挿れられて、その苦痛に泣いているが、厳重に縛られた体は動く事も出来ずに、しっかりと膣の奥までバトンを挿れられてしまった。深雪たちは、スマートフォンのライトを点けて、空洞になっているバトンの中を覗く。バトンの奥にはコロッとした桜色の梓の子宮頸部が見えていた。深雪たちは、それを撮影した後、いよいよ梓の性器破壊に取りかかる。

「さあ、本番だよ。縛ってあるけど、梓が動かないように押さえてて」

深雪の命令で、真澄と倫子が大きく頷いて梓の体をしっかりと押さえつける。そして、深雪は塩酸の瓶の蓋を開け、スポイトで塩酸液を吸い取った。次の深雪の動作を見て梓は、恐怖のあまり言葉が出なかった。

「や、止めて……。お願い、許して……。何でも言うこと聞きますから……。許して下さい、深雪さま……」

震えるか細い声で許しを乞う梓だったが、深雪は構わずに梓の膣に挿れたバトンの上にスポイトを持っていく。

「さあ、地獄の始まりだよ。うひっ」

深雪は悪魔のような顔で笑うと、スポイトをチュッと押した。

ポトッ

スポイトの先から一滴の雫がバトンの中に落ちていく。

ジュッ

「うぎゃあああーーーー！！」

梓の子宮に塩酸の雫が落ち、梓の子宮を溶かす。絶叫する梓の股間から白い煙と異臭が辺りに漂っていた。その梓の凄まじい絶叫と異臭で、芳子や男子生徒も、梓に目を向けていた。そして、梓が何をやられているのか理解した瞬間、全員の体が固まっていた。

「ひいいーーーー！」

しばらくして芳子が悲鳴を上げる。

・・あんな処に塩酸入れられて、大丈夫な訳がない。あの女子の性器は殺された。この後、私も……・・

「助けてえっ、誰か助けて下さいいーー！」

芳子は大声で叫んで暴れていたが、男子生徒に口を塞がれてしまう。

「先生、うるさいよ。静かにしないと吉田にもっと酷い事されるよ」

男子生徒の言葉に芳子は、ビクッと体を震わせ大人しく泣いていた。

そして、梓の膣内には容赦なく塩酸が垂らされている。

ポタッ、ポタッ、ポタッ、ポタッ、ポタッ、ポタッ、ポタッ、ポタッ

「うぎいいいーーーーー！！！」

ぶりっ、ぶりいっ

梓は、あまりの苦痛に脱糞してしまっていた。梓の肛門から排泄された汚物がマットの上にぼとぼとと落ちていく。

「あーあ、汚ないなぁ。梓、あんた自分で掃除しなよ、これ」

深雪は顔をしかめながらも、スポイトで梓の子宮に塩酸を垂らす作業は止めなかった。もう、梓の子宮頸部は火傷のように爛れてしまい見るも無惨な状態になっている。しかし、深雪はまだ梓を責める手を緩めない。

「まだまだ、やるからね、梓。あんたのマンコは完全に壊す。あれっ、聞こえてないか」

梓は、口から泡を吹き、白目を剥いて完全に失神していた。真澄と倫子は、その梓の姿を面白そうにスマートフォンで撮影していた。

8話、続けられる性器破壊

8話、続けられる性器破壊

塩酸で子宮頸部を破壊された梓は、大便を漏らし泡を吹いて失神していた。しかし、真澄に頬を打たれ覚醒させられる。その途端、梓は自分の性器の内部を襲う激痛に再び絶叫していた。

「痛い、痛い、痛いいいいいーー！！」

「あはは、そりゃ痛いよね。マンコの中、塩酸で溶かされてるんだもん。でもね、梓。あんたのマンコはもっと壊してあげるからね」

「嫌だぁ、許して下さいぃ、深雪さまぁ。お願いしますぅぅぅー」

梓は震えながら必死に深雪に許しを乞うが、深雪は聞く耳持たずガラス管を手に持っていた。梓は、それを何に使うのか解らなかったが、嫌な予感しかしなかった。

・・嫌だ、これ以上私のマンコに何するの。許して下さい。何でも命令ききますから・・

梓はブルブル震えて怯えきっていた。完全に心も深雪に屈服してしまっている。もう、深雪たちに逆らおうとする気持ちなど微塵もなかった。それは、梓の怯えた瞳を見れば明らかだが、それでも深雪たちは梓を許そうとはしない。まるで、何かに取り憑かれたかの様

に、悪魔の形相で梓の性器破壊を続けていた。

「真澄、暗いからスマートフォンのライトで照らしてよ」

深雪の命令で、真澄が梓の性器をライトで照らす。深雪は梓の性器を指でくぱぁと開いていた。

「それじゃ、ここに」

ヌプッ

「痛いいいいいーーー！！」

深雪は梓の尿道にガラス菅を挿れていた。そして、そのまま尿道に押し込んでいく。

「うぎいいいーーーーー！！」

本来、物が入るような所ではない尿道に無理矢理ガラス菅を突き挿れられ梓は悲鳴を上げるが、深雪は楽しそうに梓の尿道をガラス菅を回転させたりピストン運動させたりして責めていた。そして、ガラス菅の先が梓の膀胱の括約筋に突き当たる。

「はい、シャッターチャンス。いくよっ」

プスッ

「はうううぅぅーー！」

プシューーー！

深雪が力を入れてガラス菅を梓の膀胱に突き挿れると、ガラス菅から梓の尿が噴水のように噴き出した。

「あはは、面白いね。人間噴水だ」

ガラス菅から勢いよく梓の尿が噴き出していたが、勢いがだんだん弱くなり、やがてそれは止まっていた。おそらく、梓の膀胱に溜まっていた尿が全て排泄されたのだろうと思われた。梓の噴水が止まると深雪は、もう1本ガラス菅を取り今度はバトンが挿入されている梓の膣に挿れていく。そして、グズグズにされた子宮頸部の中心にガラス菅の先を当てる。

「次は、こっちだよ」

深雪は力を込めてガラス菅を押し込んだ。

ズリュッ

「いだあああぁぁぁーーー！」

絶叫する梓の子宮口にガラス菅が突き挿れられていた。

「うひっ、うひっ、うひっ、うひっ」

号泣する梓の股間から2本のガラス菅が生えている。その、惨めな姿も梓は撮影されていた。

「準備、OK。梓、また地獄が始まるよ。今度はショックで死んじゃうかなぁ。苦しかったら遠慮しないで死んでいいからね」

梓は、深雪の言葉で遠目からでも分かる程、ガクガクブルブル震えていた。

・・私、何されるの。怖い、怖い、怖い、怖いよぉ・・

そして、梓は次に深雪がした行為を見て恐怖が頂点に達していた。深雪は、梓の股間から突き出た2本のガラス菅の先に漏斗を取り付けていた。そして、その漏斗の上に塩酸の瓶を持っていく。

「うわあぁぁぁーー、助けてえぇぇぇーー!!」

自分がこれからやられる事を理解し、梓は大声で助けを求めるが倫子に口を押さえられてしまう。

「今、いいところなんだから。少し大人しくしていなさいよ、ブス」

深雪は笑いながら塩酸の瓶を傾け、まず尿道側の漏斗に塩酸を注いでいく。漏斗に落とされた塩酸は、ツーッとガラス菅の中を通って梓の尿道に入っていった。

「ほぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

絶叫。文字通りの絶叫が梓の口から迸り出る。ガラス菅で膀胱内に塩酸を注入され、梓はまた気絶した。しかし、また梓は覚醒させられる。梓の苦しむ姿を楽しんでいる深雪たちにとって、梓が気絶するなど許せない事であった。

「何寝てんの、早く起きろ梓。次はマンコの穴から子宮の中に入れてやるから」

「あうううぅう」

力なく声を上げる梓だが無理もない事である。膀胱に塩酸を注入され焼かれているのだ。梓は自分の下腹部を襲う激痛にもう何も考えられなくなっていた。そして、梓の目が覚めた事を確認した深雪は子宮側の漏斗に塩酸を注いでいく。

ドボ、ドボ、ドボ、ドボ、ドボ、ドボ、ドボ

なんと、深雪は残っていた塩酸の全てを梓の子宮側の漏斗に注いでしまった。漏斗いっぱいの塩酸が梓の子宮内に流れ込んでいく。

「うぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーー！！！！」

断末魔のように絶叫した梓は、再び惨めに失神した。深雪たちは、梓の尿道と子宮からガラス菅を抜き、膣からもバトンを抜き、梓の性器の様子を観察して楽しんでいる。梓の性器からは血が流れだし異臭が漂っている。

「これで、こいつの子宮は死んだね。もう、治療も出来ないレベルに壊れたね、いい気味だわ。でも、まだマンコの穴が残っているからね。こいつのマンコを完全に破壊する為にマンコの穴も壊してやるよ。穴があればいいなんて男もいるからね。穴も使えないように壊してやんよ」

深雪は、バックの中からネットの通販で購入した器具を取り出した。その器具を見た真澄と倫子は、期待で目を輝かせていた。

9話、絶望の淵

9話、絶望の淵

昼休みの時間、ちふみは給食を食べながら友人の満里奈と静かに雑談に興じていた。すると、教室の後ろで騒ぎが起こっていた。一人の女子生徒を数人の男子と女子が囲み、囃し立てているのだ。

「きゅうちょく、たべちぇるんでちゅから、あとに、してくらちゃい」

どうやら輪の中心にいるのは、天宮野菊のようだった。彼女は、上手く発音出来ない言葉の並びがあって、こういう喋り方になってしまうのだ。その為、よく揶揄(からか)われる事がある。野菊自身も気にしていて、なるべく喋らないようにしているが、面白がって揶揄(からか)ってくる生徒が絶えないのだ。野菊は、喋り方が変わっているというだけで、他はごく普通である。いや、普通というより勉強も運動もトップクラスであった。それでも野菊は、自分の喋り方が嫌いなようで揶揄われても、無視するようにしているが、周りの男女は面白がるばかりだった。それを見たちふみは、バンと席を立ち上がっていた。

「ちょっと木沢くん、煩いよ。みんな、給食食べているんだから、静かにして」

ちふみは、野菊を揶揄っている男子の名を呼び睨み付けていた。ちふみに睨まれた木沢は、急に弱気になっていた。

「い、いや、分かったよ保田。ちょっと天宮に勉強教えて貰おうとしたんだ」

「それなら、天宮さんが給食食べ終わってからにしなさいよ。常識でしょう」

「う、うん。後にするよ」

野菊を囲んでいた生徒たちは逃げるように自分の席に戻っていった。

「ありゅがとう、保田ちゃん」

野菊から礼を言われ、ちふみは笑顔を向けて席についた。ちふみは、とにかく大勢で一人を揶揄するような行為が嫌いだった。そういう人には、容赦なくダメ出しをする。先程の木沢とも入学早々揉めた事があった。女子生徒を揶揄っていた木沢の前にちふみが立ち塞がり、殴りかかってきた木沢を、ちふみが投げ飛ばしたのだ。ちふみにとって小学生の頃経験した妖怪の怖さに比べれば、人間などまるで怖くなかったのである。それ以来、木沢はちふみには手を出してこなかった。

＊　＊　＊

その頃、用具室では子宮と膀胱に塩酸を注入されるという凄まじい行為を目の当たりにした芳子は声も出せずガタガタと震えていた。そして、そこまでしてもまだ梓への性器破壊が終わらない事に、梓の性器を壊している女子3人はもはや人間ではないと思っていた。

・・あの女子のマンコはもう駄目だ。あの3人の女子に壊された。それなのに、まだあの娘のマンコを壊そうとしている。あの娘は、もうマンコを壊されて殺されるんだ。こんな事を笑いながら出来るなんて、あの3人は悪魔だ・・

芳子は、この後自分も性器を破壊されて殺されるかと思うと、少しでも梓に生き延びて欲しかった。梓を始末するのに時間がかかれば、自分が殺される前に助けが来るかもしれない。そこに僅かな希望があったにである。

・・お願い、頑張って・・

芳子は、梓に心の中でエールを送っていた。その梓は、また覚醒させられ深雪が持った器具を見せられている。

「梓、これがなんだか分かる?」

スーパーの果物売場で見た事のある洋梨に形が似ているが、それは金属で出来ている様であった。梓は震えながら、分かりませんと答えていたが、それより自分の下腹部の激痛で意識を保っているのも辛い状態だった。もう、このまま気を失ってしまいたい。そう思うが、それは梓には許されない事であった。

「じゃあ、教えてあげる。この器具は、あんたのマンコの穴を壊す道具で〝苦悩の梨〟と云うんだよ。ほら、見てごらん。ここを操作すると、この器具は開いていくんだよ。一度開くと、このストッパーを解除しない限り、元に戻らないの。これを、あんたのマンコの穴に挿れて開いていくからね。あんたのマンコの穴は、ビリビリに裂かれていくんだよ。そして、開いた状態であんたのマンコの穴か

ら引き抜くの。それで、あんたのマンコの穴は二度と使い物にならなくなるわけ。どう、嬉しいでしょ。ここまで徹底的にマンコ壊して貰えて。マンコの穴も子宮も失くなるんだよ、ゾクゾクするね」

自分の下腹部を襲う尋常ではない痛みで梓は、自分の子宮が取り返しのつかない事をされたという意識がある。それなのに、更に自分の膣も壊されると残酷に宣言された。

・・もう私、本当にマンコの穴も壊される。もう逃げられない。私は人の形をしたただの物にされるんだ。こんな目に遭うなら、もう生きていたくないよ、殺して下さい・・

梓は、逃れられない運命から完全に絶望し、死を望んでしまっていた。そして、その気持ちは口から零れてします。

「……もう、殺して下さい。そんな身体で生きていたくない。殺して下さい……」

梓の小さな呟きは深雪や真澄たちの耳に入る。深雪は、更に残酷に微笑んだ。

「ふふふ、あんたが望むならマンコを壊した後、殺してあげるよ。完全に絶命させてあげるから心配しないで大丈夫。ふふ、あんたも今日までの命だね、清々するわ」

深雪は、梓を殺す事など虫を潰す程度にしか思っていなかった。

１０話、破壊の果て

１０話、破壊の果て

梓は、縛られた上に真澄と倫子に押さえつけられ、いよいよ膣を破壊されようとしていた。深雪が〝苦悩の梨〟を梓の膣に挿れようとしている。これが、挿れられてしまえば、それだけで梓の膣は裂ける。そして、〝苦悩の梨〟が作動すれば、梓の性器はもう手の施しようがない程、完全に破壊されてしまうのだ。

「こいつのマンコになかなか入らないな。真澄、野球のバットを持ってきて」

真澄はすぐ用具室の隅から金属バットを持ってきて深雪に手渡していた。

「バットで叩いて、こいつのマンコに押し込むからさ。暴れないように押さえてて。いくよ」

深雪はバットを頭上に振りかぶると、思い切り振り下ろした。

バキャッ

「あうううぅぅぅぅぅぅ！」

梓の性器に〝苦悩の梨〟がめり込み梓は絶叫するが、深雪は続けて

バットで梓の性器に〝苦悩の梨〟をどんどん打ち込んでいく。梓の膣は裂け血が溢れ出しているが、深雪は最後まで〝苦悩の梨〟を打ち込んでしまった。膣を裂かれ号泣する梓であるが、これから更に性器を破壊される事になる。

「うふふ……。さあ、それじゃ〝苦悩の梨〟を開いていくよ」

深雪は〝苦悩の梨〟の底部についたハンドルを回し、〝苦悩の梨〟を開いていく。一度開いた〝苦悩の梨〟は、ストッパーがかかり閉じる事は出来なくなる。そして、それと同時に開いた中から針が飛び出し子宮を貫いていくのだ。もちろん、この針も子宮内に入ると先が広がり抜けなくなってしまう。つまり、最後に〝苦悩の梨〟を引き抜く時、膣は完全に破壊され、子宮も引き出され破壊されるのだ。この〝苦悩の梨〟を挿入されてしまった時点で、梓の性器はもう使い物にならなくされたと言っていいのだ。

キリ、キリ、キリ、キリ、キリ、キリ、キリ、キリ、キリ、キリ、キリ

深雪は、容赦なくハンドルを回していく。ぶちぶちと梓の膣が裂けていく感覚がダイレクトに伝わってきて深雪は興奮していた。

「あははっ、良いねえ。こいつのマンコの穴、裂けていってるよ。楽しいぃ」

深雪のその姿は、まさに悪魔のようであった。いや、しかし。それは深雪だけではなかった。真澄も倫子も、梓が性器を破壊される行為を笑って楽しそうに見ている。それは、とても人間の姿とは思えなかった。そして、ついに深雪は〝苦悩の梨〟を最大まで開いてしまった。深雪たちは最後の仕上げに入る。

「あんたのマンコの最後の姿、撮影してやるからさ。ほら、この通りに台詞言いなさいよ」

真澄が梓にノートを見せ、そこに書いてあるように言えと命令する。その間に深雪と倫子は、〝苦悩の梨〟のハンドルにフックをかけ、フックについたロープを天井の滑車に通し、ロープの先には石灰の入った袋を幾つも縛り付けていた。これで、石灰の袋を落とせば、フックをかけられた〝苦悩の梨〟は梓の性器から無理矢理引き抜かれる事になる。梓は開脚され逆さにされた状態でカメラに向かって撮されていた。

「私は1年D組の山本梓です。いよいよ、私のマンコの最後の時がやってきました。私のマンコの穴も子宮も、これから無様に破壊されます。私のマンコが完全に壊される様子を楽しんで下さい。ううっ」

そこで、号泣する梓の顔がアップで撮され、再び梓の全身が撮される。そして、その時がやってきた。深雪と倫子は、石灰の袋をどさっと落とす。滑車を通されたロープは、フックをかけられた〝苦悩の梨〟を一気に引き抜いた。

ズボウッ!!

「あぶうううううううぅぅぅぅぅぅぅぅぅ!!!!!」

ぶりいいいいいいっ

絶叫した梓は、また大便も噴き出していた。梓の股間からは血が噴き出し、子宮が飛び出してしまっていた。梓は、また白目を剥いて

失神している。

「あははっ、いい姿だよ、梓。子宮、飛び出ちゃって良かったね。あんたのマンコ、誰がみても完全に壊れたよ。せっかくだから、子宮の中身も見て貰おうね」

深雪は、梓の小陰唇を切断した剪刀で、今度は子宮をジョキジョキと切っていく。切られていく子宮から塩酸で溶かされどろどろになった子宮内壁が流れ出してきていた。そして、梓は子宮の中までも晒されていた。

＊　＊　＊

明日菜と雛子はいつもの公園のベンチに座っていた。この公園は、二人にとって思い出深い公園である。西園寺弥生から青姫を引き継いだ伊集院明日菜。蓬莱刹那から朱姫を引き継いだ早乙女雛子。二人は、時々この公園に来ては、今は亡き弥生と刹那に想いを馳せていた。

「しばらくは平穏な日々が続いていたけど、また雲行きが怪しくなってきたね、ヒナ」

「今までの歴史が物語っているけど、本当に平穏な日々って長く続かないもんなんだね」

「そういえば、１３００年振りに彗星が接近するってニュースやってたけど関係あるのかな」

「ああ、レモン彗星ね。関係ないでしょう。昔の人はハレー彗星が接近した時に大騒ぎになったみたいだけど、今はね。明日菜は、そういうの好きだからね」

「弥生先輩もホラーとか、星見るの好きだったよ」

「べ、別に私も嫌いだなんて言ってないよ」

弥生の名前を出され雛子は狼狽えていた。明日菜と雛子にとって弥生は忘れる事が出来ない大切な存在なのだ。

「あっと、いけない。バイトの時間だよ、ヒナ」

「あっ本当だ、急がなくちゃ」

「でも、残念だね。橋姫さん、人気あったのに辞めちゃって」

「大嶽丸さんは、一身上の都合で辞めたって言ってるけど、何があったのだろうね」

「また、異界で悪い事が起きたんじゃないといいけど」

「そうだね……」

二人は、また弥生の事を思い出し黙り込んでしまっていた。

11話、放課後の時間

11話、放課後の時間

終業のベルが鳴り、生徒たちは伸びをして、教師たちも今日1日無事に終わったかと安堵の息を洩らしていたが、体育教師の小川芳子の姿がない事で職員室はざわつき始めていた。

「授業の準備で用具室に行ったのかも知れない。誰か、用具室に見に行ってくれますか」

教頭が声を上げるが誰も手を上げなかった。

「嫌ですよ、用具室は吉田や本間のたまり場じゃないですか。わざわざ近づく気にはなれません。小川先生にも伝えてあるんですよね、教頭」

「あっ、嫌、まだ……。おいおい伝えていこうと思っていたんだが……」

教頭の言葉で職員室は、シーンと静まりかえっていた。芳子は間違いなく用具室に行ったのだ。そして、深雪たちに遭遇してしまった。教師たちの頭の中にはみな同じ考えが浮かんでいた。

吉田深雪と、その取り巻きたち。それは、この学校にとってアンタッチャブルな存在だった。深雪の親は反社会的勢力で権力者でもあった。その為、教師たちは、深雪に関わらないように注意していた。

とにかく3年間辛抱すれば卒業していく。それを思い耐えていたのだが、新人の芳子にはその情報が伝わっていないようであった。教師たちは、顔を見合わせるが誰も言葉を発しなかった。おそらく、もう芳子は……。誰の頭にも、犯され拷問され目茶苦茶にされた芳子の姿が浮かんでいた。

＊　＊　＊

校門に向かって歩いているちふみに後ろから横山満里奈が声をかけてきた。

「ちふみちゃん、一緒に帰ろう」

二人は並んで校門から外に出てると今度は縦になって歩道を歩いきだした。

「あれ、あそこの子。満里奈ちゃん、知ってる？」

ちふみが指差す先には、深雪たちにどこかに連れられて行こうとする梓の姿があった。

「隣のクラスの子でしょう。ちふみちゃん、関わらない方がいいよ。あの周りにいる二人、ヤバいから」

「それは、知ってる。でも、連れられているあの子。もう、すっかり生きるの諦めているように感じるの。ほっとけないよ」

「ちょ、止めてちふみちゃん。ちふみちゃんが正義感強いのは知っ

てるけど、嫌だよ、私まで巻き込まれるかも知れない」

走り出そうとしたちふみを満里奈が止めていた。満里奈が止めるのも無理がなかった。深雪に関する噂は生徒たちの間で広まっている。どれも、良い噂ではない。深雪に関わった者は、みんな酷いイジメを受け、転校していったり入院したり、恐ろしいのは何処かに埋められているという噂まで流れているのだ。

「う、うん。そうだね、満里奈ちゃんに迷惑かける訳にはいかないもんね」

ちふみは満里奈を振り返り笑顔を見せていた。満里奈も、ホッとしたようにちふみに笑顔を向ける。それから、二人は雑談しながら歩きバス停の前まで来ていた。そして、バスがやって来ると満里奈は、じゃあ、また明日ねと言いバスに乗り込んでいった。ちふみは歩道で満里奈の乗ったバスを見送ってから、走り出していた。

・・まさかと思うけど、さっきの女の子。もう人生を諦めていた。あの人たちに何かされて、この後もっと酷い事をされるのかも知れない・・

ちふみの予感は当たっていた。深雪たちに性器を破壊されてしまった梓は、もう生きる気力を失くしてしまっていた。そして、これから深雪たちは、その梓を楽しみながら拷問して始末しようとしていたのである。ちふみは必死に梓が何処に連れていかれたのか探していた。

＊　＊　＊

梓は町外れの自動車の部品を作っていた廃工場に連れ込まれていた。

「さあ、ここでお望み通り殺してやんよ、梓」

深雪は楽しそうに笑い、梓に服を脱げと命令する。梓は、セーラー服とスカートを脱ぎ、下着姿になるが深雪に頬を打たれていた。

「バカなの、全部脱げよ。本当にこいつイライラする」

深雪は全裸にした梓を、彼女たちが処刑台と呼んでいる頑丈なテーブルの上に仰向けにして大の字に縛りつけた。

「マンコ、失くなって生きていても仕方ないからね。どうこれから殺される気分は、梓」

深雪に問いかけられても梓は恐怖と絶望で答える事が出来なかった。

「そんなに怯えなくてもすぐには殺さないよ。充分楽しんでから殺してあげるからね。まずは、梓の乳首を切断しようか」

真澄と倫子がハサミを持って梓の胸を掴む。

「ひいぃぃぃ、嫌ぁ一思いに殺して下さい」

梓が懇願するが深雪は楽しそうに笑っていた。

「ゆっくり絶望を与えながら殺していくのが楽しいんだよ。あんたの乳首を切った後は、二つの胸の膨らみも切除してやんよ。それから、手足も切断してあげるから。ああ、殺さないで、それで飼うの

も良いかも」

「深雪ちゃん、そんな事したらさすがにこいつ発狂しちゃうんじゃない」

「そうなったら、何処かに売って見世物にすれば良いじゃん」

残酷な事を平気で口にしながら深雪たちは爆笑していた。誰一人、梓を憐れむ者などおらず。まさに人間とは思えない鬼畜の集まりであった。

「はい、それじゃ真澄、倫子。梓の乳首切断してあげな」

真澄と倫子は、梓の乳首を挟んだハサミに力を入れていく。

ジョキッ、ジョキッ

「ひぃぎゃあああああーーーー」

乳首を切断された梓は絶叫するが、今度は男子が梓の胸に細いスチールワイヤーを巻いていた。

「次は結構力がいるから男子に頼むわ。ワイヤーでこいつの胸を切断してあげるの。マンコも胸も失くなれば、こいつ女として完全に終わりでしょう。その後、手足も切断して人間としても終わりにしてあげるの」

廃工場の中に深雪の笑い声が響いていた。

12話、堕ちてきた悪魔

12話、堕ちてきた悪魔

また口も塞がれて処刑台の上に全裸で大の字に拘束されている梓は、真澄と倫子に乳首を切断されていた。そして、次には乳房も切断されようとしている。梓の胸の膨らみの根本に細いスチールワイヤーが巻かれる。それを男子が引っ張っていた。細いワイヤーは梓の胸の肉に食い込んでいき、やがて胸の肉が切れ、血が滲んできた。

「ふぐうぅぅぅぅぅぅぅ！！」

梓は涙を流し塞がれた口で絶叫するが、男子たちは一向に力を緩める気配はない。そして、梓の胸からどんどん血が流れ出してきたと思ったら、食い込んだワイヤーで梓の胸はスパッと切り落とされていた。

「ふが、ふが、ふがあああぁぁぁぁぁぁ！！」

目を見開いて絶叫する梓の胸の切断面に深雪は真っ赤に焼けた鉄棒を当てていた。

じゅーーーーっ

「ふんがあああぁぁぁぁぁぁぁ！」

「まったく、うるさいね。止血してやってるんだから静かにしなさいよ」

もちろん深雪は親切で止血しているわけではない。これから更に梓を痛め付ける為、すぐに死んでもらっては困ると考えているのだ。ただそれだけの事だった。

「女、終わったね、梓。ふふ、次いくよ」

梓の胸を焼き潰した深雪は、次に回転ノコギリを持ってスイッチを入れた。

キュウーーーン

ノコギリの回転音が工場内に響き、梓の顔が恐怖で歪む。

「ふごうううううぅぅぅ！！」

梓は、涙を流し嫌々と首を左右に激しく振るが、深雪は構わず梓の右腕の付け根にノコギリを近づけていく。

「ふご、ふご、ふご、ふご、ふご、ふご、ふご」

梓は狂ったように首を振り、なんとか逃げようとするが、厳重に大の字に拘束された体は動かす事は出来なかった。

キュウーーーン！

「ふごお、ふごうううううぅぅぅぅ！！」

梓は血走った目から大量に涙を流し、自分に迫ってくるノコギリを恐怖に歪んだ見つめている。そんな、梓を可哀想とも思わず深雪は梓の腕の付け根にノコギリを押し付ける。

ギャリ、ギャリ、ギャリ、ギャリ、ギャリ、ギャリ

「ふがあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

梓の絶叫と血飛沫が周囲に飛び散る。深雪も返り血を浴びながら梓の腕を切断していく。そして、深雪は梓の腕を切断してしまった。真澄はすぐに梓の腕の切断面に焼きごてを当て、止血していた。

「反対側、いくよ、梓」

深雪は梓の左腕の付け根にノコギリを当てた。

ギャリ、ギャリ、ギャリ、ギャリ、ギャリ、ギャリ、ギャリ

「ふごうううううぅぅぅーーーー！！！」

ゴトン

梓の左腕も回転ノコギリで簡単に切断されてしまう。両腕を切断された梓は、体をビクビクと痙攣させている。しかし、深雪の凶行は止まらない。次にノコギリは梓の右の太ももの付け根に狙いをつけていた。そして、間髪入れずノコギリを当てていく。

ギャリ、ギャリ、ギャリ、ギャリ、ギャリ、ギャリ

「ふごうううううぅぅぅーーー」

梓は、太ももから脚も切断されていく。深雪は、笑みを浮かべ梓の両脚も切断してしまった。四肢を切断され、頭と胴体だけになった梓が処刑台の上に転がっている。深雪たちは、その梓の惨めな姿を見て爆笑していた。

「どう、梓。いい体になったねえ。嬉しいでしょう。それじゃあ、お望み通り殺してあげるわ」

深雪たちは梓の体をベルトコンベアの上に乗せる。そのベルトコンベアの先には鉄を潰す為のローラーが待ち構えていた。

「ふふ、見れば分かると思うけど、あのローラーでぺしゃんこに潰してあげるね。ぺしゃんこになった梓は防腐処理して飾ってあげるからさ。想像すると楽しくて仕方ないわ」

梓は、きっとこの人は人間ではないと思っていた。

・・人間が、こんな事出来る訳がない。この人たちは悪魔だ。私は、悪魔に殺されるんだ・・

梓は自分の最後がすぐそこに迫っていると感じた。悪魔に魅入られた梓には、もう助かる道はない。深雪はベルトコンベアのスイッチを入れた。コンベアが回り始め、梓の体がローラーに向かって動いていく。

「ふごうううううぅぅぅーーー！！」

梓は切断された手足の付け根をグルグルと動かし必死に逃れようとするが、梓はゆっくりと、だが確実に死のローラーへ向かって運ば

れていく。深雪たちは、梓がローラーから逃れようとコンベアの上で必死に暴れている姿を、楽しそうに撮影していた。

＊　＊　＊

用具室に一人残されていた芳子は、顔を押さえて号泣していた。芳子は、男子生徒にさんざん犯された後、梓同様性器を破壊されてしまっていた。

・・あの女子は人間じゃない。人の姿をした悪魔よ・・

芳子は怖くて自分の性器がどうなったか確認出来なかった。しかし、自分もあの女子生徒同様、性器を完全に壊されてしまったという実感がある。所々意識が飛んでいるが、小陰唇は切除され、子宮の中も塩酸で溶かされた。膣も〝苦悩の梨〟を入れられ破壊された。もう、自分の性器は治療など不可能なほど完全に破壊されてしまった。芳子は、絶望で立ち上がれなかったが、気を取り直してヨロヨロと立ち上がる。

・・最後にする事がある・・

芳子は首にロープを巻いて、天井の梁に通し、跳び箱の上に乗るとロープを固定して飛び下りた。芳子は、しばらくは首に食い込むロープを掴み暴れていたが、やがて動かなくなり、痙攣していた体もユラユラと揺れるだけになっていた。

13話、かわした約束

13話、かわした約束

下校中の天宮野菊は後ろからつけてくる人の気配に気付いていた。

「あの、何かご用でちゅか。きじゃわくん」

いきなり振り向いた野菊に問われた木沢は狼狽えていた。

「あ、あの昼間はごめん。ちゃんと謝ろうと思って……」

「うん、ちょれは偉いでちゅね。見直しまちた。わたちは大丈夫れすけりょ、人をいじめりゅようにゃ人間は嫌いでちゅから」

「ああ、ごめん。本当にそうだよな、もうしないよ」

「うん、よろちい。きじゃわくんは、弱い人をまみょるようにならにゃいとね」

野菊は言うだけ言うとさっさと歩きだしていたが木沢が追いかけてくる。

「ちょっと、待ってよ天宮。言葉だけじゃ悪いからスイーツでも奢ろうと思ってたんだ。駅前の喫茶店〝もみの木〟に行かないか。美味しいスイーツがあるって保田が言ってたから」

歩き出していた野菊だったが、スイーツという言葉で足を止めていた。

「スイーツでちゅか。大ちゅきでちゅが、いけまちぇん。わたちには、スイーツを食べ行くとやくちょくした人がいまちゅ。その人とでなけりぇば無理でちゅ。それに、〝もみの木〟は、その人がちゅきなおみちぇでちゅから、なおちゃらでちゅ」

「えっ、じゃあその人も呼んでいいよ。俺は別に気にしないから」

「呼べまちぇん」

野菊の顔が急に曇ったように感じた木沢は、意味が分からなかった。

「で、電話すれば良いじゃん。約束してるんでしょ」

「無理でちゅ。その人は、わたちの手の届かない遠い所へ行ってちまいまちた。でも、わたちはきっと戻ってきてくれると、しんじていまちゅ」

そう言うと野菊は走り去ってしまった。残された木沢は茫然と立ち尽くしながら、今見た野菊の顔を思い出していた。

・・涙……？・・

野菊が走り出す時に瞳から涙が零れていたのを見たような気がしていた。

・・その人って、まさか死んじゃったってこと？・・

木沢は、また悪い事を言って野菊を傷つけてしまったのかと自責の念にかられていた。

＊　＊　＊

ちふみは、梓が深雪たちに廃工場に連れていかれたという情報を手に入れた。

「ああ、中学生たちなら外れの工場跡に行ったんじゃないかな。あいつら、あの工場をたまり場にしてるようだから。でも、行かない方がいいぞ。あいつらには関わらない方がいい。あんたみたいな人は関わっちゃいけないよ」

ちふみに教えてくれた〝ぎんとき〟（注1）のおじさんは、ちふみを心配して注意してくれるが、ちふみは注文した白餡の甘太郎焼きを受けとると、それを食べながら廃工場に向かって歩きだした。

ちふみが廃工場に着くと、そこは異様な雰囲気に包まれていた。ちふみは、小学生の頃誘い込まれてしまったお化け屋敷を思い出していた（注2）。そこで、ちふみは殺されそうになったのである。今、思い出しても背筋が寒くなる。そのお化け屋敷の気配に、この廃工場はよく似ていた。

・・どうしよう。また一人で行くと、あのお化け屋敷の時みたいに捕まるかも……。でも、今度は相手は妖怪じゃなくて人間だから大丈夫だよね。ちゃんと話せば分かってくれるはずだよ・・

ちふみは、ゆっくりと廃工場の中に入って行った。しかし、ちふみ

の考えは甘かった。人間でも、妖怪以上に危険な人間も存在するのだ。人間でありながら悪魔に魂を売ったような人間。悲しい事だが、それは確かに存在する。それも一見普通の人間と思われる格好で……。

＊　＊　＊

「んもう、これからバイトなのに、なんで緊急招集かかるの」

「仕方ないよ、明日菜。こっちが私たちの本業なんだから」

「でも、今日、瑞穂さん（注3）たちも休みだって言ってたよ。きっと、お店、大変だよ、ヒナ」

「それなら、さっさと片付けて、お店に駆けつけましょうよ、明日菜」

「そうだね。それが一番だね。急ぐよ、ヒナ」

本部で四姫の戦闘服であるセーラー服に着替えた明日菜と雛子は21段変速のロードバイクに飛び乗りペダルを漕ぎだした。襟とスカートが青いセーラー服の明日菜がミニスカートを翻し前を走る。その後ろを赤い襟とスカートの雛子が追っていく。

連絡があった現場は、町外れの公園だった。遊具が数点と、砂場や水飲み場があるだけの小さな公園だが、公園の背後の山には空間の裂け目が現れ、そこから百鬼夜行の妖怪が溢れ出ていた。それを一人の警官が電子銃でなんとか抑えている。

「良美さん（注４）、大丈夫ですか」

「私は大丈夫ですが、坂本さんが」

見ると少し離れた場所に坂本が倒れている。明日菜と雛子は警官の良美の元に自転車から降りて駆けつけ、良美に坂本を連れて逃げて下さいと指示していた。

「敵の数が多いね、朱姫。周りの敵は私が引き受けるから、朱姫は、あの大きいの倒してっ」

「了解、青姫」

明日菜と雛子は、それぞれ新体操のリボンとクラブに似た武器を取り出す。わらわらと押し寄せてくる〝頬撫で〟や〝鬼火〟、〝小鬼〟に向かって明日菜は立ちはだかる。

「スパイラル」

明日菜のリボンが螺旋状に動き妖怪を吸い込み切り刻んでいった。そして、背後に控えていた巨大な妖怪〝泥田坊〟への道が開ける。そこに雛子は飛び込み〝泥田坊〟との間合いに入っていた。

「殴技〝勇往邁進〟」

雛子の必殺の攻撃だ。雛子の腕が６本にも見える程の高速で止まらない攻撃である。雛子のクラブが無限に〝泥田坊〟に叩き込まれる。

「ぐおうーーー！」

”泥田坊　”は雛子の怒涛の攻撃の前に粉々にされ散っていった。

（注１）　”ぎんとき　”は、皆が好きな甘太郎焼きのお店。

（注２）「移ろう季節に想いを馳せる君」のエピソードの一つ。妖怪に捕らえられたちふみは、青姫・西園寺弥生と朱姫・蓬莱刹那に助けられる。

（注３）港西大学ホラー映画同好会の一人、山仲瑞穂。「移ろう季節に想いを馳せる君」に登場。

（注４）同じく「移ろう季節に想いを馳せる君」に登場するＮ署の警察官、浅野良美。坂本も同僚の警察官である。

１４話、膣切開

１４話、膣切開

「ふう、片付いたね。朱姫」

「お疲れ様、青姫」

二人は印契を結び、真言を唱えて空間に出来た裂け目を封印する。

「これで、よしと。それじゃ急いで帰ってバイトに行こうか、ヒナ」

「でも、シャワーは浴びたいな。こんな汚れてたらお客さんの前に出れないよ」

雛子の言うのも尤もだった。彼女たちのバイト先、スーパー太陽では青果部に配属されていて、バックヤードでのラッピングから商品の品だし、そして、状況によってはレジに駆り出される事もある。今日、普段レジを担当している瑞穂たちが休みという事は、レジに立つのは間違いないだろう。戦闘で汚れた体をシャワーで流したいのも当然といえた。

「うん、早く本部に戻ろう」

明日菜と雛子は２１段変速のロードバイクに跨がり、来た時と同じ速度で本部に向かっていた。超ミニのスカートが捲れ、白い下着が

丸見えになっているが、気にもせず本部へ急ぐ二人だった。

＊　＊　＊

天宮野菊は一人歩きながら、月での出来事（注）を思い出していた。

・・人間が神に勝つ。そんな不可能とも思える戦いに勝利した弥生。私は、お前に対して深い感動を覚えた。西園寺弥生、お前の名を思い出す度に私の心はときめく。心配するな、弥生。私も、お前の意思を引き継ぐ。人間を守っていく・・

野菊は、大きく背伸びして自分に気合いを入れていた。

「さあ、わたちも頑張るりょ」

その姿を、まだ野菊を追いかけていた木沢が見て安堵していた。

・・良かった。天宮、元気みたいだ。さっき涙を見たと思ったのは気のせいだったんだな・・

安心した木沢は、ここでようやく野菊の後をつけるのを止め、帰路についていた。そこで、木沢は梓の連れていかれた廃工場へ向かうちふみを見かけていた。

・・あれっ、保田がどうしてこんな所を歩いているんだろう?・・

不審に思った木沢は、今度はちふみの後を追いかけていた。

＊　＊　＊

「ほらほら、もっと頑張らないと潰されてぺしゃんこだよ」

ベルトコンベアの上で必死に蹌く梓を笑いながら深雪は撮影に余念がない。手足を切断されてしまった梓は、顎を使って必死にローラーから逃げようとするが、そのローラーはどんどん近づいてきていた。

「あはは、もうすぐぺしゃんこだね。無様だね、梓。あんたが、この世から消えると思うと清々するよ」

「たぢゅけで、おねがいじまぢゅ」

冷たく言い放つ深雪に、梓は泣きながら必死に懇願するが、深雪は梓を見て笑っているだけで助けようともしない。廃工場の中に入り、その光景を覗き見ていたちふみは恐怖で足が震えていた。

・・何、あの人たち……。あんな事を平気でするなんて人間じゃないよ・・

一刻も早く止めないと梓はローラーに潰されてしまう。しかし、ちふみは恐怖で足が動かなかった。

・・ううっ、何やってるの私……。あの子の命がかかっているんだよ。動きなさい・・

ちふみは自分の太ももをバシバシ叩くが、あまりの恐怖で筋肉が萎

縮しているのか、足は痙攣したように震えて動かない。ちふみは、とにかく警察に連絡だとスマートフォンで、知り合いの警察官・良美に電話をかける。

「分かりました、すぐに向かいます」

緊迫したちふみの声で異常を感じた良美は、すぐに向かうと言ってくれたが、良美を待っている間に梓は潰されてしまうだろう。良美に電話して少し気が楽になったちふみは足が動くようになっていた。

「あなたたち、何やってるの。警察を呼びましたよ。早く止めなさい」

ちふみは深雪たちの前に飛び出て叫んでいた。一瞬驚いた表情をした深雪たちだったが、すぐに笑みを浮かべる。

「ちょっと、コンベア止めといて。せっかく梓が潰れるシーンが撮れないと困るから」

雄一に命令した深雪は、ちふみに向き直る。

「誰、あんた。私に命令するなんていい度胸だね。警察を呼んだ？馬鹿みたい。そんなの私に関係ないよ。雄一、せっかく来てくれたんだ。この女、犯してやりなよ」

ちふみは咄嗟に逃げようとするが、それより早く武夫と浩司に飛びかかられて押さえつけられてしまった。

パン、パン、パン、パン

ちふみの頬が激しく叩かれる。

「せっかく来たのに逃げようとするなよ。ゆっくり楽しんでいきな」

武夫が、ちふみの頬を叩きながら馬乗りになって、ちふみを押さえている。その下で浩司がちふみのスカートを捲り上げていた。ちふみの白い下着が露に晒され、ちふみは足をバタつかせて抵抗するが、その足も押さえつけられ、下着にナイフが当てられると簡単に切り裂かれてしまった。ちふみから剥ぎ取られた下着は、そのままちふみの口に入れられ、その上にガムテープが貼られる。ちふみは、この一連の慣れた動作から、この男子たちはいつもこの様な事をやっているのだと確信した。

「ふぐっ」

ちふみの膣に浩司が指を入れていた。

「ずいぶん狭いな。こいつ、初めてだな」

「ああん、めんどくさいな。ナイフで切って拡げとけ、浩司」

雄一の命令で浩司はちふみの膣口にナイフの切っ先を当てた。

「ふー、ふー、ふー、ふー、ふー、ふー」

ちふみの鼻息が荒くなり、目から涙が零れ落ちていた。

「よーし、いくぞ。いいか、動くなよ。動いたら、もっと大変な事になるぞ」

浩司がナイフに力を入れ、深雪たちが周りから撮影していた。そして……。

ドスッ！！

「ふごおーーーーーーーー！」

ナイフが深くちふみの膣に突き刺され、ちふみの膣から血が噴き出している。ちふみは膣を切られたショックで失神してしまっていた。

「あはは、こいつマンコの穴切開されて失神したよ。いいざまだねぇ」

廃工場の中に、深雪たちの笑い声が響いていた。ちふみの初めての経験は、愛し合った人間ではなく。冷たいナイフの刃だった。その惨めなちふみの姿を深雪は笑いながら何枚も何枚も撮影していた。

（注）「移ろう季節に想いを馳せる君」での、破壊神シヴァとの最後の戦い。

１５話、乳首釘打ち

１５話、乳首釘打ち

「ふぐううううっ」

ナイフで膣を切開されたちふみは、そのまま雄一たち男子に犯されていた。服も全て剥ぎ取られてしまったちふみは、裸体を撮影されながら犯されている。そして、雄一は激しく振っていた腰を止めると、ちふみの中に射精していた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

雄一が、ちふみの上から退くと、今度は武夫がちふみの上に乗っていた。ちふみは泣きながら男子に無理矢理犯されて、もう抵抗する力も失くなっていた。

「いっぱしに正義感振りかざしてやって来た優等生が犯されちゃって笑うわ。力の無い正義なんて、何の役にも立たないの。ふふふ、あんたのマンコも壊してあげるから、今のうちに気持ちよくなっておきなよ」

深雪が、ちふみを見て笑っていると真澄が提案してきた。

「ねえねえ、深雪ちゃん。この女のマンコ壊した後、こいつも手足切断して梓と競争させない。ベルトコンベアに乗せてさ。どっちが

勝つか。勝った方は楽に殺してあげるの」

「真澄も鬼畜だね。けっきょく、どっちも殺すんだ。でも、面白そう。やろう、やろう。男子、早く済ませてよ」

深雪に急かされて武夫は慌てて射精していた。そして、急いで浩司に代わる。けっきょく、ちふみは全ての男子に犯され、中出しされ泣いていた。ちふみの膣から白濁した液がドロリと流れ出ている。

「あは、心配しないでいいわよ。あんたのマンコは壊すから、妊娠なんてしないから。ほら男子、終わったなら退いて。それとホース持ってきてよ。あんたらの汚い精液洗うから」

男子からホースを受け取った深雪は。ちふみの膣にホースを入れ、水でちふみの膣内を洗浄する。その間にちふみは体を抵抗出来ないように真澄と倫子に大きく開脚されて縛られていた。

「さあて、優等生のマンコ壊していこうか。こんな所に顔出さなければ良かったのに残念だね。でも、マンコ壊される経験なんて滅多に出来ないからね。貴重な経験でしょう。ふふふ」

ちふみは首を左右に振って嫌々というように泣いているが、深雪たちはちふみの性器をどう壊していくか楽しそうに打ち合わせしていた。

「おーい、お前たちの話がまとまる前に俺たちにも楽しませてくれよ。マンコはお前たちが壊していいから、胸は俺たちにやらせてくれよ」

雄一が、代表して深雪に頼んでいた。

「いいよ、好きにして。優等生の女子だから、ちゃんと痛め付けてやるんだよ」

深雪が軽く返事をすると、雄一たち男子は工場内に落ちている釘た針を集めていた。そして、ペンチやハンマー、ガスバーナー等の道具も持ってくる。

「よーし、まずはこの優等生の胸の膨らみに釘や針を刺していくぞ。２００本くらい集まったから全部刺して、こいつの胸、針山にしてやりうぜ」

雄一たちも楽しそうに、それぞれ釘や針を持つとちふみの胸に突き刺していった。

プツッ、プツッ、プツッ、プツッ、プツッ

「ふごおおおおおっ！！！」

ちふみの胸に釘や針が突き刺され、さらに深く押し込まれていく。

・・痛いいいっ、許してえええっ・・

ちふみは涙を流し呻き声を上げるが、雄一たちは笑いながらちふみの胸に釘や針を刺していく。たちまち、ちふみの胸は針山と化していった。

「さーて、それじゃ最後に残したここを壊してやろうか。はは、まさかここはやられないなんて思ってないよな。楽しみは最後にとっておくんだよ。ここは、もう使えないように壊すからな」

雄一は、ちふみの二つの胸の先、乳首を釘でツンツンとつついていた。

「ふぐ、ふぐ、ふぐうううううっ」

ちふみは涙を流し嫌々と首を振るが、雄一はちふみの上半身を起こし背中にドラム缶を置き、ちふみの上半身を起こしたままにする。そして、ちふみの乳首の下に木製の板を置いた。何をされるのか分からなかったちふみだが、乳首の上に釘が当てられ、金槌を持った雄一の姿を見て、恐怖で絶叫していた。雄一は板にちふみの乳首を釘で打ち付けるつもりだと理解したのだ。

タンッ

「ふぐうううううっ！！」

金槌が振り下ろされ、ちふみの乳首に釘が打ち込まれる。

ピュッ

ちふみは乳首を釘で板に打ち付けられる激痛に漏らしてしまっていた。

タンッ、タンッ、タンッ、タンッ、タンッ、タンッ

ピュッ、ピュッ、ピュッ、ピュッ、ピュッ、ピュッ

乳首に釘が打ち込まれる度にちふみは、ピュッピュッと尿を漏らしてしまっていた。そして、雄一はちふみの左右の乳首を板に釘で打

ち付けてしまった。ちふみの、その惨めな姿は深雪たちに大いに受けていた。

「やるじゃない、雄一。なかなか良いよ。雄一も成長したね」

深雪は上機嫌だった。それに気を良くした雄一は、ちふみの乳首をさらに痛めつける。

「どうせ、お前、深雪に殺されるんだから乳首なんて、もう要らないしな。こんな釘打ちされたら、もう使えないだろうけど、もっと完全に壊してやるよ」

雄一は、野外で使う固形燃料の蓋を開けると、板に打ち付けられたちふみの乳首にたっぷりと塗りつける。ちふみは、信じられないという顔で、自分の乳首を見つめ、青ざめた顔でガタガタ震えていた。

・・嘘、嘘っ。まさか本当にそんな事しないよね・・

しかし、雄一はちふみの想像した事を実行する。固形燃料を塗った、ちふみの板に打ち付けられた乳首にライターで点火したのだ。

「ふごうううううううっ！！！」

板の上で、釘で打ち付けられたちふみの二つの乳首が燃え上がっていた。それを見た深雪たちは、泣き叫ぶちふみを指さして爆笑していた。

１６話、切断される乳首

１６話、切断される乳首

ちふみから連絡を受けた良美は、負傷した坂本を病院に送り、自転車に乗って廃工場に向かっていた。そして、廃工場に近づくにつれ嫌な気配が漂ってくる。

・・これは以前、異界に行った時に感じた気配に似ている。まさか、またシヴァのような敵が現れたの・・

良美は、これは自分の手には負えない事件かも知れないと考えていた。良美は、自転車を止めるとスマートフォンを取り出した。そして、自分も命を助けて貰った百地柚希に電話する。玄姫と呼ばれていた柚希は、今はその座を譲り、魍魎討伐機関本部で後進の育成に励んでいた。

「あっ、百地さん。ご無沙汰してます……」

良美が、電話で事情を話すと柚希は、青姫と朱姫がちょうど出動中だからそちらにも向かわせますと言ってくれた。良美は安堵して再び自転車に乗ると廃工場目指してペダルを踏んでいた。

＊　＊　＊

乳首を板に釘で打ち付けられ、燃やされているちふみは狂ったように絶叫していた。

「ふぐうううぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！！」

・・あぢゅうううぅぅっ、あぢゅいようううぅぅっ！！・・

雄一たち男子は、絶叫するちふみを楽しそうに眺めているが、深雪たち女子はちふみの性器を破壊する道具を作成していた。

「これじゃ手緩いね。もっと釘の数増やそうよ」

深雪の提案で、真澄たちは４センチ角の角材に釘を打ち付けていた。角材から無数に釘が突き出している。そして、もう一つ用意していたのは巨大な釣り針のようなフックだった。

「こっちの準備終わったから、そっちも終わりにしてよ。これから、その優等生のマンコ壊してやるんだから」

深雪の号令で男子たちは、じゃあ、こいつの乳首を切断して終わりにしようとノミと金槌を持ち出してきた。そして、燃えているちふみの乳首の根元にノミの刃を当てる。

「さあ、優等生ちゃん。乳首とおさらばだ」

カーン！！

雄一は金槌でノミを打っていた。ちふみの乳首はノミの一撃であっさりと切断されてしまっていた。

「ふぐうううぅ」

ちふみは苦悶の表情で痛みをこらえるが、反対側の乳首も切断されてしまう。雄一たちは板に打ち付けられ、まだ燃え続けている切断された二つの乳首を見て爆笑していた。

「ほら、お前の乳首、まだ燃えてるぞ」

「あらあら、良かったね。乳首、切断して貰えたんだ。ふふ、これからはマンコ壊してあげるからね。もう、あんたは女じゃなくなるの。嬉しいでしょう」

ちふみの燃えている乳首を見ながら深雪は楽しそうに言う。真澄と倫子も、新しい玩具が手に入った子供のように満面の笑みでちふみを見つめていた。

「それじゃあ、あんたのマンコの最後だよ。この私たちの手作りの破壊棒をマンコの穴に突っ込んで壊してあげる」

深雪が持つ角材から無数の釘が飛び出た棒を見て、ちふみは恐怖で顔面は強張り、体は震えが止まらなかった。

・・う、嘘だよね。ホントにあんな棒、私のマンコに挿れないよね・・

ちふみは嘘であると思いたかったが、胸は針山にされ、乳首は釘で板に打ち付けられて、その上、燃やされて切断されてしまっている。あの棒も本当に膣に挿れるつもりだと考える方が間違いなかった。

・・あんな、釘だらけの棒をマンコの穴に挿れられたら、本当に私のマンコ、壊れちゃうよ。嫌だ、怖いよ。浅野さん、早く来て・・

もう、ナイフで切開されてしまったちふみの膣であるが、この状態なら治療も可能だろう。だが、深雪の持つ釘だらけの棒を膣に挿れられたら、膣はズタズタにされ完全に破壊されてしまう。ちふみは、警察官の良美が早くここに来てくれる事を願っていた。

その良美は廃工場の前に来ていた。入り口を探して中に入ろうとした良美は、そこで中を覗いている男子中学生を見つけていた。

「君、何をしているの？」

突然、良美に声をかけられビクッと体を震わせた男子は、振り向いて制服姿の良美を見て、大きく息を吐いていた。

「この中に同級生が入っていったのですけど、俺が入ろうとしても入れないんですよ。それに、中の様子も見れないし……。あっ、俺は木沢と言います」

「入れない？」

良美は、シャッターの開いている入り口を見る。シャッターの内側は真っ暗な闇になっていて、中の様子も見えなかった。良美は、近付いて手を伸ばしてみるが、そこに見えない壁があるようで、工場の中に入る事は出来なかった。

「ちょっと、退いていてくれる」

良美は、木沢を離れさせ電子銃を抜くと、見えない壁に向かって銃を撃ってみた。しかし、何回撃っても変化はなく、見えない壁に阻

まれて工場の中に入る事は出来なかった。

・・これは、結界だ。やはり、妖怪の仕業のようだ。私の力では結界は破れない。早く伊集院さんと早乙女さんが来てくれないと、妖怪の仕業となるとちふみちゃんが心配だよ・・

良美は、ちふみが無事である事を祈るが、ちふみはもう深雪に性器を壊される寸前であった。

「覚悟してね、優等生。思い切り泣き叫んで良いからさ。ウンコも漏らしていいよ。これやると、みんなウンコ漏らしちゃうからさ。たぶん優等生でも漏らしちゃうよね。マンコ壊されて、ウンコ漏らすなんて楽しみ」

ちふみの足は真澄と倫子が大きく開かせ、動けないように左右からしっかりと押さえている。そして、深雪がちふみの性器、膣口に角材の先端を当てた。いよいよ、ちふみの性器が破壊される。ちふみは恐怖と絶望で号泣していた。

17話、ちふみ、性器破壊

17話、ちふみ、性器破壊

・・ううっ、浅野さん、早く来て・・

ちふみは救いを求めるが、その良美が廃工場の前にいながら、そこに張られた結界で中に入れずにいた。

「あははっ、何を期待しているのか分からないけど、警察なら来ないよ。まあ、別に来ても関係ないけど、ここには入れないようにしてあるからね。残念だね。もう、あんたは助からないんだよ、優等生」

高らかに笑う深雪を見てちふみは、深雪が本当の事を言っていると感じていた。

・・警察は来れない……。きっと何か仕掛けがしてあるんだ。私が呼んだせいで浅野さんも殺られちゃう……・・

ちふみは、後悔と絶望でただ震えるしかなかった。

「おっ、良いね。その表情大好きだよ。でも私がもっと好きなのは、あんたみたいな優等生がマンコ壊されて泣き叫ぶ表情だよ。それじゃ、いくよ。女に産まれた事、後悔しな」

深雪は、ちふみの膣口に当てた無数の釘が飛び出している角材に力を入れる。

ムリッ！

「ふぐっ……」

ちふみの膣に角材の先端がめり込んでいた。

「ふふふ、ここからが地獄だよ。それっ！」

グリュンッ！！

「ふごううううううううううううううっ！！！！」

ぶりっ、ぶりぃぃぃっ

深雪はねじり込むように角材をちふみの膣に突き挿れた。ちふみの膣は一瞬で角材に裂かれ、釘でズタズタにされる。その、膣を壊される激痛にちふみは絶叫し、肛門からぼとぼとと大便を漏らしていた。

「あははっ、やっぱりウンコ漏らしたね、優等生。マンコの穴、殺られると女はみんなウンコ漏らすんだよね。でも、これじゃ終わらないよ」

深雪は、ちふみの膣に突き刺した角材をグリグリと回転させる。ちふみの膣は容赦なく、完膚なきまで破壊されていく。

「ふごうううううううううううううっ！！！」

膣を破壊され絶叫していたちふみの目がくるっと白目を剥き、ちふみは大便を漏らしながら失神していた。

「あらら、ウンコ漏らしながら失神したよ、この女。イキッて、ここに乗り込んで来たのに情けないねぇ。まだ、子宮も壊してないのに、見かけ倒しもいいとこだよ」

深雪が、ちふみを嘲笑っていると真澄と倫子がウズウズした顔で深雪に言ってきた。

「ねえねえ、深雪ちゃん。私たちにも、こいつのマンコ、グリグリさせてくれる」

深雪が、どうぞとちふみの股の間の席を譲ると真澄と倫子は嬉しそうに交代でちふみの膣に突き挿れられた角材をグリグリと回転させていた。その度に、ちふみの膣から血が流れ出し、大便がむりむりと漏れていた。

「あはっ、このマンコの穴壊す感触最高。もう、こいつのマンコの穴、使い物にならないね。ぐちゃぐちゃだよ。いい気味だね。ああ、なんか私、イキそう」

真澄と倫子は、角材を回し、徹底的にちふみの膣を破壊しながら、お互いの性器を刺激し合い絶頂に達しようとしていた。

「あっ、もうイク」

「私も……」

「あっ、ふう……」

プシャーーッ

真澄と倫子は、ちふみの膣を壊しながらの自慰に潮を吹きながら果てていた。そんな二人を他所に深雪は次の性器破壊の準備を進めている。滑車にワイヤーを通し、ハンドルで巻き取れるようにする。ワイヤーの先には鈎針状のフックを取り付けていた。

「ほら、お前たち、次にいくよ」

深雪の言葉で惚けていた真澄と倫子は、はいとギラギラした瞳で答えていた。

＊　＊　＊

良美は、木沢に帰るように指示を出していた。こんな結界が張られているようでは、尋常ではない事態だ。間違いなく強力な妖怪が潜んでいるという確信があった。そんな所に一般人、それも中学生の木沢をいさせる訳にはいかない。ちふみが心配だと言い張る木沢を、良美はなんとか帰らせ、明日菜と雛子の到着を待っていた。そこへ、ようやく待ち望んだ二人がやって来る。ロードバイクでミニスカートを翻してやって来た二人は、良美の前で自転車からザッと降り、廃工場に目を向けた。

「これは、かなり強力な結界ですよ、明日菜。これを破るには時間がかかってしまうよ」

「そうだね、それではちふみちゃんが心配」

明日菜は良美に、他の人がここに近付かないようにして下さいとお願いする。

「私たち二人が結界の中に入って、中の妖怪を倒します。結界を破るよりも、その方が早いと思いますので」

明日菜と雛子は印契を結び真言を唱え始めた。そして、印を切ると結界の中へ入っていく。二人は、良美たちの侵入を拒んでいた見えない壁を通り抜け廃工場の中に入っていった。

＊　＊　＊

膣を破壊されたちふみの次なる性器破壊の準備が整い、さっそく実行に移されようとしている。ちふみの膣から角材が抜かれ、今度はワイヤーに取り付けられたフックが膣の中に入れられ、さらにその奥の子宮口から、ちふみの子宮内に挿れられようとしていた。

「しっかりと抜けないように、こいつの子宮の中にひっかけるんだよ」

深雪の命令で真澄が、ちふみの小さな子宮口からフックを中に入れ、しっかりと抜けない事を確認していた。ちふみは大きく開脚されたまま動けないように厳重に固定されている。ちふみの膣からは子宮にフックをかけたワイヤーが滑車まで伸びていた。

「さあーて、始めようか。こいつのマンコの最後だ」

深雪は残酷に笑うと、滑車に付いたハンドルをクルクル回し、ワイヤーを巻き取り始めた。それまで、弛んでいたワイヤーがピンと張られていく。ついにちふみは性器の奥、子宮まで破壊されようとしていた。

18話、奴隷契約書

18話、奴隷契約書

クルクルと深雪は滑車に付いたハンドルを回していく。それにつれてワイヤーが引かれ、フックをかけられたちふみの子宮も引かれていく。

「ほら、この女を起こしてあげなよ。自分の子宮が壊されるところ見ていたいだろうからさ」

深雪に言われて真澄と倫子もニヤリと笑う。そして、ちふみの頬をパシパシ叩き、ちふみを目覚めさせていた。

「うーん……」

目が覚めたちふみは、自分の腰と脚がこれ以上ないという程厳重に固定されているのに顔を強張らせ、さらに大開脚された自分の脚の中心からワイヤーが伸びているのに気付き目を見開いて震えていた。

「自分が何をされているか分かるかい？」

笑いながらハンドルを回す深雪に、ちふみはいいえと首を横に振っていた。

「ぷぷぷっ。あんたの子宮を引き摺り出してやるんだよ。自分の子

宮が見られるなんて嬉しいだろう。ぷぷ、その後、子宮を壊してあげるから。そうだね、針山にして焼いて切り開いてあげる。完全に壊してやんよ。その後、卵巣も取り出して潰してあげるわ。あんたの女は全て壊す。あれ、嬉しくて泣いてるの。そんなに喜んで貰えると、私も嬉しいよ。ぷぷ」

深雪は楽しくて仕方ないという風に笑いながらハンドルを回す。ワイヤーはどんどん巻き取られ、ちふみの子宮にフックが突き刺さり食い込んできた。

「ふぐうううぅぅぅぅぅぅっ！！」

・・いだあぁぁぁぁっ、いだいいぃぃぃぃぃっ・・

子宮にフックをかけられ無理矢理引き摺り出されようとしているちふみは、大量の涙と鼻水を垂らし絶叫する。

・・いやだぁぁぁっ、もうゆるじでぐだざいぃぃぃっ・・

しかし、ちふみが許される事などない。ハンドルは休みなく回され、ついにちふみの子宮頸部が膣口から顔を出していた。

「あははっ、ほらほら見えてきたよ。ころっとしたピンク色のまだ可愛い子宮頸部だね。でも、もう終わりだよ。二度と見られない程、ズタズタに壊してあげるからね。可哀想にね、この子宮。使用される前に、使用出来なくなっちゃうんだ。あははっ、おかしい」

深雪は、ちふみの膣口から顔を出している子宮を見て爆笑していた。それにつられて真澄と倫子も笑いだすが、子宮を引き摺り出されているちふみは、それどころではなかった。

・・ううっ、ごべんなざいっ。もお、ざからいまぜん。なんでも、いうごどぎぎますがらあっ。ゆるじでぐださいぃぃっ・・

ちふみは、必死に頭を振って許しを乞う。もう、ちふみの子宮は半分以上膣口から出されてしまっている。

「ねえ、深雪ちゃん。この女、何か言いたいみたいよ。何言うか聞いてみようよ。マンコ壊される感想も聞きたいよ」

しかし、深雪は興奮した顔でハンドルを回し続けている。ちふみの子宮は、もう全て引き摺り出されてしまいそうであった。ハァハァと息を荒くしながらハンドルを回していた深雪だが、そこでようやく真澄たちが何か言っているのに気付く。

「どうしたの？」

「深雪ちゃん、この女何か言いたいみたいだから聞いてみようよ」

そこで、ようやく手を止めた深雪はちふみの口に貼られたガムテープをバリッと剥がし、口の中から詰め込んだ下着を取り出す。

「言いたい事があるなら言いなよ。バカ女」

「お願いします……」

パーンッ！！

ちふみの頬が思い切り叩かれていた。

「マンコ壊して貰ってるのにお礼も言えないの、バカ女」

「ううっ、私のマンコを壊してくれて、ありがとうございます、深雪様」

「あんた、みたいなバカに名前呼ばれるの気分悪いから、御主人様って呼びなさいよ。それで、何？許してくれと言っても無駄よ。あんたのマンコは徹底的に壊すから」

「はい、ありがとうございます、御主人様。私のマンコ、徹底的に壊して楽しんで下さい。ですから、御主人様の奴隷として、これからもお仕えさせて下さい」

ちふみは泣きながら必死に深雪に頼んでいた。もう、ちふみには正義感も自尊心もなかった。とにかく、殺されたくない。その一心であった。無理のない、いくらちふみが正義感に溢れた少女だとしても、この圧倒的な暴力と恐怖の中で、その心を持ち続ける事は不可能だった。まだ中学生の女子なのである。それは、当然の事と云えた。

「ふうん、死にたくないって。かっこよく登場したわりには情けないね。でも、奴隷になりたいなら認めてやるよ。この契約書にサインしな」

深雪は、何処からか奴隷契約書を取り出していた。そして、ちふみの縛られている両腕を解いてやる。

「さあ、この奴隷契約書に自分の血でサインするんだ。マンコ、裂けてるからそこの血を使えば良いだろう。ふふふ、この契約書は強力だからね。一度、契約したら破棄出来ない。あんたは魂を縛られ

て永遠に私の奴隷になる。さあ、早くサインしな」

深雪から渡された奴隷契約書は、まるでこの世の物とは思えない気配を発していた。普段のちふみであれば絶対にサインなどしないであろうが、この時のちふみは正常ではなかった。助かりたい一心で、まともな判断が出来なかったのだ。ちふみは、この奴隷契約書にしっかりとサインしてしまった。ちふみがサインすると契約書は空中に浮かび上がり、クルクルと回転すると、空間に吸い込まれるように消えていった。ちふみは、それを見て自分は取り返しのつかない事をしてしまったのではと激しく後悔していた。

「さてと、めでたく奴隷契約が済んだところで、名前をつけてやんよ。ずいぶんウンコ漏らしてくれたからお前の名前はアヌスだ。さあ、それじゃアヌスの子宮を壊していこうか。子宮を、完全に壊される。これがアヌスの奴隷としての最初の仕事だよ。頑張って泣き叫ぶんだよ」

深雪は、引き摺り出したちふみの子宮を完全に破壊する気でいた。

19話、ちふみの最後

19話、ちふみの最後

引き摺り出されたちふみの子宮に最後の時がやってきた。ちふみの子宮は完膚なきまで完全に壊される。それは、逃れようのない運命だとちふみは悟り、恐怖と絶望で泣き叫んでいた。しかも、愚かなちふみは命惜しさのあまり奴隷契約を安易に結んでしまった。ちふみは、これで永遠に深雪の支配から逃れられないのだ。

「あんたの子宮をこの板に打ち付けてやんよ」

深雪は引き摺り出したちふみの子宮の下に一枚の板を置く。雄一たちが、ちふみの乳首を板に打ち付けたのが気にいったらしい。深雪は釘と金槌を持つと、容赦なくトントンと釘を打ち始めた。

「いだあああぁぁぁぁっ！！ゆるじでくださいぃぃぃぃ！！あぶうぅうぅぅっ！！！！」

ちふみは発狂したように泣き喚くが、深雪は次々に釘を打ち、ちふみの子宮を板に留めていく。あっという間にちふみの子宮は、解剖されるカエルのように板に打ち付けられてしまった。

「さあ、次は切開して子宮の中身を見させて貰うよ。楽しみだね」

平気で恐ろしい事を口走る深雪にちふみは、ガタガタと震えが止ま

らず泣き続けていた。そのちふみの子宮にカッターの刃が当てられる。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ」

ちふみの息が荒くなるなか、深雪はカッターの刃をツーッと動かした。

「あぶうぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」

ちふみが絶叫するが深雪は、ちふみの子宮を切り裂いてしまった。そして、子宮をガバッと広げる。

「あははっ、綺麗なピンク色だね。どう、自分の子宮の中身が見られて嬉しいだろう。もちろん、あんたの子宮はまだ壊してあげるから期待していなよ」

深雪は残酷にちふみに告げ、真澄にガスバーナーを持ってくるよう指示していた。ちふみは、ここまでされてもまだ許されず、自分の子宮は壊されるのかと涙が止まらなかった。そこへ、真澄がガスバーナーを持ってきて点火していた。バーナーの先から青い炎が噴出している。

「ふふ、これであんたの子宮を炙ってやんよ。もちろん内側の子宮内膜も黒焦げにしてやるから思う存分苦しんでね」

そう言うと深雪は真澄からバーナーを受け取り、ちふみの子宮を炙り始めた。

「ひゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

再びちふみが絶叫するが、深雪は構わずちふみの子宮を焼き続ける。ちふみの子宮はバーナーの炎で焼かれ、焼け爛れていく。そして、肉の焦げる臭いが辺りに充満し、ちふみの子宮は黒焦げの炭にされていた。

「あーあ、ピンクの綺麗だった子宮が、真っ黒の炭になっちゃったね。どう、女の大切な所壊された感想は？」

「ううっ、ありがとうございます。私の汚ないマンコ壊してくれて嬉しいです。ここまで徹底的に壊して貰えるとは思っていませんでした。さすが、ご主人様です。ううううっ」

ちふみの震える声で泣きながらお礼を言う姿に深雪は満足していた。

「うんうん、奴隷らしくて良いね。一ついい事を教えてやんよ。あんたは私の奴隷になった。魂までも含めてね。あんたの全てが私の支配下あるから、あんたは死ななくなった。というか、私の許しがなければ死ぬ事も出来ないんだよ。そして、壊された部分も再生する。嬉しいだろう。これから毎日、マンコを壊されて殺されるんだよ」

ちふみは、あまりの事に絶句していたが、真澄と倫子は大喜びだった。

「ええっ、これから毎日こいつのマンコ壊して殺せるの」

「深雪ちゃん、最高。これ、最高の玩具じゃない。毎日、当番決めてこいつのマンコ壊して楽しもうよ。もう何やってもＯＫだよね。楽しくなりそう」

もう、真澄と倫子は瞳を輝かせてはしゃぎまくっていた。深雪も楽しそうに二人を見ていたが、冷静に口を挟む。

「それじゃあ、こいつを殺そうか。死んでいく姿を撮影して楽しもう」

深雪は引き出されたちふみの子宮を根本から切断して、ちふみの首にロープを巻く。そして、そのまま引き上げていった。両腕を縛られ首を吊られてちふみは目を大きく見開いて苦しむが、どんどんとロープは引かれ、必死に爪先立ちで立っていたちふみの足が床から離れて宙に浮く。そして、ちふみの体は高く上がっていった。

「足に錘も付けてあげよう」

台車で運んできたコンクリートブロックを男子たちがロープでちふみの足に縛り付ける。５０キロはありそうなコンクリートブロックが足に吊り下げられちふみの首にロープが激しく食い込んでいく。ちふみの体はピンと一直線に伸びきり、ごきごきと喉の骨が砕けるような音がしていた。

「あははっ、良いね。こんなのが毎日楽しめるなんて最高だわ。奴隷契約を結ぶなんて、こいつの馬鹿さ加減には笑っちゃうね」

ちふみを首吊りにして死んでいく姿を撮影しながら爆笑して楽しんでいる深雪たちの姿に梓は戦慄していた。

・・私を助けに来たばかりにあの人は、あんな酷い目に合って殺された。もう、私も生きていられない。早く殺して下さい・・

梓は、自分も早く死にたいと思っていた。そこへまた誰かの声が聞こえた。

「ちふみちゃんっ！！」

女性二人の声だった。梓は、その声の聞こえた方に目を向ける。深雪たちも、そちらに顔を向けていた。そのみんなの目には、青い色の襟のセーラー服と赤い襟のセーラー服を着た少女の姿が映っていた。

２０話、意外な強敵

２０話、意外な強敵

ちふみは全裸にされ首を吊られ、足にも錘を下げられ、もう生きているのか分からない状態だった。

「青姫、気をつけて。あの人たちは、もう人間じゃないよ」

「ええ、おそらく取り憑かれて本来の自分は喰われてしまったのでしょう。あんなのが増えていったら大変な事になるよ。ここで、消滅させないと、朱姫」

明日菜と雛子は、それぞれリボンとクラブを持ち深雪たちに向かっていく。

「おやおや、またおかしな人が来たよ。今日は来客が多いね。せっかくだから、コイツらも犯してマンコ壊してあげましょうよ」

「うん、やっちゃおうよ、深雪ちゃん」

真澄が、工場に転がっていた鉄パイプを振り上げ明日菜に向かっていく。雛子には、雄一たち男子がハンマーや角材を持って飛びかかっていた。しかし、雛子は軽々と男子の攻撃をかわし、クラブの一撃を与えていく。

「ごはっ……」

雄一たちは、雛子のクラブで急所を痛打され倒れていった。明日菜もリボンで真澄の鉄パイプを奪い取り、真澄の首を絞め気絶させていた。そして、隠れて飛びかかってきた倫子も鳩尾に突きを入れ気絶させていた。残ったのは深雪一人。勝風はあったかに見えたが、深雪は慌てる事なく、その様子を楽しそうに眺めていた。

「あらら、みんなやられちゃって情けないね。せっかく、マンコ破壊出来る女が自分から来てくれたのに、楽しまなきゃ」

余裕の深雪に向かって雛子が飛び出していく。深雪は右手を上げ、人差し指を天に向けると、それを今度は雛子に向かって指差した。その瞬間、雛子に稲妻が落ちる。

バスッ

「あっ……、がっ……」

雛子が崩れ落ちる所を、明日菜が横から支え、素早く絶対防御の真言を唱えていた。そして、稲妻が再び二人に落ちるが、今度は絶対防御の真言で稲妻は弾かれていた。

「ヒナ、大丈夫?」

「ごめん、明日菜。油断した訳じゃないけど……。あの女、他の人と違う。強いよ」

明日菜と雛子は、またいつ稲妻が襲ってきてもいいように代る代る絶対防御の真言を唱えていた。

「ふーん、面白い。あんたたち、なかなか強いじゃない。これは楽しくなりそう。あんたたちみたいな強い女のマンコ壊していくの堪らなく好きなんだ。強い女が泣きながらマンコを壊されていく。ああ、想像するとゾクゾクする」

深雪は、一人で興奮しているようだった。明日菜と雛子は作戦を考えていた。あの稲妻は連続では落とせないようで、次の稲妻が落ちるまでインターバルがある。そこで、稲妻を避けた瞬間、深雪に必殺の攻撃を仕掛け気絶させる。その後は、ゆっくりと真言を唱えて消滅させれば良い。明日菜と雛子は顔を見合わせ頷いた。そして、深雪が二人を指差し稲妻を呼んだ瞬間、二人は鉄パイプを地面に突き刺した。稲妻が鉄パイプに落ちた瞬間、二人は深雪に向かって飛び出す。

「バインド」

明日菜のリボンが深雪の体に巻き付き、その動きを封じる。そこへ雛子が深雪の頭上に大きく足を上げた。雛子のスカートが捲れ、白い下着が露になる。雛子の踵落としだった。この高速の踵落としが頭上に決まれば深雪と云えども無事で済む筈がなかった。雛子の踵が高速で落ちてくる。

ガスッ!!

「あびゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁっ」

しかし、地面に転がりのたうち回っているのは雛子だった。雛子は股間を押さえて転げ回っている。明日菜は信じられなかった。自分のリボンが引き千切られ、深雪は自由になった腕で雛子の股間に正

拳を突き入れたのだ。雛子は踵落としで大きく開き無防備になった股間に、強力な一撃をくらってしまったのだ。雛子を見て一瞬深雪から目を離した明日菜の間合いに深雪は入っていた。そして、明日菜の股間に思い切り蹴りを入れる。明日菜の性器に深雪の爪先が深く突き刺さっていた。

「あっ、あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

明日菜も股間を押さえてのたうち回る。明日菜の白い下着の股間には血が赤く滲んでいた。

「ちょっとう、もう終わりじゃないよね。せっかく楽しくなってきたんだから、もっと楽しませて貰わないとね」

深雪が明日菜と雛子を見下ろして笑っていると、真澄と倫子が気がついて立ち上がってきた。

「コイツら、ふざけやがって。目茶苦茶にしてやんよ」

「ほんと、許せないわ。マンコ徹底的に壊してやる」

真澄と倫子は二人して、まずは雛子を縛り上げていく。そして、次には明日菜を縛り上げてしまった。

「コイツら、マンコ壊して、股から裂いてやろうよ、深雪ちゃん」

「あはっ、股裂きかぁ。面白いね。それいこう」

早速、左右の滑車にロープを巻き付け、明日菜と雛子の足首に縛っていく。そして、滑車のハンドルをくるくる回すと、明日菜と雛子

の足が開いていき、そのうちに二人は開脚されて逆さに吊らされるような状態になっていた。

＊　＊　＊

木沢は良美に帰されたものの、やっぱりちふみの事が気になり家には帰らずに街中をウロウロしていた。そして、あてもなく歩いているうちに小さな公園の前にいた。木沢は、公園に入り空いていたベンチに腰かける。そして、ぼんやりと周りを見ていると公園の周囲の植え込みの中に黒い猫がいるのが見えた。何気なくその猫を見ていると、猫は急に立ち上がり歩き出した。見ると公園に入って来た薄い青の着物を着た女性に向かって歩いていた。そして、女性に頭を撫でて貰ってゴロゴロと喉を鳴らしている。どうやら、その着物の女性に懐いているようだった。木沢は、今度はその女性に目を向けた。

・・えっ、天宮……・・

学校での制服姿しか見た事がなかったので木沢は最初は気付かなかったが、その着物の女性は、間違いなく同じクラスの天宮野菊だった。

２１話、性器に根性焼きされる明日菜と雛子

２１話、性器に根性焼きされる明日菜と雛子

木沢はベンチから立ち上がると着物姿の野菊に声をかけていた。

「ありゃ、きじゃわくん。にゃにしてりゅの。まさか、わたちのストーカー？」

「ち、違うよ。帰りに保田の奴見かけたから後つけていったら潰れた工場の中に入っていったんだ。それで俺も中に入ってみようとしたら入れなかったんだ。そうしてるとお巡りさんが危ないから帰れって……」

「入れにゃい？」

「そうだよ。見えない壁みたいのがあって。お巡りさんも入れなかったんだ」

・・見えない壁、結界ですね。そんなものを張り巡らせているとは、普通ではありませんね。保田ちふみは、弥生たちを慕っている女です。助けない訳にはいかないですよ・・

野菊の目付きが急に変わり木沢はドキッとした。

「そにょ工場というにょは、何処れしゅか？」

「街外れの自動車部品工場だよ」

木沢が答えた途端、野菊は走り出していた。しかし、着物であるため全力で走れない。

・・弥生も月で走る時には着物を脱いで全裸で走ってましたね。しかし、ここは地球です。裸になると他の意味で騒動になりそうですね。弥生も何故こんな動きにくい物を着ているのでしょう・・

野菊は、自分が選んで着ているくせに弥生が悪いようにプンプン怒っていた。すると、野菊の隣に黒猫が並んで来て、野菊の顔を見つめにゃーと鳴く。

「助かるにゃ、クロ（注1）。それじゃ、頼むりょ」

野菊がクロに話しかけると、クロの尻尾が3本に分かれ身体が大きくなっていく。そのクロの身体に野菊が飛び乗ったと思った瞬間、野菊たちの姿は消えたように見えなくなっていた。後に残された木沢は、夢でも見ているのかと目を擦っていた。

＊　＊　＊

明日香と雛子は足首を左右に引かれ、両足が一直線になるまで拡げられていた。真澄と倫子は、それぞれ明日菜と雛子の性器を破壊するため準備を始めている。

「まったく、私たちに楯突こうなんてふざけた真似をしてくれたわ

ね。倫子、コイツらのマンコ徹底的に壊すよ」

「ふひひ、もう女じゃなくしてあげようね」

二人はスカートが捲れ、丸出しになっている明日菜と雛子の白い下着をハサミでジョキジョキと切っていき、下着を剥ぎ取り性器を丸出しにする。

「くくく、まだ綺麗なマンコだね。でも、すぐに目茶苦茶にしてあげるからね」

真澄と倫子はオイルライターを持ってジュポッと点火する。そして、そのライターを明日菜と雛子の恥丘に持っていくと、二人の陰毛を焼き始めた。

「あづっ、あづっ、あづいいぃいぃっ」

明日菜と雛子が悲鳴を上げるが、真澄と倫子は楽しそうに二人の陰毛をチリチリと焼いていき、あっという間に二人の陰毛は焼き尽くされてしまった。

「ほら、良かったね。ツルツルになったよ。じゃあまずは人間のリンチで使われる根性焼き（注2）をやってあげる。前にやった女には全身に４０ヵ所以上押し付けてやったよ。ミルク焼き、臍焼き、どて焼き、クリ焼き。楽しいねえ。人間はホント楽しい事考えるわ。まあ、あんたらはマンコ中心にやってやんよ。今までヤキなんか入れられた事なさそうだから、経験出来て嬉しいだろう。心配しないでも根性焼き入れた後にマンコはきちんと壊してやんよ」

深雪はツルツルにされた明日菜と雛子の恥丘を見て残酷に笑ってい

た。そして、煙草を取り出すと口に咥えてライターで火を点ける。

「ほら、真澄と倫子もやってやんなよ。煙草はたくさんあるからさ」

深雪は、真澄と倫子に煙草の箱をポンと渡し、二人も楽しそうに煙草に火を点けた。

「ふん、くだらないですね。そんな事で私たちの心が折れるとでも思っているのですか」

「何をしようと無駄です。私たちは悪には屈しません」

「縛られて印契も結べないのに随分強気ですね。自分たちが助かるとでも思っているのですか。残念、あんたたちは、ここでマンコ壊されて死ぬんですよ。ぷぷぷ。」

深雪は高らかに笑い、真澄と倫子に早く焼いてあげなと命令する。

「じゃあ、まずクリからいこうか」

真澄と倫子は二人のクリトリスの包皮を剥き、指でグリグリと刺激し勃起させる。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ」

明日菜と雛子の顔が上気し、息が荒くなり、クリトリスが硬く勃起した。

「ふひひ、いくよぅ。覚悟しな」

明日菜と雛子は自分のクリトリスに近付いてくる凄まじい熱気に、目を瞑り唇を噛みしめて、次にくる激痛に耐えようとした。煙草の火は７００度はある。それが、押し付けられるのだ。その苦痛は想像を超えた激痛だろう。しかし、明日菜と雛子は、そんなリンチに屈するわけにはいかない。二人は、クリトリスに押し付けられる煙草の火に備えていた。そして、それは突然くる。

ジューーーッ

「あびゃあああぁぁぁぁぁぁーっ！！」

プッシャーーーッ

勃起したクリトリスに煙草の火を押し付けられ、明日菜と雛子は尿を漏らし絶叫していた。

「まさか、１回で許されるなんて思っていないよね」

真澄と倫子は念入りに何度も煙草の火を二人のクリトリスに押し付けていく。明日菜と雛子は口から泡を吹き出していた。

「あははっ、面白ーい。強がってたわりには、おしっこ漏らして、泡吹いてるよ。ぷぷぷ。」

深雪は、明日菜と雛子の姿を見て爆笑していた。

（注1）「ブラックイット」から登場する黒猫。その正体は猫又の上位の魍魎〝猫魈〟である。

（注2）御存知の方も多いと思うが昭和の時代、実際に行われていた私刑。煙草の火を体に直接押し付ける。その場所によって、乳首に押し付けるミルク焼き。クリトリスに押し付けるクリ焼きなど。その焼かれた痕は一生消えず残る事となるので、授乳の際見られてしまうミルク焼きは精神的に一番きついようだった。

22話、繰り返される拷問

22話、繰り返される拷問

「あびゃあああぁぁぁぁぁぁーっ！！！」

明日菜たちのクリトリスに容赦なく煙草の火が何度も押し付けられる。その度に明日菜と雛子は絶叫し、チョロチョロと尿を漏らしていた。

「汚ねえな、コイツら。毎回漏らしやがって。おしっこの穴を焼いて塞いでやろうか」

真澄たちは、ティッシュで明日菜と雛子の性器をきれいに拭くと、割れ目をくぱぁと開けた。そして、クリトリスの下の小さな穴に向かって煙草の火を押し付ける。

ジューーーッ

「ひぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁーーっ！！！！」

明日菜と雛子は獣のように絶叫するが、真澄と倫子は楽しそうに二人の尿道を煙草の火で焼き潰していく。

ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ

「あばっ、あばっ、あばあああぁぁぁぁぁーっ！！」

容赦なく明日菜と雛子の尿道を焼き潰してしまった真澄と倫子は次に二人の膣穴を狙う。

「あははっ、次は壺焼きだよ。あんたたち耐えられるかな。うひひっ」

「うっ、ううっ……」

さすがに明日菜と雛子は泣き崩れていた。これから、女の大切な穴を焼かれる。こんな奴らに負けてはいけないと思いつつも涙が溢れて止まらなかった。

「うひっ、覚悟しなっ」

ジューーーッ！！！

「あびゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーっ！！！！！！」

膣の中に煙草の火を入れられ明日菜と雛子は絶叫し、哀れにも口から泡を吹いて失神していた。

「おいおい、誰が寝ていいと言ったんだよ。起きろ、くそ女っ」

真澄と倫子は、明日菜と雛子を殴り付け目を醒まさせる。

「ううううっ」

目を覚まし呻き声を上げる明日菜と雛子の膣にまた二人は煙草の火

を押し付けた。

ジューーーッ！！

「あびゃあああぁぁぁぁぁぁーーーーーっ！！」

明日菜と雛子の二人は開脚で吊るされたまま、のたうち回る。そして、あろうことか大便まで漏らし始めていた。明日菜と雛子の肛門から大便がもりもりとひねり出され、ぼとぼとと地面に落ちていく。

「うわっ、汚ねえコイツら、ウンコまで漏らしやがった。コイツら、これで女なのか。恥じらいってモノがないね」

「しかも、臭いよコイツらのウンコ。ふざけてるのか、許せないね。ウンコ、出せないように、こっちも塞いでおかないと」

真澄と倫子は、何か良いものはないかと工場の中を探し回っていた。それを含めて深雪はしっかりとスマートフォンを構え撮影している。そうしているうちに真澄たちは汚れた杭を見つけてきた。先が円錐形になっている太さ４センチ程の土やペンキがこびりついた汚れた杭である。その杭を明日菜と雛子の肛門に突き刺して塞いでしまうつもりのようであった。

「あはっ、良いねえ、それ」

深雪が楽しそうに撮影する中、真澄と倫子は明日菜と雛子の肛門に杭を突き刺していく。

ズリュッ

「うびぃぃぃぃっ、痛ぃぃぃぃぃっ！！」

太い杭を無理矢理肛門に挿れられ、肛門は大きく拡がり限界を超えて裂けていた。当然である。通常はローション等を塗るものであるし、こんな杭など挿れる穴ではないのである。しかし、真澄と倫子の二人は容赦なく明日菜と雛子の肛門に杭を打ち込んでいく。そして、３０センチあった杭を全て二人の肛門に打ち込んでしまった。

「これで安心して壺焼き出来るね」

真澄と倫子は、また煙草に火を点けて明日菜と雛子の膣に煙草の火を押し付けた。

ジューーーッ

「あびゃあああああぁぁぁぁぁぁーーーっ！！！」

「あははっ、良い声で泣くねぇ。女らしくなってきたじゃない。もっと、この穴焼いてあげるからね」

ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ、ジュッ

「あばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばあああああっ！！！」

真澄と倫子は、二人の膣を徹底的に焼き潰すつもりのようであった。明日菜と雛子は、哀れにもまた白目を剥いて口から泡を吹き失神していた。

「あぁ、面白かった。そろそろマンコ壊して止めを刺してあげようかな。深雪ちゃん、良いかな？」

「いいよ。ちゃんと壊してあげてね。中途半端はダメだからね。きちんと跡形もなく壊してあげようね」

「はーい、了解でーす」

声を揃えて返事をした真澄と倫子は工場で見つけた電動のグラインダーを用意していた。グラインダーは先端に取り付けたヤスリ状のアタッチメントを回転させて金属等を削る道具であるが、真澄と倫子が削ろうとしているのは金属ではなく、明日菜と雛子の膣であった。グラインダーの先端を膣に突き入れ、膣壁を全て削り尽くす考えだった。

「これで、コイツらのマンコの穴は使い物にならなくなるね。楽しみ」

真澄と倫子は、それぞれグラインダーを持ちながら、これから壊す明日菜と雛子の膣穴を見て楽しそうに笑っていた。

＊　＊　＊

良美は、署にも応援の部隊を要請していたが、結界が張られているとなると、頼りになるのは明日菜たち魍魎討伐機関の人間以外いなかった。その明日菜たちが乗り込んでから時間が経っている。応援に駆けつけた坂本が指揮する妖怪討伐に力を入れている特殊部隊も

中に入れず手をこまねいていた。

・・坂本さんがいてくれれば、何か思い付いてくれたかも知れないのに・・

坂本は先の戦闘で負傷しこの場には来ていなかった。そこへ、ザッと巨大な黒い影が突然現れた。

「ク、クロちゃん?」

そこに現れたのは魍魎化したクロだった。良美はクロと一緒に住んでいるので当然クロの正体も知っている。そして、坂本が率いる警察の部隊もクロの正体を知っていた。良美はそこでクロの背に乗っていた少女の存在に気付く。着物を着たその少女はクロの背から降りると工場に張り巡らされた結界を見つめていた。

23話、膣削りと子宮酸責め

23話、膣削りと子宮酸責め

・・さ、西園寺さん……・・

クロから降りた着物姿の少女を見て良美はドキッとしていた。それは良美の知る先代の青姫であった西園寺弥生かと思ったからだ。

・・そんな筈はない。西園寺さんは月でシヴァを倒した後、私の目の前で消滅してしまった。私はけっきょく彼女の力になれなかった・・

弥生を思い出すと激しい後悔の念が噴き上げてくるが、同時に自分も弥生に負けずに頑張るのだという強い感情も沸き上がってくる。

・・よく見ると違う。当然だけど西園寺さんではない。着物を着て日本人形のような黒髪のおかっぱ頭だけど顔が違う。西園寺さんより鋭く冷たい目をしているし、真面目で大人しそうな顔だった西園寺さんに比べ、凛とした鋭い顔をしている・・

「クロ、お前はここりぇ良美を守ってやりなちゃい」

少女の声が聞こえて良美は驚いていた。

・・私を知ってる?でも、私は……・・

良美は着物を着た少女に見覚えはなかった。少女はクロを残して難なく結界の中に入っていく。

・・結界の中に簡単に入っていく。魍魎討伐機関の関係者なの？・・・

良美は、少女に見覚えはなかったが、あの瞳はどこかで見た事があると思っていた。良美は、記憶を探り出会った人たちを思い浮かべていくが、その中にあの少女と一致する顔はなかった。

＊　＊　＊

キュイーン！！

グラインダーが高速で回転する音が工場内に響き渡る。

「あははっ、コイツらのマンコの穴の最後だよ」

真澄と倫子は股裂きのように開脚されている明日菜と雛子の膣口目掛けてグラインダーを突き下ろした。

グギャギャーーーーッ

「はぶうううぅぅぅぅぅぅぅーっ！！！」

失神していた明日菜と雛子が、大きくのけ反りながら絶叫する。グラインダーを挿れられた膣からは、血と肉片が激しく噴き出している。

ギャーーーーン！

「はぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶっ！！！」

真澄と倫子は楽しそうにグラインダーで明日菜と雛子の膣壁を削っている。その手際は職人のように鮮やかであった。

「どうですか、マンコの穴、削られる気分は。痛いよねぇ。もうすぐ綺麗に失くなるからね。もう、ただの穴だよ。誰も挿れてくれないね、可哀想に。ぷぷぷっ」

深雪は二人の無惨な姿を撮影しながら、可笑しくてたまらないと、つい笑いがこぼれてしまっていた。グラインダーで膣を削っている真澄と倫子は、膣から飛び散る血と肉片を浴び悪魔のような姿になっている。それでも笑いながら膣を削る二人は性器破壊を楽しむ狂人の様に見えていた。

「膣処刑完了。コイツらの膣は完全に消滅しました」

真澄と倫子が、楽しそうに深雪に報告する。明日菜と雛子の股間には、もう閉じる事のない直径5センチ程の穴がぽっかりと空いていた。そして、その穴の奥にはピンク色のコロッとした子宮頸部が見えている。明日菜と雛子は膣を削られ、哀れにまた失神していた。

「ご苦労様。次はコイツらの子宮を壊してあげようか。この注射器で子宮の中に塩酸を注入してあげようよ。原液入れるとすぐ死んじゃうから、薄めて入れてあげてね。長く苦しんでくれた方が楽しいからさ」

「はい、了解、深雪ちゃん。楽しそうな事考えるね」

早速、二人は注射器に薄めた塩酸を入れ、明日菜と雛子の股間に空いた穴に注射器を入れ、子宮頸部に狙いをつけ針を刺す。

プツゥッ

そして、注射器のプランジャを押し、塩酸を子宮の中に注入してしまう。

ヂューーーッ

「あぶうううううぅぅぅぅーーーっ！！！」

明日菜と雛子は吊られたまま狂った様にバタバタと絶叫しながらのたうち回っている。その姿はもう魍魎討伐者としての人々を守る戦士には見えず、ただ拷問され泣き叫ぶ哀れな女としか見えなかった。

「はい、じゃあ2本目射ちますよ。楽しいから、少しずつ濃くしていくからね」

プツッ、ヂューーーッ

「あぶうううううぅぅぅぅーーーっ！！！」

「じゃあ、次3本目ね。どんどん射ってあげるからね」

真澄と倫子は、もう楽しくて止まらないという様に次々に明日菜と雛子の子宮に注射を射ちまくる。明日菜と雛子の子宮内膜はもうドロドロに溶かされ、卵子が着床する大切な機能を持つ子宮も破壊さ

れていった。

「よし、最後に卵巣ね。膣の奥、子宮頸部の横から針を刺して卵巣にも塩酸を注入してやろうよ。もう、コイツら殺すから原液注入でいいよ。どっちにしろ、この後、股裂いて殺すからさ」

殺すという言葉で真澄と倫子の目がギラギラと輝いている。そして、それは深雪も同じだった。明日菜と雛子を殺すことで興奮しているのである。その様子を機器の陰から覗いている者がいた。結界を抜けて入ってきた天宮野菊であった。

・・少し遅かったですね。ちふみは殺され、明日菜と雛子はマンコ壊されてしまいましたか。ここで、助けるのは逆に可哀想ですね。殺されるまで待つとしますか・・

野菊は、しばらく姿を隠したまま待機する事にした。

・・それにしても明日菜、弥生の後継者なのですから、もう少ししっかりして貰いたいですね。この程度の敵に殺られては、弥生もがっかりしてしまいますよ・・

野菊は、姿を隠しながら小さく溜め息をついていた。

２４話、性器破壊と股裂き

２４話、性器破壊と股裂き

・・ふうむ、どうやらマンコに注射器で何か注入しているようですね。この匂いは塩酸のようですが。なるほど、塩酸を注入してマンコを中から溶かしているのですね。面白い事をしますね。まあ、明日菜と雛子には、良い薬になるでしょう。油断するから、こういう事になるのです。マンコを壊されるのも良い経験です。どんどん経験を積んでいきなさい・・

野菊は、物陰から冷静に明日菜と雛子の性器が壊されていくのを観察していた。弥生は、こんなものではない、もっと凄まじい拷問で性器を破壊されていた（注１）。それに比べれば、この程度の拷問は、何でもないだろう。野菊は、さっさと明日菜と雛子を殺してくれないかと思っていた。それは、明日菜と雛子が憎いからではなく。もう、ここまで性器を壊された以上、ここで助けても性器はもう使い物にならなくされている。それなら、殺されてしまった方が復活出来るのだ。野菊が持っているアイテム〝命の雫〟（注２）は死後、間もない死体を完全に復活させる事が出来る。それを使用すれば壊された性器も元に戻る。なので、一度死んだ方が良いのだった。殺される明日菜と雛子にとっては、たまったものではないが、ここまでやられれば確かに殺されて復活した方が、良いといえた。

真澄と倫子は、長い針を付けた注射器を明日菜と雛子の股間の穴に入れ、子宮頸部の横に注射針を突き刺す。そして、ズズッと奥まで

針を刺していった。膣から卵巣に針を刺す。それは、採卵する際の方法だったが、今回は卵巣を破壊する為に針が刺されたのだった。

「ほら、卵巣にも針を刺したよ。これで、塩酸を注入すれば、コイツらの卵巣は終わりだね。マンコ、完全に壊れて、コイツら女じゃなくなるね。楽し過ぎるわ」

真澄と倫子は、躊躇せず注射器のプランジャを押し、明日菜と雛子の卵巣に塩酸を注入してしまう。

「あびゃあああああぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

まるで、断末魔のような悲鳴が明日菜と雛子から漏れる。これで、明日菜と雛子の性器の機能は完全に破壊されてしまった。膣も失くなり、子宮と卵巣も破壊された明日菜と雛子は哀れに開脚され吊られたままブラブラと揺れていた。

「あははっ、マンコ壊すのは面白いねぇ。コイツら、格好よく登場したわりには惨めだね。私たちにマンコ壊して貰うために出て来たのかなぁ。あははっ、コイツら相当の変態だね。じゃあ、その変態の股を裂いて、止めを刺してやろうよ」

深雪が、真澄と倫子に号令すると、二人は明日菜と雛子の足首を縛りつけているロープが巻かれた滑車に付いているハンドルを回し始める。この滑車は、ハンドルを少し回すとカチッとロックがかかり、元には戻らない仕様になっている。それを、真澄と倫子は容赦なく回していった。

カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ

「ううっ、痛いぃっ！」

左右に大きく開いた明日菜と雛子の足が、さらに引かれて横一直線になっている。それでも、そこから更に滑車は回されていく。

カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ

「うぐうぅぅぅっ！！」

明日菜と雛子の骨がギシギシと軋み、ブチブチと筋が切れるような音がする。明日菜と雛子は、全身汗まみれになり、股から裂かれる激痛に涙と鼻水を大量に流し、大きく反り返り苦痛に呻いていた。

カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ

「あぶうぅぅぅぅぅぅぅーーーーっ！！！」

ブチッ、ブチ、ブチィッ！

「あっびゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーっ！！！」

そして、ついに明日菜と雛子の股間の割れ目、会陰部分から、ぶちぶちと性器が裂け始める。その耐える事も出来ない激しい苦痛は、明日菜と雛子の心も破壊した。

「あびゃあぁぁぁーっ！痛いぃぃぃっ！助けてっ、もう許して下さいぃぃっ！！」

ついに明日菜と雛子は、敵である深雪たちに救いを求めていた。

「あははっ、惨めだねぇ。今さら助けを求めても許されるわけないじゃない。何、勝手な事を言っているのかねぇ。あんたらは、もう無様に股から裂かれて死ぬんだよ。あははっ、私に逆らおうとするからだね。いい気味だよ」

「ホント、深雪ちゃんに逆らうなんて馬鹿だね。馬鹿はマンコから裂かれて死になさい」

「ホント、笑える。マンコ、壊されて、マンコから裂かれるなんて惨めだねぇ。ふふふ、もうすぐ楽になるから、せいぜい泣き叫んで苦しみなよ。あはは」

深雪に続いて真澄と倫子も、明日菜と雛子を小馬鹿にして爆笑していた。そして、また滑車のハンドルを回し始める。

カチッ、カチッ、カチッ、カチッ

わざと少しずつ回して明日菜と雛子の苦痛を長引かせるようだった。

ブチ、ブチ、ブチ

「だずげでえぇぇぇっ！！」

明日菜と雛子の悲痛な声が工場内に響くが、滑車のハンドルは残酷に少しずつ回されていく。明日菜と雛子の性器はビリビリと裂け始め、血が大量に噴き出していた。

（注１）弥生の性器破壊については「性器を完全に破壊され、泣きながら処刑される西園寺弥生」３６話から最終４２話を参照して下さい。ただし、酷い内容ですので気を付けて下さい。

（注２）「移ろう季節に想いを馳せる君」で崇徳上皇が作ったとされるアイテム。１部２２話「薫風」で登場するアイテムです。

25話、深雪の正体

25話、深雪の正体

ブチ、ブチ、ブチ

少しずつ明日菜と雛子の性器が裂けていく。会陰から裂け始めた裂け目は、もう膣前庭まで裂け始めていた。

「いだあぁぁぁぁぁぁーっ！いだいいいいいいいーっ！！」

明日菜と雛子は大きくのけ反り狂ったように泣き叫んでいる。しかし、深雪たちに一切の憐憫の情はない。ハンドルを回す手を緩めたりしない。当然だが確実に明日菜と雛子の股を裂くつもりである。明日菜と雛子は、尿道と肛門を塞がれていなければ盛大に糞尿を噴出していたのは間違いないだろう。股間からは糞尿の代わりに血が激しく噴き出し始めていた。

「そろそろ、裂けそうだね。股裂きは面白いねぇ。これなら、あの首吊った女も、股裂きにすれば良かったよ、残念」

「ねえねえ、深雪ちゃん。明日もやろうよ。面白くて、たまらないよ」

真澄がハンドルをカチッカチッと回しながら楽しそうに言う。

「ホント、これ最高。見て、深雪ちゃん、コイツらのマンコ。割れ目が本当に裂けてきて、笑う。早く全部裂けないかなぁ」

倫子も爆笑しながらハンドルを回していた。しかし、明日菜と雛子は、それどころではない。股関節も砕け、筋や腱もぶちぶちと切れていく。そして、ついに二人の性器に限界がきた。

ピッ！

ブチ、ブチ、ブチ、ブチ、ブチイィィィッ！！

「あぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁーーっ！！！」

明日菜と雛子の性器の割れ目から股間が裂けていく。一度大きく裂け始めると、もう止まらない。会陰が膣前庭や膣や尿道や肛門、全てが裂けていく。明日菜と雛子の股間から噴水のように激しく血が噴き出した。

「あぶうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅーーーっ！！！」

まさに断末魔の絶叫が響き渡る中、バリバリと明日菜と雛子の股間が裂けていく。もう恥丘まで裂け、子宮まで裂け始めているようだった。それまで大きくのけ反っていた明日菜と雛子は、もう力なくだらんと吊られている。時々、体がビクンと大きく痙攣していた。そして、その痙攣もだんだんなくなり、明日菜と雛子は動かなくなっていった。

「あっ、死んじゃったみたいだね。どうしようか、そこの焼却炉に入れて燃やしちゃおうか」

深雪が言った時、機器の陰から一人の着物を着た少女が現れた。天宮野菊だった。明日菜と雛子が無惨に殺害されたので、出てきたのだ。

「あれぇ、またお客様だよ。しかも、今時着物とは珍しいね。それにしても次から次へと、今日は多いねぇ。それで、何のよう?」

深雪は野菊を馬鹿にしたように言う。

「ちょこに、たおりぇてる女をかいちゅうちに来たのりゃ」

「ぶはははっ……」

深雪と真澄、倫子は爆笑していた。

「なにが、おかしいにょりゃ」

「あんた、それマジで言ってんの。ウケる。ああダメ、お腹、痛いよぅ」

三人は、野菊の喋り方を聞いて腹を抱えて爆笑していた。

「あははははっ、この女、変だわ。頭、足りないんじゃない。大丈夫でちゅかあ」

倫子が野菊を指差して、さらに馬鹿にする。野菊は、倫子に向かって右手を上げると、開いていた手のひらをグッと握り締めた。

パンッ!!!

倫子の頭部がトマトのように砕け散り、首から上が失くなった倫子の体は、ぐらりと崩れ落ちていた。

「なっ……」

深雪と真澄の顔色が変わっていた。

「貴様ぁぁぁぁっ！！」

真澄が鉄パイプを持って野菊に殴りかかってくる。しかし、野菊は慌てた様子もなく今度は左腕を上げ、拳を握り潰す。

パンッ！！

今度は真澄の頭部が砕け散っていた。真澄は首から血を噴き出し、鉄パイプを持ったまま、よろよろと歩くと膝を落とし、地面に座り込むように倒れていった。

「あ、あんた、な、何者だなのっ！」

深雪が、それまでの余裕が失くなり、ジリジリと後退りしながら野菊を睨みつけていた。

「慌てにゃくりぇも、あんたには、訊きちゃい事がありゅかりゃ、ちゅぐには殺ちゃないりょ。ちょれに、わたちかりゃは、逃げられないりょ」

野菊は、ゆっくりと笑いながら深雪に迫っていった。深雪は、退く振りをしながら、ちょうど野菊の背後にいた雄一たちに目で合図を送る。雄一たちも、深雪の合図に頷き、手に手に武器を持つと、野

菊の背後に迫っていった。そして、野菊の頭目掛けて思い切り鉄パイプが唸りを上げて振り下ろされる。

ゴガーンッ！！

鉄パイプは野菊の頭頂部にまともに当たっていた。

「うがっ……」

しかし、その衝撃をモロに受けたのは雄一だった。衝撃で手が痺れ鉄パイプを落としてしまう。そして、驚愕の顔をする雄一の顔面が野菊の右手に掴まれる。

グシャッッッ！！

雄一の頭は顔面毎、野菊に握り潰されていた。雄一もふらふらと歩くと、そのまま崩れ落ち、地面に倒れ動かなくなっていた。そして、振り向いた野菊は、残った武夫たちに向かって、カッと目を見開いて睨みつける。

「あ、あ、あ、あ……」

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ！！

残りの男子も全員の体が弾け飛び、肉片となって飛び散っていた。そして、野菊は一人残った深雪に迫っていく。

「ま、待って下さい。訊きたい事があるって言ってましたね。なんでもお話しします。ですので、逃がしてくれませんか」

「はぁっ、お前が交渉できりゅ立場ですきゃ」

「わ、分かった、待て。私はあるお方の命令で人間を闇に引き込む為にやってきた。コイツらは闇に呑まれた人間だ」

深雪は倒れている真澄たちを指差していた。

「勿論、私もこの吉田深雪という人間に取り憑いている。元は人間だったが、この女は暴力や恐喝などやりたい放題だった。そんな人間は闇に呑まれていくのさ。こいつもイジメがエスカレートしていくうちに、その心はどんどん闇に喰われていき、ついに本物の化け物になったのさ。つまり、私に全てを乗っ取られたという事だ。もう、こいつは人間ではない。そこに倒れている奴らも……」

深雪は、野菊に説明しながら逃げ出すチャンスを窺っていた。野菊は、ふーんと考えるように腕を組んで首を傾げていた。その自分から野菊の視線が外れた瞬間、深雪は身を翻していた。

パンッ!!!

深雪の頭は肉片となって飛び散り、体はゆっくりと倒れていった。

「わたちかりゃは、逃げられないと言ったれちょ」

野菊は、吊られている明日菜たちの所へ行き、二人を地面に降ろしていた。

・・まったく、手間をかけさせますね。でも、弥生の後輩ですから仕方ありませんか・・

野菊は、文句を言いながらも二人の体に〝命の雫〟を振りかけた。明日菜と雛子の体が、白い光に包まれていく。これで、しばらくすれば二人は復活するのである。野菊は、クラスメイトでもあるちふみも地面に降ろし、アイテムを振りかけた。ちふみの体も白い光に包まれていった。野菊は、工場の外にいるクロに思念を送り、良美たちが中に入って来ないように頼み、これで一件落着と、鼻の穴を脹らませていた。

26話、怨霊

26話、怨霊

野菊は、辺りを見渡すとベルトコンベアの上で動いている物がある。

・・あの物体はなんだ?・・

野菊が近付いて行くと、それは四肢を切断され性器も破壊された梓だった。

・・確か隣のクラスの生徒か。ちふみ同様奴らにヤられたのか。哀れだな、こんな姿で生き残っても、これからの人生、辛いものでしかない・・

「こ、殺して下さい……」

梓は野菊を見上げ潤んだ瞳で懇願する。野菊は、梓の目を見つけ返すと、転がっていた鉄パイプを地面に突き刺す。そして、梓の体を軽々と持ち上げると、梓の股間の穴に鉄パイプを当てた。

「いくりょ。顔を上に向けて、口を開けてるのりゃ」

梓は小さく頷くと、野菊に言われた通り上を向き口を開けた。当然、梓も自分がこれから何をされるか分かっている。自分は、股間から口まで鉄パイプで串刺しにされ殺されるのだ。そう思いながら梓は、

やっと楽になれると思う反面、恐怖でぶるぶる震えていた。

「あちょこに倒れりぇていりゅ二人と、保田ちゃんに伝えてくりゃちゃい。敵は怨霊でちゅ。ちょれと、わたちの事はないちょれね」

野菊は梓に伝えると、そのまま梓の体を引き摺り降ろしていく。梓の股間から鉄パイプが梓の中に突き刺さっていった。

「あ、ぐうううぅぅぅぅーーっ！！」

梓が絶叫するが、野菊は構わず梓の体を鉄パイプで串刺しにしていく。

ゴキュッ、ゴキュッ、ゴキュッ、ゴキュッ

鉄パイプは梓の体を残酷に貫いていった。そして、股間から臓器を破壊し、梓の体を貫いていった鉄パイプは、ついに梓の胃に穴を空ける。

「ごっばあぁぁぁっ！！」

梓は、口から血を吐き出した。そして、梓の口から胃を貫いて食道を突き抜けてきた鉄パイプが顔を出す。梓は股間から口まで完全に串刺しにされていた。しかし、梓はまだ絶命していないようで、体はビクビクと痙攣し、肛門からぼとぼとと大便を漏らしていた。梓の下には、大便の山がこんもりと盛り上がっていた。

・・まだ、死にませんか。これは苦しいでしょうね。仕方ありません。楽にしてあげますか・・

野菊は、梓を串刺しにしている鉄パイプを掴み、気を込める。すると、鉄パイプが真っ赤に発熱していった。

ジューーーーッ！！

「！！！！！！！！！！！！！！」

梓は、体の中から焼かれていく。しばらくは痙攣し、大便を漏らしていた梓だったが、そのうち動かなくなり、まるでオブジェの様に串刺しにされた体を晒していた。

「よく頑張りまちた」

野菊は、梓が完全に絶命したのを確認すると、梓の体から鉄パイプを引き抜き地面に横たえる。そして、アイテム〝命の雫〟を振りかけた。梓の体も白い光に包まれていく。

・・さあ、それでは戻るとしますか。弥生、あなたの代わりに仕事をしておきましたよ。早く、戻って来て下さいよ。一緒にスイーツ食べに行きたいですから・・

野菊は、弥生の姿を頭に描き、しんみりした気持ちになっていた。その時、背後に邪悪な気配を感じる。

「お前は驚異だ。このまま帰すわけにはいかない」

そこには首から上が吹き飛んだ深雪の姿があった。そして、立ち上がった深雪は小さな珠を持っていた。その珠が宙に浮き、黒い塊になっていく。野菊の体は、その黒い塊に引き寄せられていく。

・・しまった。あれはアイテム〝奈落の華（注）〟。崇徳上皇が造り出して九尾が所持していたが盗まれたと言っていたアイテムだ。それを、こいつが持っているとは……。迂闊……・・

野菊の体は黒い塊に吸い込まれてしまった。そして、深雪は、よろよろと歩きながら、その体が消滅していく。

・・さすがにもうエネルギーがないか。だが、厄介な奴を封じ込めた。くくく、これでよしとするか・・

深雪の体は黒い塵になり消えていった。

＊　＊　＊

「いやあ、殺られたね、明日菜」

「まったく、股から裂かれて殺されるなんて、八千穂さんや柚希さんに怒られるよ」

「あっ、それは大丈夫だと思うよ、明日菜。八千穂さんも、柚希さんも私たちと同じ、マンコから真っ二つにされて殺された経験があるから」

「そうか、弥生先輩もマンコから裂かれて殺されたものね。マンコから裂かれるのは私たちの様な仕事をしていると当たり前なんだね。でも、弥生先輩は、マンコから裂かれた時、実は気持ち良かったって言ってたけど、全然気持ちよくないよね。もの凄く痛いだけ」

「それは私たちの修行がまだ足りないんだよ、明日菜。弥生先輩は、マンコも鞭で打ったり木刀を叩き込んだりして鍛えていたって聞いたよ。今度、弥生先輩の部屋に残ってた三角木馬使わせて貰って、私たちもマンコ鍛えようよ」

その時、意識を取り戻しドキドキしながら二人の会話を聞いていたちふみが声を上げる。

「あの……。私もその特訓に入れて下さい。私も皆さんみたいに強くなって弱い人を守りたいんです」

「うん、分かったよ。みんなで強くなろう」

明日菜と雛子、ちふみは手を取り合って誓っていた。そこへ、同じく意識を取り戻した梓がやって来る。梓は、野菊から言付かった伝言を伝えようとしていた。

（注）アイテム〝奈落の華〟。ブラックホールを造り出すアイテムである。〝事象の地平線〟を越えてしまえば光でさえ抜け出せなくなる。「移ろう季節に想いを馳せる君」二部、17話から登場するアイテムである。しかし、九尾からそのアイテムを盗んだ十鬼神の一人塵輪鬼が弥生たちに倒されてから、その行方は分からなくなっていた。

27話、真の敵

27話、真の敵

梓は、ありがとうございましたと自分を助けに来てくれたと思う3人に頭を下げていた。自分のせいでこの人たちは酷い目にあったんだ。そう思うと梓は頭が上がらなかったが、明日菜と雛子は気にする事はないという。そして、ちふみも同じ学校の同級生じゃないと笑って答えていた。

「それにしても、誰が助けてくれたんだろう」

工場内には真澄や倫子、それに雄一たちの遺体が転がっている。明日菜と雛子は、首謀者と思われる深雪の遺体が見当たらないのが気になっていた。梓は、誰が助けてくれたのか知っている。ちふみと同じクラスの天宮野菊だ。でも、内緒にしてくれと口止めされているので話す事は出来ない。自分の命を救ってくれた恩人の頼みなのだ。梓は、絶対に口外しないと心に決めていた。そこへ、クロを抱いた良美が工場内に入って来た。

「皆さん、ご無事ですか」

良美は周囲の惨状を見て眉をしかめる。

「クロ、そうか、クロが助けてくれたんだね」

明日菜と雛子がクロの頭を撫でて嬉しそうに言うが、クロは違うよというように、フニャッと鳴いていた。

「西園寺さんと似たような人がクロちゃんと一緒に来たのですが、いませんね。何処にいったのでしょう？」

良美が工場内を見回しながら首を傾げるが、明日菜と雛子も驚いていた。

「弥生先輩と似た人……」

「誰だろう？でも、その人もアイテムを持っていると云うことだよね」

「しっ、ヒナ。ダメッ」

明日菜に叱られ雛子は、危ないと口を押さえていた。アイテム〝命の雫〟の存在は秘密にされている。それが公になってしまえば人間同士で奪い合いに発展するのは間違いないからだ。死者を蘇らせる。そんなアイテムがあれば、誰でも欲しがるだろう。このアイテムを作成した崇徳上皇は、人間たちを争わせる為に作成したのだろうと思われた。このアイテムの存在を知っているのは、魍魎討伐機関の関係者と一部の人間だけだった。そのアイテムを所持しているとは、この中の誰かであると思われるのだが明日菜も雛子も該当者がいるとは思えなかった。

「浅野さん、ここに倒れている人たちはもう人間ではありません。邪悪な心を妖怪に狙われ、その心を喰われていき身も心も妖怪になってしまったようです」

「私たちが真言で成仏させます」

明日菜と雛子は印契を結んで真言を唱え始めた。

「ノウマク・サンマンダ・ボダナン・バク」

二人が真言を唱えると、真澄たちの体は白い光に包まれ、ゆっくりと消えていった。

「私たちを助けてくれた人は誰か分からないけど、取り敢えずこれで一件落着かな」

明日菜が伸びをしながら言うと、梓が、あのと小さな声で明日菜と雛子を見つめていた。その何か言いたげな仕草に明日菜はそれとなく雛子に合図を送り、良美たちとちふみを遠ざけさせ、梓と二人きりになる。

「何か話したい事があるなら聞くよ」

明日菜は梓が話しやすいように明るく声をかける。

「二つ、あるんです。一つは保田さんですが、彼女、私も助けに来て酷い拷問を受けて、つい奴隷契約書にサインしてしまったんです。彼女、マンコ壊されちゃって、誰でもあんな事されたらサインしちゃいますよ。おそらく、その契約は無効になっていないと思います。深雪ちゃんは逃げてしまいましたから」

「奴隷契約書ですか。厄介ですね。分かりました、それは私たちの方で対応します。それで、もう一つは？」

「はい、それは今度の敵は〝怨霊〟だと云うことです」

「怨霊……。それは誰が言ったのですか……」

「私たちを助けてくれた人です」

「見たのですか？どんな人でした？」

「それは、言えません。約束ですから。とにかく敵は怨霊と伝えてくれと」

明日菜は考え込んでいた。内緒にしてくれと云うにはなにか理由があるのだろう。ならば、そちらは仕方ない。問題は敵は怨霊という言葉。三大怨霊と呼ばれる〝崇徳上皇〟は神宮寺卯月が倒し、〝菅原道真〟は西園寺弥生が阻止した。残りの１人。

・・これは、大変な事になりそうだよ。早く八千穂さんや柚希さんに報告しないと・・

明日菜は雛子の手を引くと、私たちはこれでと良美に挨拶し、自転車に飛び乗ると本部に向かって疾走していた。

＊　＊　＊

明日菜と雛子から報告を受けた現魍魎討伐機関最高責任者の護国八千穂は、うーむと腕を組んで考えていた。如月は、卯月と弥生が亡くなったショックを癒す事が出来ず八千穂に席を譲り引退していた。八千穂は、この席に座り、その重責を改めて感じていた。

・・弥生さんがいてくれれば、この席に一番相応しいのに・・

八千穂は常にそう思いながら精一杯頑張っていた。

・・最後に残った怨霊〝平将門〟。先輩や弥生さんが崇徳上皇や菅原道真から、この世界を守ってくれた。私も平将門からこの世界を守らないと・・

八千穂は相当なプレッシャーを感じながら、ちふみの通っている学校にも誰か手配しないとと考えていた。奴隷契約を結んでしまった以上、その元の敵を倒さなければ契約は解除されない。その為、ちふみが操られて第二の吉田深雪にならないように目を光らせておく必要があったのだ。

八千穂が悩んでいる時、明日菜と雛子は急いでシャワーを浴び、バイト先であるスーパー太陽に向かって自転車を走らせていた。その、スーパー太陽の駐車場では落花星人の着ぐるみを着た大嶽丸（注）がいつものパフォーマンスで来店したお客様を楽しませていた。

（注）「ブラックイット5」から登場する十鬼神の一人。最強の鬼であると同時にクロの友人。神宮寺卯月を尊敬し、西園寺弥生の保護者であると自認していた。

28話、特訓・性器鞭打ち

28話、特訓・性器鞭打ち

・・おい、聞こえるか。大嶽丸・・

落花星人が駐車場で空中3回転捻りを披露していると頭の中に声が聞こえる。

・・なんだ、お前、何処にいる。俺は仕事中なんだよ。邪魔するな・・

・・いいから聞けっ。ブラックホールに呑まれて肉体は潰されて消滅した。精神体がここから抜け出すのに手をかせ・・

・・ブラックホール?誰が、そんな物を・・

・・私の物理攻撃では倒せなかった。おそらく敵は怨霊だろう。塵輪鬼が九尾から奪ったアイテムを持っていた・・

・・残っている怨霊というと、アイツか。ソイツが〝奈落の華〟を……。厄介だな・・

・・だから、早く〝奈落の華〟の逆のアイテム、ホワイトホールを創る〝天空の星〟を作動させろ。九尾が持っている筈だ・・

・・人使いの荒い奴だな、橋姫。すぐに休み取れるか分からんぞ。今は人手不足だからな・・

・・分かった、分かった。戻れたらまたバイト始めるわ。ただし、人間の姿で勉強しながらな・・

・・まあ、良いだろう。店長の機嫌が良ければいいけどな・・

落花星人は、くるくると空中で回転してお客様の喝采を浴びていた。そして、一通り演技が終わるとお辞儀をして裏口に向かって歩いていた。

＊　＊　＊

明日菜と雛子は修行中に着用していた長袖のレオタードに着替えると、柚希の指定した特訓用の部屋に来ていた。

「弥生さんのしていた特訓をやりたいとは、良い心掛けだね。明日菜、雛子」

「はい、マンコに蹴り一発でのたうち回るようではいけないと実感しました。やっぱり、そんな事まで想定して鍛えていた。弥生先輩は素晴らしいです」

「うん、良いねぇ。だけど、私は厳しいよ。ここでは、鬼教官と呼ばれているからね。いくら四姫の青姫と朱姫でも手を抜かないからね。失神しても知らないよ」

「はい、問題ありません。失神するまで強いて下さい。私たちは先輩たちのように、もっと強くなりたいんです」

「ようし、分かった。それじゃ、まず鞭からだ。はい、足を大きく開いて。ああ、それと、この特訓は私が教育中の生徒にも見学させるから、後輩にみっともない姿、見せないように」

「はい、柚希さん。お願いします」

明日菜と雛子は、柚希の指示通り大きく足を開き、両手は背中に回した。

「いいかい、この姿勢から動かないように。まずはマンコを鞭で１００回打つ。その姿勢を崩したら回数はリセットされて始めからカウントになるからね」

柚希の説明に二人は息を呑んで頷いていた。柚希は後ろで座って見学している柚希の生徒の中から一人の女子を呼び出した。

「桐谷栄子だ。今のところ一番見込みがある生徒かな。今日は栄子に手伝って貰う。いいか、栄子。相手が青姫と朱姫でも遠慮しなくて良いから思い切り打つんだよ」

「はい、分かりました、教官」

黒いハーフトップブラに黒いスパッツを穿いた栄子は鞭を持ち二人の前に立つ。

「まず私が明日菜のマンコを鞭で打つ。栄子が雛子だ。そして、２０発打ったら入れ代わるからね。ほら、明日菜も雛子も鞭でマンコ

打ちやすいように腰を前に突き出しなよ」

「は、はい……」

「あっ、そうそう。栄子には瘤鞭を使って貰うから。瘤がある分破壊力が増しているから栄子が使ってもそこそこ威力あると思うよ。私は普通の一本鞭使うから。それじゃ、いくよ」

ヒュンッ！

ヒュゴッ！

異なる鞭の音がして明日菜と雛子の開いた股間に鞭が叩き込まれた。

「あぶうううぅぅぅぅぅぅーーっ！」

「あびゃあぁぁぁぁぁぁぁぁーーっ！」

動くなと柚希に言われていた明日菜と雛子であるが、開いた股間に鞭を叩き込まれ、両手で股間を押さえて床を転げ回っていた。

「ちょとう、一発で何転がっているんだよ。後輩たちが見てるのに恥ずかしくないの。早く立って股広げて」

柚希が呆れたように明日菜と雛子に命令する。明日菜と雛子は、股間を押さえたまま、よろよろと立ち上がると、両手を縛って倒れないように固定して下さいと懇願する。

「仕方ないなぁ」

柚希は二人の頭上からロープを垂らし、そのロープで二人の両手を上げたまま縛り付けて固定する。そして、両脚も左右からのロープで大きく開いたまま閉じられないように固定してしまった。

「これでもう、逃げられないから連続でいくよ」

柚希は、栄子に合図して再び鞭を二人の性器に叩き込んだ。そして、今度は鞭を振る手を休めずに連続で打ち込んでいく。

ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ

「あびゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーっ!!」

ショーーーーッ

連続で性器を鞭打たれ、明日菜と雛子は尿を漏らしてしまっていた。

「何やってるの、明日菜、雛子。こんな事でおしっこ漏らして恥ずかしいよ。弥生さんが言ってたけど、マンコ鞭で打たれて気持ちいいと思えるようにならないと駄目だって。二人、みたいに痛いと思っているようでは、まだまだ修行が足らないよ。これはもう徹底的に鍛えてあげるしかないね」

「はい、お願いします、柚希さん。私たちはマンコを鍛えて弥生先輩のように必ず強くなります」

明日菜と雛子は泣きながら、柚希と栄子が自分たちの性器を鞭で打ち安いように腰を前に突き出していた。

29話、思い出される記憶

29話、思い出される記憶

性器を鞭で打たれている明日菜と雛子は、両腕と両脚を拘束され、鞭で打たれ続け、尿を漏らした上、白目を剥き、口から泡を吹いて失神していた。

「まったく、だらしないね。良いか、お前たち、よく聞きな。私たちの相手は人外だ。人間が相手のように優しくはない。私や八千穂も妖怪に捕まって拷問された経験もある。妖怪は私たちを捕まえると弱点を徹底的に責めてくる。それが、マンコだ。そこを集中して徹底的に責めて壊しにくる。相手は妖怪、手加減なんてしてくれないからね。人間では考えられない程残酷な手口で、マンコを壊していくんだ。そこで気絶してしまったら、もう終わりなんだよ。どんなにマンコを壊されても意識を保つように訓練しないと駄目なんだよ。これから、お前たちにもマンコを責めて鍛えていくからね。訓練以外にも自分でマンコを責めて常に鍛えていくように。分かった」

「はい、教官」

生徒たちは声を揃えて返事をしていた。確かに相手は人外である。人間の常識や情け等通用しない世界なのである。生徒たちも、今までの四姫の受けた拷問など資料で見て知っているが、改めて言われると身が引き締まる思いだった。

「よし、それでは、コイツらの意識が戻るまで少し休憩しようか」

柚希の言葉で、生徒たちは緊張した空気を吐くが、その時、緊急招集用のベルが鳴り出した。そして、柚希の携帯も震え出す。

「ああ、八千穂。今は青姫と朱姫は無理だよ。特訓してて気絶してる。白姫と玄姫は……。そうなのか。じゃあ、アイツらは……。分かった、じゃあ私が行くよ。うん、生徒も連れて行く。あの池のある公園か。あまり良い思い出ないけど、行ってくるよ。いや、八千穂はいいよ。ここに残っていてくれないと困るでしょ」

柚希は電話を切ると栄子に声をかけた。

「出動だ、栄子に一緒に来て貰う。他の者は自習しておくように。いいね」

「わ、私ですか……」

柚希の話を聞いた後なので栄子が不安そうに呟くが、柚希は早く行くよと強引に栄子を引き連れていってしまう。残された生徒たちは顔を見合わせながら、ひそひそ囁きあっていた。

＊　＊　＊

大嶽丸は店長の高田に頭を下げていた。九尾は那須の殺生河原で眠っている筈である。そこまで行ってアイテムを手に入れてくるには1日では無理だろう。なので大嶽丸は店長に2日間の休みを申請していた。そこに昔の知り合いがいるので人手不足を解消する為、連

れてくるという名目だった。高田も大嶽丸の知り合いならば体力的には問題ないだろうと大いに興味が湧いたようで、あっさりとＯＫしてくれた。

・・よし、これで九尾を上手いこと連れてきて働かせてやる・・

大嶽丸は、勝手にそんな事を考えながら急いで旅立っていった。

＊　＊　＊

ちふみたちの中学校では、普通に授業が行われまるで以前と変わりがないように見えたが、それは表面上の事で実際には色々な変化があった。

まず、自殺してしまった教師の小川芳子に代わり〝伊東〟という男性教師が赴任してきた。そして、吉田深雪たちのグループは全員姿が見えなくなっていた。深雪たちについては、普段から真面目に授業に出ている方が珍しいので、教師も他の生徒も気にしていないようであった。むしろ、いない方が平和で嬉しいという雰囲気さえあったのだ。しかし、木沢が気になっていたのは天宮野菊の姿も見えない事であった。

・・あの時、俺、嫌な事を言ってしまって天宮、学校に来たくなくなったのかな・・

木沢は、魍魎化したクロに乗って消えていった野菊の姿が忘れられなかった。そして、木沢以外にも野菊の不在が気になっているのが、保田ちふみである。木沢と良美の話から、野菊が廃工場にやって来たのは分かっている。それから、姿が見えないという事は……。ち

ふみは小学生の時のおばけ屋敷の事件を思い出していた。あの時、ちふみの友人の敏行たちは異界に呑み込まれてしまった。今回も野菊は異界に迷い込んでしまったのではと、ちふみは思っていた。明日菜と雛子は、ちふみの願いを聞いて工場内を調べてくれたが、妖怪が多数いた気配はあるが、異界への通路が開いた気配はないと言っていた。それなら、妖怪に何処かに連れ去られたのでは言ったが、それでは漠然としすぎて行方を追う事は不可能と言われてしまった。

・・野菊さんは、絶対何処かで助けを待っているよ。早く助けてあげないと・・

ちふみは、野菊のプライベートな事で何かヒントはないかと考えたが、そう考えると野菊のプライベートはほとんど知らない事に気付き茫然となっていた。

＊　＊　＊

柚希と栄子は、ロードバイクで公園まで来ていた。

・・嫌な思い出の公園だけど、あの時の異界との亀裂はもう塞いであるし、あんな妖怪がそうそう出現するわけないしね・・

柚希と栄子はロードバイクを降りて公園の中に入っていく。とたんに周囲の雰囲気が変わり、じっとりと肌に絡み付く嫌な気配に包まれていた。

「栄子、私の後ろに……。油断しないように……。周囲に気を配って」

「はい……」

栄子から緊張した声が返ってくる。栄子にしてみれば初めての実戦である。緊張するのが当たり前であった。二人は、公園の中心、池に向かって慎重に歩いていく。ここの池は以前、人喰い池と呼ばれていた池だ。ここで、柚希は殺された（注）。股から真っ二つに裂かれ殺されたのだ。柚希は、その嫌な思い出を考えないように進んでいた。その時……。

「おーい、おーい」

柚希たちを呼ぶ声が聞こえてきた。

・・あの時と同じだ……・・

柚希の全身から冷たい汗が流れてきた。

（注）Ｒ１８短編「性器から真っ二つに裂かれる柚希と、串刺しにされ股を裂かれる八千穂」参照。柚希と八千穂は、妖怪十鬼神の牛御前に挑むが、その前に受けていた毒の影響で、牛御前に惨殺される。

３０話、運命の螺旋からの脱出

３０話、運命の螺旋からの脱出

柚希は、嫌な思い出が甦り、全身に汗をかいていた。

「おーい、おーい」

相変わらず声が聞こえる。柚希には、また殺してやるから早く来いと言っているように聞こえた。

「栄子、すぐに逃げて。そして、ここにはもう近付かないで。八千穂にも絶対に来るなと伝えてくれる。けっきょく、運命からは逃れられないんだよ。私は、ここで殺される運命なんだ……」

「そ、そんな……」

栄子は、こんな弱気な柚希の姿を初めて見ていた。鬼教官と呼ばれ自分達を強いている自信たっぷりの柚希が、まるでもう消えてしまいそうな程、頼りなく見えている。

「教官、私も戦いますよ。私が戦えると思ったから教官も連れてきてくれたのでしょう」

「ダメだよ。確かに栄子は普通の妖怪なら戦えると思っている。けれど、今ここに現れてくるのは神話級の妖怪だ。当時、現役だった

私たち四姫が全滅しそうになった程の妖怪なんだよ。栄子はすぐに戻って、ここに誰も入らないように閉鎖する手続きをとってちょうだい」

「そんな、なんの役にも立たないで逃げるのは嫌です」

「役には立つよ。危険を知らせるのも重要な任務だよ。さあ、早くっ」

栄子は、柚希に突き飛ばされていた。栄子は、柚希の顔を見ると、キッと唇を噛んで公園の出口に向かって全力で走り出していた。

・・教官、すぐに援軍を連れて来ます。無茶だけはしないで下さい・・

栄子は、公園の出口の駐車場でロードバイクに跨がると全力でペダルを漕ぎ出した。

＊　＊　＊

学校の休み時間、ちふみは尿意を覚えトイレに行こうと席を立った。だが、その時、頭の中に声が聞こえる。

・・教壇に立ってスカートを捲り、そのまま放尿しなさい・・

ちふみは操られるように、ふらふらと教壇の上に立つと、足を開いて制服のスカートを捲った。ちふみの白い下着が丸見えになる。教室に残っていた生徒たちは、ちふみが何をしているのか意味が分か

らず、目を丸くしてちふみを見ていた。

ショーーーーッ

その大勢のクラスメイトが見ている前でちふみは、下着を穿いたまま尿を漏らしていた。下着の股間の中心と脇から尿が溢れだし、教壇とちふみの太ももを汚していく。クラスメイトたちは、口を開けたまま声も出せず、茫然とちふみを見ていた。そして、尿を漏らしながらちふみは右手を自分の股間に伸ばし、濡れた下着の上から自慰を始めてしまった。

「あっ、あっ、あっ、あっ……」

ちふみが小さく声を上げ始める。それを見ていたクラスメイトたちも皆、顔を赤くして男子も女子も自分の股間に手を当てていた。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おぅっ」

クラス中から声が上がり始め、男子はズボンを下ろし陰茎を剥き出しにして、自分の性器をしごいている。そして、女子も下着に手を入れ自分の膣に指を挿れていた。

「イクッ……。イクゥゥゥーッ……」

ちふみが一際大きな声を出した後、ガックリと教壇に崩れ落ちていた。他のクラスメイトたちも全員、男子は射精し、女子は絶頂を迎えて惚けていた。その様子を、教室の窓から覗いて笑っている者がいた。ちふみたちと同じセーラー服を着た、その女子は満足気に微

笑んでいた。そして、スカートの裾を翻すと、窓から離れて行った。

＊　＊　＊

栄子から報告を受けた魍魎討伐機関では、混乱が起きていた。まず柚希を救援に行かなければならない。

・・柚希、無茶しないで下さいよ。運命からは逃れられない。違いますよ、柚希。運命は自分自身の手で変えるものです。そんなものに負けてはいけません・・

八千穂は、しかし相手があの時と同じ神話級の妖怪なら救援に向かわせるのも相当に実力がある者でなければならないと考える。自分が動ければ良いのだが、ここで指揮する者も必要になる。とにかく、明日菜と雛子を向かわせ、警察にも連絡をとり公園一帯を閉鎖して貰う。

・・白姫と玄姫は今は任務で不在だ。あの二人も別の任務についている。やはり、私が行かないと・・

けっきょく八千穂も、居ても立ってもいられず現場に向かう準備をしていた。そこへ栄子がまたやって来る。自分も現場に戻ると主張し譲らない。

「仕方ありません。今は時間が惜しいです。どうしてもと言うならば、自己責任で来なさい」

八千穂は、冷たく言い放つが栄子は嬉しそうにハイッと大きく返事

をしていた。

＊　＊　＊

柚希は、慎重に池に向かって進んでいく。しかし、池の上には〝水蛭子〟の姿はなかった。柚希は、ホッと胸を撫で下ろす。

・・〝水蛭子〟がいなければ多少戦いやすいよ。私も、あの時とは違う。玄姫の力は無いけれど、成長しているからね。倒せないまでも、八千穂たちが対策を考えられる時間を稼がせて貰うよ・・

柚希は、少しでも動きを軽くするため着ていたトレーニングウェアを脱ぎ、黒いスポーツブラと黒い下着、そして黒いサイハイソックスだけの姿になる。

「おーい、おーい」

声が、だんだんと近付いてくる。柚希は周囲に注意を払って進んでいく。その時、柚希の股間を凄まじい激痛が襲った。柚希は、その激痛に尿を漏らしてしまっていた。

「うがぁぁぁっ……」

苦痛の声を上げ柚希が自分の股間を見ると、黒い足の爪先が自分の股間にめり込んでいた。この一撃で柚希の膣は裂け、尿と共に血が溢れ出ていた。

・・影男……。私の影に潜んでいたのか・・

以前の柚希であれば、この一撃で意識を失っていただろうが、今回の柚希は、影男のこの攻撃に耐えていた。

・・弥生さんの特訓を私もやっているんだよ。これくらいで私を倒せると思わないで欲しいね・・

柚希は、自分の性器を襲う激痛に耐えながら、なんと膣で影男の爪先を咥え込み逃げられないように固定し、印契を結んでいた。

31話、公園の惨劇

31話、公園の惨劇

印契を結んだ柚希は真言を唱える。

「ノウマク・サンマンダ・バザラダン・センダマカロシャダ・ソワタヤ・ウン・タラタ・カン・マン」

魔を砕く不動明王の真言だ。影男は悲鳴を上げながら塵となり消滅していった。その時、空間がバリッと裂け、そこから下水が詰まったようなゴボッという音と共に大量の妖怪が吐き出された。

・・くっ、百鬼夜行の妖怪か・・

柚希は、迎え撃つ構えだがゴボゴボと空間の裂け目から涌き出る妖怪の数は優に百体を越えていた。

・・ここで止めないと大変な事になるよ・・

柚希は、妖怪の群れの中で孤軍奮闘するが、多勢に無勢である。柚希は手足を掴まれ動きを封じられてしまった。そして、ブラと下着も剥ぎ取られ、サイハイソックスだけの姿にされていた。柚希を捕まえてからも妖怪は湧いてきている。このまま、空間の裂け目を封印しなければ、この一帯は妖怪に占拠されてしまうだろう。

「ううっ……」

柚希は、大量に湧いている地面から生えた手だけの妖怪〝頬撫で〟に手足を大の字に押さえ付けられ、口も塞がれていた。そこへ、座頭のような姿の妖怪が現れる。

「これは、良い贄になりそうだ。この娘の心を恐怖と苦痛と絶望で塗り潰せば、我等の主の力が更に強くなるであろう。この娘を拷問するのだ。死ぬより苦しい苦痛を与えてやれ」

妖怪は、柚希に向かって笑いながら手を開く。その妖怪の手のひらにはギョロリとした大きな目がついていた。

・・妖怪〝手の目〟だね。ふん、私はそんな拷問に負けないよ。私が、ここで拷問にあっていれば八千穂たちが対策を練る時間が稼げる。好都合だよ・・

柚希は、強がりではなく本心からそう思っていた。しかし、それは大きな間違いだった。柚希自身が生徒に言っていたように、相手は人外である。人間の常識が通じるような相手ではないのだ。柚希は、この後、それを思い知らされる。柚希の心は砕け、恐怖と絶望で塗り潰されていくのだ。

「では、俺からいこうか」

柚希の前に巨大な白いゴリラのような妖怪が現れた。妖怪〝白猿〟だった。そして、白猿はその巨大な拳で柚希に殴りかかってくる。手足を押さえられている柚希は、無防備な状態でまるでサンドバッグのように殴られていた。

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ

「ふごうううっ！！」

柚希の全身が容赦なく殴りつけられる。柚希の顔面も腫れ上がり、鼻の骨は折れ、歯も折れてしまっている。涙と鼻水で汚れていた柚希の顔面は、さらに鼻血と吐血で汚れていく。そんな状態になっても柚希はまだ殴られ続けていた。

「人間にしては頑張るではないか。面白い、どこまで頑張れるかな？」

白猿は一歩さがると今度は蹴りを入れてきた。柚希の開かされた股間に鋭い蹴りが打ち込まれる。

ズドゥウゥッ！！

「んごうううぅぅーっ！！」

性器に強烈な一撃を食らい柚希は悶絶する。性器から尿もチョロチョロと漏れていた。しかし、白猿は、続けて柚希の性器を蹴り上げる。

ズドッ、ズドッ、ズドッ、ズドッ、ズドッ、ズドッ、ズドッ、ズドッ！！

「んんんんんんんんんんーーーっ！！！」

柚希は、押さえられた口の隙間から、ぶくぶくと泡を吹き出してい

た。そして、両目がクルッと白目を剥くと、全身から力が抜けていた。頬撫でが柚希の体を放すと、柚希は地面に倒れ、体をビクビク痙攣させている。

「未だ未だ拷問は始まったばかりだ。存分に苦しめてやるよ」

白猿は、柚希の頬をピシャピシャと打ち、意識を戻らせる。そして、そのまま髪を持って吊り上げた。

「あうぅぅぅーっ！」

柚希が、呻き声を出すが、白猿はそのまま柚希を吊ってゆらゆらと振っていた。すると、今度は両手が鋭いハサミになった妖怪〝網切り〟が現れる。チョキチョキとハサミを鳴らし近付いてくる。そして、柚希の胸の先端、乳首を両手のハサミで挟んでいた。

「ひいいぃぃぃーーーーっ！！」

柚希が、悲鳴を上げるが周囲の妖怪は楽しそうに大声を上げて笑っていた。網切りも楽しそうに笑いながら両手のハサミを閉じていた。

ジョキンッ、ジョキンッ！！

「ひやあぁぁぁぁぁぁぁーーーっ！！！」

柚希の両方の乳首は網切りに切断され、地面にころっと落ちていた。柚希は、涙を流し絶叫するが、白猿は地面に転がった柚希の乳首を足でグリグリと踏み潰してしまう。だが、それで終わりではなかった。柚希は、吊られたまま足を大きく開かされる。そして、柚希の小陰唇が摘まれ、びろーんと引き伸ばされた。

「いやぁーっ、ゆるしてえぇぇぇーーっ！！」

柚希は、次に自分がされる事を察して泣き叫ぶが、網切りは、柚希の想像通り、引き伸ばした柚希の小陰唇をハサミで挟んでいた。

「やめてっ、お願いしますうぅぅーーっ！」

柚希は、涙を浮かべて懇願するが、網切りはハサミを閉じていた。

ジョリッ！

「痛いいいぃぃーーっ！！」

絶叫する柚希に構わず網切りは、柚希の小陰唇を切っていく。

ジョリッ、ジョリッ、ジョリッ、ジョリッ、ジョリッ、ジョリッ、ジョリッ

「いたあぁぁーっ、痛いようぅぅーーっ！！」

ボトッ

絶叫する柚希の小陰唇は切断され、哀れに地面に落ちていた。それを白猿は、また足で踏みつけグリグリと摺り潰してしまう。無様に乳首と小陰唇を切断された柚希を見て、妖怪たちは爆笑していた。その笑い声は、風に乗って遠くまで届き、地獄の底から聞こえるような不気味な笑い声は、人々の心に恐怖を植え付けていた。

32話、柚希、無惨

32話、柚希、無惨

乳首と小陰唇を切断された柚希は、ガクガクと体を震わせ号泣しているが、妖怪たちの拷問はまだ終わりではない。

「うっ、うっ、うっ、うっ」

柚希は、乳首と小陰唇を切断された痛みで泣いているだけではなかった。女にとって大切な処を切断されてしまった精神的ショックも大きかった。しかし、そんな柚希に網切りは、またハサミをチョキチョキと鳴らし残酷に笑っている。

「まだ人間の女の敏感で小さくて大切な処が残っているだろう。そこを切断しやすいように自分で勃起させて貰おうか」

「ひっ、いただぁ、そんなこと出来ないよっ。ゆるして下さいっ」

「おとなしく自分でやらないなら手助けしてやるよ」

網切りに呼ばれ、〝夜陰〟と呼ばれる婬魔が現れ柚希の割れ目をくぱぁと開き、そこをペロリと嘗めていた。すると、柚希の体に変化が起こる。柚希の全身が火照り、汗が吹き出してきた。そして、膣からも大量の愛液が溢れだし、太ももの内側を濡らしていく。

「あっ、ああーーーっ」

柚希は声を上げ、髪の毛を持たれ吊られたまま自分の股間に右手を当てるとクリトリスを激しく擦り出した。その柚希の様子を見て、頬撫でが柚希の足首を掴み左右に大きく広げる。柚希は、妖怪たちの見るなか大股開きで激しくクリトリスを擦り自慰をしていた。すると、夜陰がまた柚希の性器をペロリと嘗める。

「おっ、あああぁぁぁーっ」

柚希はさらに汗をかき、手の動きが激しくなっていく。そして、膣にも指を入れ始めた。

ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ

柚希の膣に指を出し入れする婬猥な音が響く。柚希の目は焦点が合わなくなり、半開きの口からはよだれが溢れている。

「イ、イグぅぅぅっ」

柚希が絶頂に達しようとした瞬間、柚希の腕が押さえられ性器から引き放される。絶頂寸前の柚希は激しく暴れ抵抗するが、柚希の勃起したクリトリスが網切りのハサミで挟まれた。

ジョキッッッ！！

「ひいやあああぁぁぁーーーっ！！！」

無情にも柚希はクリトリスを切断され、絶叫すると股間を押さえて地面をのたうち回っていた。まったく無様な姿だった婬魔に魅せら

れ、大勢の目の前で自慰に耽り、絶頂寸前に無理矢理止められた挙げ句、勃起していたクリトリスを切断された。柚希の切断されたクリトリスは、柚希の口の中に入れられ、無理矢理飲み込まされた。

＊　＊　＊

ちふみは、教壇の上で気がついた。自分が何をしていたのかは分かっていた。そして、クラスメイトたちもちふみの行動に取り憑かれたように、自分と同じ行為をしていた。教室の床には精液や、女子が吹いた潮が飛び散っている。ちふみは、その惨状を見て、これは自分がしてしまった奴隷契約が関係しているのではと考え、気が遠くなっていた。

＊　＊　＊

明日菜と雛子は、ロードバイクで池の公園に向かって飛ばしていた。そこは、弥生から聞いた事のある要注意の公園だ。そして、柚希と八千穂が惨殺された公園でもある。そこで、柚希が一人で妖怪を食い止めているという事だ。

「柚希さん、もう玄姫ではないのに一人では無理だよ」

「分かってる、明日菜。〝水蛭子〟がいたら、柚希さんを助けてすぐに撤退だよ」

「うん、大丈夫。弥生先輩から耳が痛くなるほど聞かされているか

らね」

明日香と雛子は、柚希の救出を第一に考えて行動しようと決めていた。最悪、柚希が殺害されていたとしても、遺体さえ取り戻せばアイテムで復活させる事が出来る。量に限りがあるアイテムの為、管理している魍魎討伐機関の責任者が許可した場合にのみ使用出来るが、今の責任者は八千穂だ。柚希になら問題なく使用してくれるだろう。しかし、なるべきそうなる前に救いだす事が肝要だ。貴重なアイテムを消費しないで済む。明日菜たちは、ペダルを漕ぐ足に一層力を入れていた。

＊　＊　＊

大嶽丸は殺生河原にいた。ここの殺生石の中で九尾が眠っている筈である。

・・さてと、どれがその殺生石かな・・

大嶽丸がキョロキョロと探していると、通りかかった老人が何かお探しですかと訊いてきた。

「殺生石という岩を観にきたのだが、以前はこの辺りにあったと思うのですけど」

「ああ、あれは数年前に割れましてな。それからも、どんどん崩れていって、今はそら、その辺の石ころと変わりませんよ」

老人は、黒く変色した硫黄臭い小さな石を指差すが、そこからは九

尾の気配は感じられなかった。

「いや、そんな筈はない。本物の殺生石がある筈だ。どこかで聞いた事はありませんか」

「殺生石はここにしかありはせんよ。ただ似た石なら有るかもしれんな」

「似た石？それは何処に？」

「鬼押し出しじゃよ。殺生石は溶岩じゃから、同じ溶岩の鬼押し出しになら似たような岩が転がっておるのではないかな」

「なるほど、かたじけない。早速行ってみよう」

言うが早いか大嶽丸の姿は老人の前から消えていた。

・・急いでいかないと休み中に戻れないぞ。無断欠勤したら店長がうるさいからな。明日菜たちにも示しがつかん・・

大嶽丸は、鬼押し出し目指して、風のように駆けていた。

33話、地獄の底

33話、地獄の底

柚希は、乳首と小陰唇、クリトリスを切断されて、惚けたように地面に転がっていた。女の大切な部分を切断されたショックは大きく、柚希の体はびくびくと痙攣するように震えている。その柚希の周りを取り囲んで妖怪たちは、指差して笑っていた。

「おいおい、油断するなよ。こいつは、あのシヴァを倒した一員だからな。網切り、こいつの舌を切っておけ。そうすれば真言を唱えられないだろう」

白猿が、用心深く網切りに命令し、柚希の口を開けると舌を摘まみ出した。そして、網切りがハサミで柚希の舌を挟む。

ジョキィィッ

「おごうぅぅーっ！！」

柚希の舌が切断され、口から大量に血が吹き出した。そこへ、妖怪〝火炎車〟が現れて、柚希の口の中を炎で焼く。柚希は頭を押さえられて、口中が焼き尽くされて炭なるまで残酷に見世物にされていた。

「印を結ばれるのも面倒だな。腕も折っておくか」

白猿は柚希の細い腕を掴むと、まるでマッチ棒を折るように簡単に折ってしまった。

ボキッッッ！！

「あああぁぁぁぁぁぁぁぁーーっ！！」

柚希は両腕を折られてしまい、印契を結ぶ事も出来なくなった。

「念のため、足も折っておくか」

白猿は泣き続ける柚希の太ももに両手を添えると、そのまま力任せに柚希の足をへし折っていた。

ボキィィィッ！！

「あうううううぅぅぅーーーっ！！！」

柚希は両足も折られてしまい、もはや動く事も出来なくなっていた。

「これで一安心か。それでは、マンコ破壊の続きをやるとするか」

柚希は、その言葉にビクッと体を震わせる。そして、折られた手足を動かして必死に逃げようとするが、簡単に押さえつけられてしまった。

「なに逃げようとしているんだ、女。これからが楽しい所だろう。しっかり、悲鳴を上げて苦しめよ」

白猿が楽しそうに笑う隣へ、一人の人間の女のような妖怪が現れた。人間と違うのは、頭に角が生え、肌が漆黒である。そして、見事に均整のとれた体をボンテージ衣裳のようなような服できつく締め付けている。〝鬼女〟と呼ばれる妖怪だった。

「うひひ、人間の女を痛めつけるのは私たち妖怪にとっては一番の楽しみだからねぇ。かつては、それを誰よりも楽しんでいた残虐非道な〝橋姫〟様が、なぜか心変りされて人間とは仲良くしろと命令を出された。それが、腑に落ちないのさ。きっと、橋姫様は操られているのに違いない。私たちは、元の残虐な橋姫様に戻って貰うために動いている。これも、〝平将門〟のおかげだね。平将門が、人間界の魍魎討伐機関が元凶だと教えてくれた。その機関の奴は全て地獄に送ってやる。まずは、お前からだよ、女。人間の女にとって大切な性器という部分を完全に破壊して地獄の苦しみを味あわせてやるよ。ああ、人間はマンコと言っているんだったか。マンコは快楽を生むらしいが、お前には快楽など与えない。与えるのは苦痛のみだ。私は、白猿ほど優しくはないからな。婬魔など使わないよ」

鬼女は残酷に笑うと、柚希の頭に丈夫な麻袋を被せ、首の所で縛ってしまう。そして、貼り付け台が用意された。周りの妖怪は鬼女の残虐さを知っているので、柚希が次に何をされるか期待して見つめていた。

「これは、お前たち人間の救世主キリストを貼り付けにした、〝ゴルゴダの釘〟だよ。これで、お前の体も貼り付けにしてやる」

鬼女は他の妖怪に手伝わせ柚希の体を貼り付け台に、ゴルゴダの釘で打ち付けていく。

ゴンッ、ゴンッ、ゴンッ、ゴンッ、ゴンッ、ゴンッ、ゴンッ、ゴン

ッ！

「んごうっっっ！！！！！！」

柚希の体は折られた腕と脚の二の腕、そして太ももをゴルゴダの釘で打ち付けられ、貼り付け台に大の字に固定された。鬼女は大きく開脚された柚希の股間を下から眺め、これ以上ないほど残虐に笑っていた。

「よし、回せ」

鬼女は柚希の体がしっかりと固定されているのを確認し、命令する。この貼り付け台は回転するような仕様になっているので、柚希の体は貼り付け台毎回転し、今度は麻袋が被された頭が下にされ、大きく開いた股間が上にされていた。すると、鬼女は太い杭のような物を取り出す。直径１０センチ程の杭は先端は円錐状に尖り、表面にはびっしりと針が埋め込まれている。

「これは古代、お前たち人間の世界ワラキアで使用された串刺し用の杭だ。当時、串刺し公と呼ばれた王は、この杭を使用して毎日女を串刺しにして楽しんでいたようだぞ。処女の女のマンコの穴に、この杭を突き刺すのだよ。女のマンコの穴はビリビリと裂け、表面の針でさらにズタズタにされる。マンコの穴を壊されて、子宮まで串刺しにされて絶命した女もいれば、マンコから口まで完全に貫通されて絶命した女もいる。どちらにしろ、地獄の苦しみを味わう事が出来るのだ。どうだ、嬉しいだろう。女として最高の苦しみだ。存分に味わって苦しむがいい」

鬼女は、杭の先端を柚希の膣口に当てる。

ヌプッ

「んあああぁぁぁーーっ！！！」

麻袋を被せられた柚希が恐怖の悲鳴を上げる。柚希の尿道からチョロチョロと尿が漏れ出していた。それは、柚希がどれ程の恐怖で怯えているのかを物語っていた。周りの妖怪は、これから柚希がされる事を想像し、期待に満ちた目で柚希を見つめていた。柚希は、手足を折られ、釘で貼り付け台に打ち付けられ、麻袋を頭に被せられた状態で、今度は性器から杭で串刺しにされようとしている。その体は汗と小便で汚れ、哀れなくらいぶるぶると震えていた。

３４話、連れ去られた柚希

柚希は、手足を折られた上に、貼り付けにされ、麻袋を頭に被せられ、これから串刺しにされようとしていた。柚希は、恐怖で尿を漏らしながら泣いていた。

「うっ、ううっ、ううっ」

麻袋の中から柚希の泣き声が篭って聞こえてくる。しかし、もうどんなに柚希が泣こうが許される事はない。

「さあ、覚悟して貰おうかね。ゆっくりと突き挿れてあげるからね」

鬼女は手に持った杭に力を入れていく。杭の先端が少しずつ柚希の膣に挿れられていく。

ぶちっ、ぶちっ、ぶちっ、ぶちっ、ぶちぃぃぃっ

「んんんおうぅぅぅぅーーーーっ！！」

柚希の膣が裂け、血が吹き出し始めた。それでも、杭はまだ5センチほどしか挿れられていない。鬼女は、さらに杭を無理矢理、柚希の膣に押し込んでいく。１０センチ、そして、１５センチ。そこで、鬼女は一旦押し込むのを止めた。

「この先は子宮だから、まずこの女の穴をズタズタにしてやるよ」

鬼女は、今度は押し込むのではなく杭を回転させていた。柚希の膣内で杭をグリグリと回転させ、杭の表面の針で膣壁を抉っていく。

「んんんんんんごうううぅぅぅぅっっ！！！」

柚希は、ぼとぼとと大便まで漏らし始めていた。鬼女は大便を漏らす柚希を、汚ない物でも見るような目で見ると、柚希が漏らした大便を、柚希が被らされている麻袋の中に入れてしまった。そして、また麻袋をきっちりと閉める。柚希は、自分の大便を麻袋に入れられ、それを頭に被らされていた。

「さあ、次は子宮だね。もっと苦しいからね。ああ、ゾクゾクするわね」

鬼女は、再び杭に力を入れ、柚希の中に押し込んでいく。そして、ズボッという手応えの後、杭は柚希の子宮内に突き抜けた。

「んんんんんん、があああああぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

柚希は一際大きく絶叫すると、体がビクンビクンと痙攣しだした。もう、柚希の死へのカウントダウンが始まったようだったが、柚希の顔は麻袋で隠されているので、その苦悶の表情は分からなかった。鬼女は、ここでもまた杭を止め、回転させる。柚希の子宮も、膣同様ズタズタに破壊された。鬼女は、満足そうに柚希の痙攣する体を眺めると、妖怪〝貂（てん）〟を呼んだ。

「薬をくれるか」

鬼女は、貂から霊薬を貰っていた。貂は怪我に効く薬を運んでくるとも云われる妖怪である。鬼女は、柚希の膣から杭を抜くと、ズタズタにされた膣と子宮に霊薬を振りかける。すると、みるみる柚希の膣と子宮が完治していった。

「くくく、それでは第2ラウンドは異界で行うとしよう。邪魔が入っては興醒めだからな」

鬼女が残酷に笑うと、他の妖怪も一斉に笑いだした。そして、柚希を含め、妖怪たちは霧のように消えていった。後に残ったのは、地面に作られた柚希が漏らした尿の水溜まりだけであった。

＊　＊　＊

明日菜と雛子は公園に着くと、それぞれリボンとクラブを持ち中央の池を目指して慎重に進んでいた。すると、シャカシャカと何かを研ぐ音がする。それも、四方八方から聞こえてくる。怪しい気配も周囲から漂っていた。

「〝小豆洗い〟のようだね。気をつけて、ヒナ。こいつは姿が見えない妖怪だよ」

「柚希さんが心配だから、真言で一気に片付けよう、明日菜」

「わかった」

明日菜と雛子は素早く印契を結ぶと、真言を唱えた。

「ノウマク・サンマンダ・バザラダン・センダマカロシャダ・ソワタヤ・ウン・タラタ・カン・マン」

不動明王の真言は、魔を払い、厄災を砕くと云われている。二人の真言で、音は聞こえなくなり、周囲の気配も消えていた。

「急ごう、ヒナ」

二人は、池の畔に立っていた。かつて、人喰い池と呼ばれていたこの池は、弥生たちの奮闘で普通の池に姿を変えていた。それが、また禍々しい池に戻ってしまったのかと、明日菜と雛子は微かに波立つ水面を観察してみるが、異常は見られない。池の周囲にも格段おかしいところはなかった。

「桐谷さんは、池の畔だと言っていたよね」

「うん、間違いないよ。でも、柚希さんの姿も、妖怪の姿もないね」

「何か、嫌な予感がするね……」

「まさか、ね……」

そこへ、後から出発してきた八千穂がやって来た。その後ろには栄子の姿もある。

「警察の方には、この公園を封鎖して貰っています。一般の人が入って来てしまう事はないでしょう」

八千穂の言葉でひとまず安心した明日菜たちだったが、柚希と妖怪

の姿が見えない事に不安に駆られていた。

「教官は私を逃がして、妖怪の出現する出口を封印するつもりだったと思います。必ずどこかにいる筈です」

栄子が泣きそうな顔で、明日菜たちに訴えていた。その時、八千穂は地面に残っている水溜まりを発見していた。そして、明日菜たちに、一度引き上げようと伝えていた。

「どうしてですか、八千穂様。教官は怪我をして隠れているのかもしれない。きっと、どこかにいますよ。酷い怪我で声も出せなくて、動けないのかもしれませんよ。私は一人でも探します」

栄子は、八千穂に逆らって一人で走り出そうとした。それを、明日菜と雛子が止める。

「残念ですけど柚希はもう殺されているでしょう。あの水溜まり、私は覚えがあります。私も以前、妖怪に集団で襲われた事があります（注）。散々、暴行された挙げ句、おしっこを漏らして異界に連れ去られました。あの水溜まりは柚希の漏らした跡だと思います。妖怪は人間の恐怖をエネルギーにしています。特に強い人間が恐怖に堕ちた時には大量のエネルギーが手に入るようで、その場合、異界に連れ去って果てしなく拷問を続けて、殺します。私も殺されました。柚希も地獄の拷問を受けて殺されるでしょう。それは間違いありません。ですから、ここにいても無意味です。帰って対策を考えましょう」

八千穂は、栄子に向かって辛そうに話していた。

（注）「移ろう季節に想いを馳せる君」５話・報復の対象、参照して下さい。八千穂が襲われ、連れ去られてしまいます。

35話、柚希、串刺し

35話、柚希、串刺し

異界に連れ去られた柚希は、もう恥も外聞もなくぶるぶる震え、懇願していた。殺されるのは仕方ない。それは柚希も納得していた。自分も妖怪たちを数えきれない程倒してきたのだ。捕らえられた以上殺されるのは当たり前の事と思われた。しかし、この拷問だけは許して欲しかった。一撃で殺して欲しかったのだが、妖怪たちは柚希を徹底的に痛め付けて、地獄の苦痛の中で殺すつもりのようであった。

「一つ言っておく。アイテムで復活させて貰おうなんて考えるなよ。お前の体は、復活出来ないように最後は地獄の溶岩で溶かしてやるからな。それまで、徹底的に拷問にかけてやる。お前の仲間のように途中で恐怖と苦痛と絶望で発狂するだろうな。殺す寸前まで拷問して、傷を治してまた拷問する。それを、お前が発狂するまで繰り返してやる。くくく、楽しみだよ。何回拷問を受けて発狂するのか」

アイテム〝命の雫〟は弥生などのように体が消滅してしまった者は復活出来ない。溶岩で体を溶かされてしまえば、当然ながら復活出来ないのである。柚希は空中に仰向けにされ股を大きく開かされていた。異界では妖怪の能力が更に高まる為、力のある妖怪であれば思念だけで人間の動きを拘束する事が出来るのだ。鬼女は、性器を丸出しにして空中に固定されている柚希の姿を見て大笑いすると、柚希の傷を治した性器に木刀を思い切り叩き込む。

バキャッ！！

「あぐうううううぅぅぅぅっ！」

麻袋を被せられている柚希の篭った悲鳴が聞こえるが、鬼女はよけい楽しそうに柚希の割れ目に木刀を叩き込んでいた。

バキャッ、バキャッ、バキャッ、バキャッ、バキャッ、バキャッ、バキャッ、バキャッ！！！

「んごうううううぅうううううっ！！！！！」

木刀を連続で打ち込まれ、柚希の性器が潰されていく。小陰唇が、大陰唇が、そして、クリトリスが潰され血塗れになっていく。もちろん、恥骨にもヒビが入っていた。

「うははっ、どうだい。マンコ潰された気分は。次はマンコの中も潰してやるよ」

鬼女は、柚希の膣に狙いをつけ、今度は突きを繰り出した。

ドスッッッ！！！

「んぎゃあああああぁぁぁぁぁっっっ！！！」

柚希の子宮に鋭い突きが打ち込まれていた。木刀の切っ先は柚希の子宮勁部を突き破り、子宮内部にまで達している。柚希は、また糞尿を漏らしてしまっていた。

「汚ない女だね。まあ、それじゃ二回目のマンコ破壊いこうか」

鬼女は、柚希の膣に連続で休みなく木刀を突き挿れる。人間には不可能であるが、妖怪である鬼女には可能な高速の連続突きだった。

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ！！！

「んごうううううぅぅぅぅぅぅーーっ！！！」

絶叫する柚希の子宮が、ぐちゃぐちゃに破壊されていく。そして、ついに柚希の子宮を木刀が突き破った。柚希の膣から鮮血が吹き出す。

「いい様だね。次はこっちを壊すよ」

鬼女は、また柚希の性器に狙いをつけ木刀を突き出す。

「いやぁぁぁぁっ！」

鬼女の気合いと共に木刀は高速で突き出され、柚希の性器に命中する。それは、なんと柚希の尿を漏らす尿道に突き挿れられた。

ぶちっ、ぶちっ、ぶちっ、ぶちっ、ぶちっ、ぶちぃぃぃっ！！！

「ふごうううううぅぅぅぅーーっ！！！」

柚希の尿道は一瞬でビリビリに裂け、木刀は膀胱を突き破る。鬼女は、さらに木刀をグリグリとひねり柚希の膀胱を完全に破壊すると木刀を抜いた。柚希の尿道からも鮮血が吹き出す。もう、柚希は性

器を破壊されビクビクと体を痙攣させ呻き声を上げている。

「無様で良いねぇ。それじゃあ、また治してやるよ」

鬼女は、また柚希の性器に薬を塗り、損傷された性器を治していく。しばらくすると柚希の性器は、すっかり元の状態に戻っていた。

「次は、わしにやらせてくれ」

ガチャガチャと甲冑を鳴らして出て来たのは、瀬戸物の徳利の頭に甲冑を身につけた妖怪〝瀬戸大将〟だった。瀬戸大将はすらりと腰に差した大刀を抜く。そして、柚希の膣に刀の切っ先を挿れた。

ヌプッ

「ふうううぅぅっ」

自分の膣に入ってきた冷たい刀の感触に、柚希はまた性器が破壊されるのではと声を上げていた。

ツウゥゥゥッ

刀は柚希の膣に挿れられていき、その切っ先が柚希の子宮に突き当たる。

「ひぐうううぅっ」

その、チクッとした痛みで柚希が悲鳴を上げるが、柚希の地獄はここからだった。

ザシュッ

「んぎいいいいいいいいーーーっ！！！」

瀬戸大将は、容赦なく刀を突き入れていく。柚希の子宮は切り裂かれ、刀はそこで止まらずに、さらに奥まで突き刺されていった。

ズリュウッ

「あぼっ、あぼっ、あぼっ、あぼっ、あぼううううっ」

性器から串刺しにされていく柚希は、体をガタガタと震わせ苦しんでいるが、妖怪たちは、そんな柚希の姿を楽しそうに笑って見ていた。そして、鬼女が麻袋に包まれた柚希の頭を上を向くように押さえつける。

ザシュッ！！

「ごぽあっっっ」

瀬戸大将が刀の柄まで、刀を柚希の性器に突き入れると、麻袋を突き破って刀の切っ先が飛び出していた。柚希は性器から口まで、完全に串刺しにされ哀れにビクビクと体を震わせている。妖怪たちは、その柚希の惨めな姿を見て、さらに大声で笑っていた。

その時、ここより遠く離れた異界の一画で何かが動き出していた。

36話、プロテクター

本部に戻った八千穂たちは、異界に乗り込む準備をしていた。以前、修行中に異界に行った明日菜と雛子は、そこで残酷に殺されていた（注）。それほど危険な場所が異界である。準備は、やり過ぎるくらいでも、まだ不足かと思われた。

「皆さん、下着を脱いで、これを装着して下さい」

八千穂が、厚みのある板状の物に三つの突起が飛び出た物を明日菜たちに手渡した。蒲鉾を薄くしたようなラウンド状の金属から、太さの違う杭のような突起が三本突き出ている。前方に一番細い杭、次の真ん中が一番太い杭、最後が中間という感じだった。

「これは、マンコプロテクターです。この三つの突起をそれぞれおしっこの穴、マンコの穴、お尻の穴に挿れて装着します。妖怪の攻撃からマンコを守ってくれるプロテクターですが、万全ではありません。弥生さんの例を見ても分かるように、妖怪は徹底的にマンコを責めて破壊しようとしてきます。それから完全に守る事は出来ませんが、ある程度の防御にはなってくれると思います」

八千穂の説明で、明日菜たちは成る程と思っていた。確かに性器にガードがあれば、敵に攻撃されても耐えられるだろう。さっそく下着を脱いで装着しようとするが、膣と肛門はともかく、尿道には痛

くて挿れる事が出来ないでいた。

「何をやっているんですか。普段からおしっこの穴に物を挿れる訓練をしていないからですよ。弥生さんは常日頃からプジーを挿れて、拡張する事に余念がなかったですよ。人差し指をおしっこの穴に挿れて、尿道オナニーが出来ると聞いた事があります。弥生さんは異性との経験はなかったのですが、その分訓練を怠らなかったようですよ」

「さすが、弥生先輩です。私も指を挿れられるように頑張ります」

「私も、指2本は入るように拡張します」

「あっ、ずるいよ、ヒナ。それなら私は3本目指します」

「いいから早く装着しなさい」

お互い張り合い始めた明日菜と雛子に呆れながら八千穂が促すと、栄子はもうプロテクターを性器に装着している。3人は、栄子の意外な実力に目を丸くしていた。

＊　＊　＊

性器から口まで串刺しにされた柚希は、体をぶるぶる震わせて最後の時を迎えようとしているかに見えたが、まだまだ妖怪たちは楽しもうとしていた。瀬戸大将は、脇差しを抜くと、今度は柚希の尿道口に切っ先を当てた。

ツプッ！

そのまま尿道を切り裂くように刀を突き入れていく。そして、ある程度突き込んだ後、力任せに刀を尿道に突き入れた。

ズドゥウゥッ！

ぶつぅっ！

なんと、尿道から突き入れられた脇差しは、尿道を切り裂き、膀胱を貫通し、柚希の下腹を破り突き出ていた。柚希の腹から飛び出した刀を見て、また笑い声が起こる。そして、刀が抜かれると柚希の性器は薬でまた元に戻された。

「ひひひ、次はわしじゃな」

瀬戸大将の次に現れたのは、長い髪に目と口だけがついた〝おどろ髪〟という妖怪だった。おどろ髪は、自分の長い髪をグルグルと捩っていく。すると、それは太いドリルのような形状に変化していた。直径３０センチはありそうな巨大なドリルだった。

「けけけ、これで貴様の穴を抉って拡げてやろう。こんな太い物を挿れられた経験はなかろう。喜ぶのだ人間の女」

おどろ髪はドリルを回転させて柚希の膣に近づけていくが、どう考えても柚希の膣、いや人間の女の膣に入るサイズではない。これを膣に突き挿れられるという事は、膣、いや性器全てを破壊されるという事に等しい。つまり、柚希の性器はまた破壊されるのである。ここは、異界。救援など期待出来る所ではない。柚希は、弥生のように性器を破壊され続ける事になる。柚希の心は絶望で塗り潰され、

少しでも早く絶命したいと願うようになっていた。そして、おどろ髪の巨大なドリルが柚希の性器に近づく。

キューーーン

回転音が不気味に近づいた瞬間、柚希の性器に激痛が走る。膣が、小陰唇が、大陰唇が全てが肉片となって飛び散っていく。

「んごうううううーーーーっ！！」

性器をドリルで抉られる耐えられない激痛で、柚希は絶叫し大便を漏らしていた。

「おやおや、こっちの汚ない穴も壊さんといかんね」

おどろ髪は、髪を束ねてもう1本ドリルを作った。そして、そのドリルは柚希の肛門に突き入れた。

びち、びち、びち、びち

「んぐうううううーーーっ！！！」

柚希の肛門の括約筋は一瞬で肉片となり大便と一緒に飛び散っていた。そして、そのまま直腸まで破壊される。その頃、膣に挿れられたドリルは膣のみならず、尿道や膀胱も破壊し肉片に変え、子宮に迫っていた。それ以外の柚希の性器は全てドリルで抉られ肉片に変えられていた。そして、ついに柚希の子宮にドリルが到達する。

キューーーン！！

びち、びち、びち、びち

「んごうううううぅぅぅーーーーっ！！！！」

ドリルは何の抵抗も無しに柚希の子宮を削っていく。そして、それは子宮だけではなかった。柚希の卵巣もドリルに巻き込まれ、粉々に粉砕され消滅していく。おどろ髪がドリルを抜いた後は、柚希の股間におおきな穴がぽっかりと無惨に空いていた。

「次は俺たちだな」

巨大なノコギリを持った2体の鬼が現れていた。妖怪〝阿（あ）〟と妖怪〝吽（うん）〟だった。阿吽の呼吸と呼ばれる程息の合った妖怪であった。柚希への性器破壊は、終わりなく続いていく。柚希は許される事などない。妖怪たちが飽きるまで、性器を破壊するというこの宴は続いていくのだった。

（注）「移ろう季節に想いを馳せる君」三部１８話、異界の惨劇、参照。明日菜と雛子が残酷に殺されてしまいます。

37話、新任教師

37話、新任教師

妖怪〝阿〟と妖怪〝吽〟は巨大な両曳きのノコギリを持って柚希の前に立つ。このノコギリは二人で両端を持って巨大な材木等を曳く巨大なノコギリだ。阿と吽は柚希の体を開脚させ頭を下に固定する。もう、何処をノコギリで曳くつもりか簡単に推測出来るであろう。そう、性器だ。柚希の割れ目をノコギリで曳いて、本当の割れ目にするつもりのようだったが、ここで阿が周りを取り囲んでいる妖怪たちを見て言う。

「誰かアイテム〝命の雫〟を持っていないのか？」

「私は持ってるよ」

「わしもある」

鬼女と、手の目が答え、他にも何体か妖怪が手を上げていた。

「〝命の雫〟は人間にしか効果がないアイテムだ。だから、ここで使う事にして、こいつを殺すまで拷問しないか。殺したらアイテムで生き返らせて、また殺す。それを繰り返してやるんだよ。その方が楽しいだろう」

阿が恐ろしい提案をする。それは西園寺弥生がやられたように永遠

に性器破壊を繰り返されるという事だ。これをやられる女にとっては最悪の拷問と言えた。

「良いねぇ。確かにアイテムは消費するけれど、人間にしか効果ないから意味ないしね。性器壊すだけじゃなく殺すなら、もっと酷い事も出来るから絶対楽しいね」

鬼女も乗り気になり、他の妖怪も賛成の意を示していた。

「それでは、さっそく俺たちから始めようか」

阿と吽はノコギリを柚希の性器に当てると、まるで材木を切断するように、ギコギコとノコギリを動かし始めた。

「ふごうううううぅぅぅぅっ！！」

柚希が麻袋の中で絶叫するが、阿吽は息を合わせて柚希の性器を切断していく。

ギコギコ、ギコギコ、ギコギコ、ギコギコ

絶叫する柚希の性器がノコギリで曳かれていく。もう、柚希の恥丘の半分まで切断され、恥骨を削る嫌な音が響いている。柚希の悲鳴がどんどん弱くなっていった。そして、臍のあたりまで切断された柚希は、もう声を出す事も動く事もなくなっていた。

＊　＊　＊

ちふみたちの中学校で、深雪たちの姿が消え一時的に平和な時が流れていたが、不思議なもので一つのグループがいなくなると、すぐに次のグループが台頭してくる。山本梓は、どうしてこういう人は次から次へと出てくるのだろうと不思議でならなかった。クラスの中で深雪たちに代わるように、次のグループが出来ていた。篠崎陽子と、その取り巻きだ。深雪たちがいた頃は、特に目立つ事はなく普通の生徒と思われていたが、深雪たちが姿を消してから、その態度が変わってきていた。

「ねえねえ、小川先生って生徒に犯されて自殺したんだよね。大人のクセに犯されたくらいで自殺なんて笑う」

「雄一くんたちに回されたらしいよ。あいつら変態だから変な事やられたんじゃないの」

「あーあ、死ぬ前に俺にも犯させてくれれば良かったのに」

授業中だというのに大声で話している陽子たちだが、教壇で黒板に漢文を書いている女性教師は、無視を決め込んでいた。別の教師が陽子たちを注意したところ、陽子に頬を叩かれ、取り巻きたちによってたかって服を脱がされ辱しめられたのだ。なので、今では深雪たち同様、触らぬ神に祟りなしで、ほぼ全ての教師が相手にしないように努めている。だが、それでも陽子たちの方から、ちょっかいを出してくる事もあるのだ。

「先生、聞こえてるんでしょう。何、無視してんの、小川先生って回されて自殺しちゃったんでしょう」

「ちょっと、先生。生徒からの質問に答えない気。これは大問題だよね。こんな先生に教えて貰いたくないわ」

「ホント、酷いなこの先生。俺たちの事は無視かよ。これ、写真撮ってネットに上げようぜ。俺たちの先生は、教師失格だよって。そうすりゃ、すぐに首になるんじゃね」

「えーっ、可哀想。首になっちゃうんだ。大変、ネットに晒されたら、もう再就職も出来ないよ。この先生も自殺しちゃうかな」

陽子たちは、楽しそうに漢文の雨郷朋美先生をからかっている。朋美は、必死に耐えて陽子たちを無視して授業を進めているが、陽子たちは、さらに調子に乗ってきていた。黒板に向いている朋美にそっと陽子と和恵が近付き、いきなり陽子が朋美のスカートのホックを外し、和恵がずり降ろしていた。

「ひいいいいいいいーーっ！」

下着姿を晒され朋美は悲鳴を上げるが、陽子たちは更に下着まで脱がそうとする。

「止めなさいっ、止めてっ！」

朋美が叫ぶが、そこに男子の高志も加わり朋美を羽交い締めにして押さえてしまう。そして、するりと下着を脱がしてしまった陽子と和恵は、今度は朋美の足を持って左右に広げる。朋美の性器が、生徒たちから丸見えになっていた。

「先生、ここの芝、燃やしてあげるね」

陽子はライターをカチッと点火すると、手を伸ばして朋美の股間に火を近付け、朋美の陰毛を焼いていく。じりじりと音を立てながら、

朋美の陰毛が焼かれていき、毛が燃える異臭が辺りに漂っていた。
もう、朋美は号泣していた。

「泣かなくても良いよ、先生。ちゃんと綺麗に焼いてあげるから」

陽子は、満遍なく朋美の陰毛を焼いていく。梓は、誰か先生を助けてあげてと祈っていた。そこへ、教室のドアがガラッと開く。

「何、やっているのかな君たち」

教室に入って来たのは新しく赴任してきた伊東という男性教師だった。伊東は教室に入って来ると机に座っている生徒たちの方を向いて、白い歯を見せてニカッと笑っていた。

38話、性器焼き

38話、性器焼き

伊東は白い歯を見せてニカッと笑っていた。決まったと伊東は思っているが、梓たち生徒は笑顔なんていいから早く雨郷先生を助けてあげてと思っていた。

「君たち、何をやっているんだ。今は授業中だと思うんだが」

「はぁ、新任の先公が何言ってるんだか。これは授業だよ。見ればわかるでしょ」

陽子が、馬鹿にしたように伊東に言う。

「これが授業……。どうやら、君らみたいな馬鹿に訊いた俺も馬鹿だったよ。雨郷先生、もうこんな馬鹿に構う必要はありませんよ。お前ら、馬鹿には俺が教育してやる」

伊東の言葉に陽子も和恵も高志もカッとなり、朋美から手を放し立ち上がって伊東を睨み付けていた。伊東はぎゅっと拳を握りしめている。

「へぇ、あんたこそ馬鹿だね。私たちを殴るつもり？出来るならやってみなさいよ。赴任してきたばかりでクビになるから。今の教師なんて私たちに何も出来ないのよ……。おぐうっ……」

腕組みして伊東を見下している陽子の腹に、伊東の拳がめり込んでいた。陽子は、伊東に腹を殴られ教壇から転げ落ちゲロを吐きだした。

「やってみろと言うからやってみたけど、一発でこれか。それにしても、汚いな。自分でちゃんと掃除しとけよ」

伊東が、何事もないように言うが、床に転がって苦しそうにゲロを吐いている陽子を見て高志が激昂していた。

「てめえ、こんな事してただで済むと思ってんのか」

高志はポケットからナイフを取り出して伊東に突き付けた。キャーッと生徒たちから悲鳴があがるが、伊東はまた白い歯を見せてニカッと笑っていた。

「ふざけやがって、ぶっ殺してやんよ」

高志はナイフを振りかざして伊東に襲いかかっていた。が、伊東は軽くステップを刻んで高志の攻撃をかわす。高志は、顔を赤くして休みなくナイフを突き出すが、悉く伊東にかわされていた。

「てめえ、ふざけやがって。あまり舐めてると、後悔する事になるぞ」

「そうかい。別に構わないが、ここは教室の中だ。そんな物を振り回すのは止めてもらおうか」

伊東は、一瞬で高志との間合いに飛び込むと、鳩尾に鋭い突きを入

れていた。

「あ、あ、あ、あ」

高志は、白目を剥いて失神してしまった。

「ひっ」

一人残った和恵が小さく悲鳴を上げ逃げようとするが、簡単に伊東に捕まってしまう。

「えーと、鈴成和恵さん、だったかな。ダメだよ、一人で逃げようとしては。悪い事をしたら、ちゃんとお仕置きを受けないとね」

伊東は、和恵の両手を背中に回し、素早く結束バンドで拘束してしまう。そして、和恵のスカートを捲り上げると下着を脱がし始めた。

「ちょ、ちょっと、何してるのっ。先生がこんな事していいの。嫌っ、やだっ、止めてっ」

和恵は涙を流して叫ぶが、伊東は和恵の下着を脱がしてしまう。

「ほら、次は足を開いて」

「ううっ、許して下さい」

「あのさあ、お前たち、許してって言われて許した事ないだろう。お前たちみたいな馬鹿は、自分がやられなきゃ分からないだろうからな」

伊東は、和恵の足を開かせてモップを間に入れると、足を閉じられないように固定してしまった。

「さてと……」

伊東は、オイルライターを取り出すと、カチッと点火した。和恵は、まさかという顔でライターを見ている。伊東は、そのままライターを和恵の股間に持っていくと、和恵の僅かに生えた陰毛を燃やし始めた。

「あづうっ、あづい、あづい、あづいようっ」

和恵は、大声で泣きながら、チョロチョロと小便を漏らしてしまっていた。

「どうだ、自分がやった事をやられた気分は。反省したなら雨郷先生に謝りなさい」

「ううっ、ごめんなさい、雨郷先生。もう、許して下さい」

和恵が、泣きながら謝っているのを、ようやく落ち着いた陽子が憎々しげに見ていた。

「おっ、ゲロ治まったか。じゃあ、篠崎にも謝罪して貰おうか」

「ふざけないでよ、あんたなんかクビにしてもやるから」

「そうか、じゃあお前にもお仕置きが必要だな」

伊東は、あっという間に陽子を、和恵と同じ様に拘束してしまう。

「ああ、いけない。先に拘束してしまったな。仕方ない、これは後で弁償するよ」

伊東は、陽子の下着を切り裂き性器を露出させる。陽子の恥丘にも幼い陰毛が生えていた。伊東は、もう何も言わず陽子の陰毛を燃やし始める。

「あづいっ、あづいよぅっ！」

陽子が悲鳴を上げるが、構わず伊東は陰毛を焼き続けた。

「ほら、早く謝りなさい」

伊東が、陰毛を焼きながら陽子に言うが、陽子は頑として謝らなかった。

「謝る事も出来ない子供には、もっとお仕置きが必要だな」

伊東は、陽子の割れ目に指を当て、くぱぁと割れ目を開いた。そして、その開いた割れ目にライターの炎を近付けていく。

「うわぁぁぁっ、あづいいぃぃっ！マンコ、やけるうぅぅっ！」

陽子は絶叫するが、伊東は更に炎を近付けていく。陽子の性器の中身がジリジリと焼けていく。それでも、陽子は謝ろうとしなかった。

「あづい、あづい、あづい、あづい」

うわ言のように繰り返しながら、陽子もシャーッと小便を漏らしていた。

39話、再びの串刺し

39話、再びの串刺し

「ほらほら、早く謝らないと大事な処が黒焦げの炭になるぞ」

しかし、陽子は歯を食い縛り泣きながら、そして小便を漏らしながらも謝ろうとしない。

「謝らないって事は自分が悪いと思っていないのか。正直、ここまで自己中で他人の事を思いやれない人間は、あまり見ないな。それなら、もっと酷いお仕置きをしてやる。しっかりと反省しなさい」

伊東は、ライターを閉じるとポケットから小さな円筒形の物を取り出した。そして、それを陽子に見せる。

「なんだか分かるだろうけど、爆竹だよ。昔はこれをマンコに挿れて爆発させる私刑があったんだ。師匠に教えて貰ったんだがな。どうしても謝らないなら、これを挿れてやるよ」

しかし、陽子は無言で目を反らし謝ろうとはしない。

「良いだろう。それなら、お前のマンコを爆破してやる。後悔するなよ」

伊東は、爆竹を陽子の膣に挿れ、導火線を股間に垂らす。そして、

またカチッとライターを点火した。

「最後に訊くが、本当に謝る気はないのか」

伊東が再度確認するが、陽子は口を閉じたまま黙ったままだった。
その陽子の態度を見て伊東は、導火線に着火する。

シューッ

導火線があっという間に燃えていく。そして……。

パンッ！

「いだあああーーーっ！！」

陽子の膣が爆破され、陽子は悲鳴を上げた。陽子の性器からは白い煙が出ている。

「うひいぃぃっ、うひいぃぃぃっ！」

陽子は大声で泣いているが、いくら伊東が促しても謝罪の言葉だけは言わない気のようだった。

「いい加減自分の非を認めて謝罪した方がいいと思うが。自分がされて嫌だろう。相手も嫌だと思わないのか」

しかし、陽子は伊東が何を言っても聞く耳持たなかった。伊東は、仕方なくまた陽子の膣に爆竹を詰める。しかも、今度は1本ではなく3本だ。

「ひいいいいっ！」

さすがに怖くなった陽子が大声で悲鳴を上げる。無理もない。中学生の女の子が膣を爆破されるのだ。

「今ならまだ間に合うぞ、篠崎。早く謝れ……。そうか、残念だな」

伊東は、導火線に点火する。

パアアーーーンッ！！

「あうううぅぅぅぅっ！！！」

陽子は、膣を爆破され、口から泡を吹いて失神してしまった。

＊　＊　＊

「ははははっ、人間の女は面白いな。これは、しばらくは退屈しないで済むな」

阿と吽は、柚希を性器から頭までノコギリで真っ二つにして大声で笑っていた。

「おい、早くアイテムを使ってくれ」

阿と吽は鬼女に〝命の雫〟を使うように依頼する。鬼女が、アイテムを振りかけると真っ二つに切断された柚希の体が白い光に包まれていく。そして、柚希は元の体に戻っていた。

「おお、本当に戻ったぞ。これは便利なアイテムだな。これを使えばこの女で遊び放題じゃないか」

阿と吽は面白そうに言うが、横からお前らだけで楽しむなと他の妖怪が口を挟む。そして、長い槍を持った妖怪〝川姫〟が前に出てきた。見た目は、着物を着た大人しそうな女というイメージだが、騙されてはいけない。この妖怪に気を許してしまったら、あっという間に精気を吸い取られて殺されてしまうのだ。その川姫が、復活した柚希を見て残酷に笑っていた。柚希は相変わらず頭に麻袋を被せられたまま、うつ伏せに転がっていた。

「おい、人間の女。四つん這いになりなさい」

川姫の命令で柚希は、地面の上に四つん這いになっていた。その柚希の麻袋を被せられた頭に顔を近付けた川姫は、柚希に何か呟いていた。

「分かったら返事をしなさい。人間の女」

「はい、川姫様」

柚希は震える声で返事をしていた。そして、四つん這いのまま、さらに尻を突き出し、足を開く。惨めな格好だった。尻を突き出し足を開いた格好は、性器や肛門が妖怪たちから丸見えだ。しかも、麻袋を被せられて、まるで人間ではない物扱いだった。

「なにしてるの。早く言いなさいよ。さっき私が台詞教えたでしょ」

川姫に急かされて柚希は泣きながら、川姫に言われた台詞を言って

いた。

「私は串刺しにされる事に憧れている変態の女です。川姫様、どうかその槍で私のマンコから串刺しにして下さい」

「まだ、あるでしょう。頭も悪いのか、この女」

川姫が激昂して柚希の性器に蹴りを入れる。

「ひぎぃぃぃぃぃっ！！」

柚希は性器を両手で押さえて転げ回るが川姫に押さえられ、また四つん這いにされる。

「ほら、早くしなさいよ。このクズ女」

「ううっ、顔も袋を被せられて見て貰えないドブスで変態の私が、オナニーしているところを串刺しにして下さい」

柚希は四つん這いで尻を突き出し性器を丸出しにしながら、右手を伸ばし自慰を始めていた。その手の動きはだんだんと速く激しくなっていく。

「おっ、おっ、おっ、おっ」

声も出し始めた柚希を見て川姫はニヤリと笑う。

・・ふふ、この人間の女がイった時に逝かせてやるよ。天国から地獄へ一直線だよ・・

川姫は、残酷に笑ってそのタイミングを狙い槍を構えていた。

「イ、イグうぅぅっ！」

柚希は全身汗まみれになり、ガクッと力が抜けた瞬間だった。

「おぼうぅぅぅぅっ！」

柚希の性器に、川姫の槍が突き刺され、そのまま子宮を貫いていく。
柚希の体は妖怪たちに押さえつけられ、頭を起こされる。

「おがあぁぁぁっ！」

麻袋を被せられたままの柚希の口から槍の穂先が飛び出す。柚希は
性器から口まで串刺しにされ、体をビクビクとさせていた。

４０話、地獄絵図

４０話、地獄絵図

柚希は、再び性器から口まで串刺しにされていた。体をビクビク痙攣させているが、まだ生きていた。

「おやおや、せっかくイった瞬間に逝かせてやろうとしたのに、残念ですね。でも、グショグショのマンコ、貫かれて嬉しいだろうさ。欲しくて欲しくて溜まらないような声出していたからね。ふふふ」

川姫は、串刺しにされている哀れな柚希の姿を見る。

「あらっ、まだマンコ、ひくひくさせちゃって１本じゃ物足りないようね。本当に変態の女だわ。〝貂〟はいるかい」

嘆くように川姫は呟くと川姫は、妖怪〝貂〟を呼ぶ。

「せっかく、生きているから、このまま楽しみたいんだよ。なるべく長く生きていられる様にしてくれないかね」

貂も川姫同様、残酷に笑みを浮かべ串刺しにされている柚希の周りをクルクルと回り始めた。そして、それはどんどん速くなっていき、貂の体はまるで溶けた様に一つの輪になっている。それは、「ちびくろサンボ」で溶けてバターになってしまった虎のようであった。しかし、貂はバターになったのではない。その輪の中の柚希の体が

神々しいまでに光り始めていた。そして、目も開けていられない程、発光したかと思うと、それをピークに今度は光が弱くなっていった。一つの輪のように見えていた貂の体も元の姿に戻っていた。貂は、回転を止めると川姫に向かって頷いていた。

「済まないな、貂。これで楽しくなりそうだ。この人間の女は死ぬ程の苦痛を与えられても、死ぬ事が出来ずに地獄の苦しみを味わうんだ。想像するとゾクゾクしてくるわ」

川姫を含め妖怪たちは楽しそうに笑っているが、それをやられる柚希の方はたまったものではない。串刺しにされ押さえ付けられた体で柚希は、体を震わせて泣いていた。しかし、柚希のその姿がかえって妖怪たちの興奮を煽っていた。

川姫は、もう1本の槍を取り、その切っ先を柚希の性器に当てる。そして、もう槍が1本突き刺さっている膣に無理矢理、次の槍の切っ先も挿れていく。当然ながら柚希の膣はびりびりと裂けていった。川姫は、そのまま槍を押し込み子宮を貫通させ、柚希の体を串刺しにしていく。その柚希の体の中を貫いていく感触に川姫は興奮していた。

ズボッ!!

そして、2本目の槍が柚希の口から飛び出していた。

ぶり、ぶり、ぶり

柚希は2本の槍で串刺しにされ、また大便を漏らしていた。柚希の肛門が大きく開き、むりむりと大便が噴出してくる。そして、悪臭が辺りに漂っていた。

「人間の女の穴というのは締まりがないですね。しかも、恥もないと見えますね。ウンコ、人前で漏らして平気でいるなど考えられませんよ」

川姫は汚物でも見るように柚希を蔑んだ目で見ていた。そして、自分の鋭い爪をナイフのように変化させる。

「こんな汚ないモノは、二度と排泄出来ないようにしてあげましょうかね」

川姫は、ナイフ化した自分の爪を、柚希の肛門の括約筋の縁にプツッと突き刺す。そして、そのままぐるりと円を描くように柚希の肛門をくり貫いていった。他の妖怪たちは、川姫が何をするつもりなのかと息を呑んで見つめていた。

「さあて、それでがいきますよ」

川姫は、くり貫いた柚希の肛門を握って力を入れ引き抜く。

ズボッッッ！

「！！！！！！！！！！！！」

なんと川姫は、肛門から柚希の直腸を引き摺り出してしまっていた。まるで、綱引きでもするように、ズルズルと柚希の腸を引き出していく。柚希の体は大きく痙攣しだしていた。生きながら腸を引き摺り出されるのだ。柚希の苦痛は相当なものだろうが、川姫は構わずに腸を引き出していく。もう、直腸は全て引き出され、大腸も引き摺り出されている。川姫は、柚希の腸を引き千切ってしまわないようにゆっくりと引き抜いていた。

「楽しそうだな、川姫。私のも、それを引っ張らせてくれないか」

見ると川姫と同じ様に着物を着た女性の姿の妖怪だった。妖怪〝石妖〟、昔、伊豆の山中に現れたという妖怪である。山中で旅人に、お疲れでしょう。あんまをして差し上げましょうと話しかけ、あんまをしてくれるのだが、旅人はあまり気持ちよくて眠ってしまう。目が覚めた時には女性の姿はなく。その旅人は、その後大病を患ってしまうと云われていた。伊豆山中にあった石切場の石が妖怪化したモノと云われている。その石妖が、川姫に代わって柚希の腸を引き抜き始めた。

「これは楽しい。あんまをするより数倍楽しいではないか」

石妖も、実に楽しそうに柚希の腸を抜いていく。柚希は小腸まで抜かれ始め、その長さは3メートル以上にもなっていた。柚希の体は、もう激しく痙攣を始めている。押さえつけていた妖怪たちが手を放すと柚希は、まるで壊れたロボットのように意味もなく両手両足を動かし暴れていた。その無様な姿を見て、五つ塚の怪女と云われる妖怪が現れた。昔、信濃川に近い野原の五つ塚と呼ばれる古い塚が立った場所に現れていた妖怪だ。この妖怪の姿を見た者に、決して他の者に話してはいけないと言って立ち去るが、もし話してしまうと睾丸を抜かれて惨殺されると云われている妖怪だ。この妖怪が鉈を持って現れると、柚希の暴れている手足を、ダン、ダンと切断していってしまった。柚希は串刺しにされた胴体から、腸を数メートルも引き抜かれ虫の息になっていたが、まだ死んでいなかった。

「まだ、もう一つ穴が残っているではないか。そこも責めてやらんではいかんだろう」

膣と肛門以外で残った穴。尿道も柚希は責められようとしていた。

４１話、報復の計画

陽子は、性器を爆破され気絶していた。伊東は気絶している高志と陽子を一番後ろの席まで運んで行き、そこに置いておく。そして、和恵にも後ろの席で大人しくしていなさいと指示していた。

「はい、分かりました……」

和恵は伊東を恐れたようにビクッと体を震わせると、素直に返事をして逃げるように席についていた。

「雨郷先生、それでは気を取り直して授業を続けて下さい。みんなも、しっかり勉強するようにな。そして、もしまた何かあったら俺にすぐ教えてくれ」

伊東は胸を叩いて、白い歯を見せてニカッと笑うが、朋美も生徒たちも伊東が心配でならなかった。

「あの、伊東先生。私の事よりあなたの方が心配ですよ。あの子たちは普通の中学生ではありません。何をされるか分かりませんよ」

朋美は伊東を心配するが、伊東は問題ありませんよと軽く答えていた。

「俺は、こういった問題を解決する為に赴任して来たのです。雨郷先生は心配する必要はありません。みんなも心配は要らないからな、こういう事があったらすぐに俺に相談するんだぞ」

伊東は、ぐるっと教室を見回すと、白い歯を見せてニカッと笑った。そして、朋美に後を任せ教室を出て行った。その後、目が覚めた陽子と高志は、和恵を連れて、いつの間にか教室から姿を消していた。

＊　＊　＊

「アイツ、絶対に許せないよ」

「ああ、俺もだ」

「……」

陽子と高志は怒りに燃えていた。和恵も、もちろん怒りもあったが、それ以上に伊東に対して恐れを抱いていた。

「でも、なんかあの先生、今までの先生と違うよ。ヤバい感じがする。関わらない方が良いんじゃない」

「和恵、何ビビってんのよ。マンコの毛焼かれて頭にこないの。私は、毛だけじゃなくてマンコも焼かれたんだよ。絶対に許さないよ」

陽子の怒りは相当なもので、自分が悪いにも関わらず伊東を許す気は全然なかった。

「あんなの殺しちゃっても良いよね。仲間集めてボコボコにしてやろうよ。それで、助けてぇって泣いてるとこ殺してあげるの。私に、こんな事をしたのを後悔しながら死んでいくのよ」

「良いね。あんな奴は、ぶっ殺すにかぎる。町外れの廃工場にでも連れ込んで、そこで始末してやろうぜ」

陽子と高志はひそひそと計画を練り始めていた。初めは黙って聞いていた和恵も、だんだんと乗り気になり、いつの間にか積極的に発言していた。

「それじゃ今日、アイツが学校から出てきたら決行ね」

三人はニヤリと笑うと、スマートフォンを手に取り、それぞれの仲間と連絡を取り始めていた。

＊　＊　＊

魍魎討伐機関本部の中庭に明日菜たちは集まっていた。ここから異界への扉を開けて乗り込むつもりだったのである。早く異界に乗り込みたいが良美の来るのを待っているのである。柚希の危機という連絡を受けて、良美は私も絶対に行きますと譲らない為、待っているのだ。良美にとっては柚希は命の恩人である。何があっても助けたいという気持ちで一杯であった。良美は異界に行った事もあるし、月での最終決戦にも参加していた。なので、機関の人間ではないが経験のない人間よりは遥かに役に立つと思われた。そこへ、良美が息を切らせて走ってきた。

「すいません。お待たせしました。電磁銃のチャージも満タンにしてきました。それに、クロちゃんも来てくれました」

「これは心強いですね。それでは皆さん、準備は良いですか？」

八千穂は、みんなの顔を見る。明日菜、雛子、栄子、良美、クロ、全員八千穂の顔を見て頷いていた。この少数精鋭で異界に乗り込むのだ。八千穂は、機関の責任者を如月から譲られた時に引き継がれた秘術を使用する。すると、空間が歪みはじめ、パリンと砕け散っていた。そして、空間に裂け目が出来ている。それを見て明日菜と雛子は以前異界に行った時の事を思い出す。二人は、異界に行き、そこで妖怪たちに惨殺されていたのだ。だが、二人は恐れているわけではない。自分たちは成長したのだ。あの頃とは違う。今の自分たちは青姫と朱姫なのだ。そして、それは弥生と刹那から受け継いだ名だ。二人の瞳には微塵も恐れなど感じられなかった。

「行きましょう、八千穂さん。異界へ」

「必ず柚希さんを助けましょう」

明日菜と雛子が力強く拳を上げる。八千穂も大きく頷くと、異界へと続く空間の裂け目に入っていった。

＊　＊　＊

校門を抜けた所で伊東に朋美が追い付いて来た。

「伊東先生、気をつけて下さい。絶対に狙ってきますから。前にも

先生みたいな方がいたのですよ。山田先生という男の先生です。当時、吉田深雪という女子生徒のグループが力を持っていて、山田先生はそのグループをなんとか更正させようと頑張っていらしたんです。でも、最後にはもう心をボロボロにされて自殺してしまいました。先生には、山田先生のようになって欲しくないのです。本当に、もしあの子たちが現れたら逃げて下さい。それは、恥でも何でもないです。教師も人間なのですから」

朋美は、必死に伊東に懇願していた。しかし、伊東は白い歯を見せてニカッと笑っていた。

「大丈夫ですよ、雨郷先生。俺は、その山田先生とは違いますから」

伊東は、そこまで言って、後は心の中で言っていた。

・・俺は、奴らを更正させようなんて思っていませんから。俺は、ああいう奴らは排除しますよ。俺を狙ってくるなら好都合です・・

伊東は、ご心配ありがとうございますと朋美に告げ、夕暮れの街の中へ一人歩き出していた。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n0755lf/

【閲覧注意】朧気な夕暮れに映る面影　（ＢＩ　Ｔｈｉｒｄ）

2025年11月22日02時42分発行